

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第 12 号

Japanese Studies in East Asia

No.12

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2024 年 9 月 20 日発行

卷頭言

東アジア日本学研究学会

会長 李東哲

東アジア日本学研究学会は今からちょうど6年前の2018年9月、中国山東省煙台市にある魯東大学で発足し、「第一回東アジア日本学研究国際シンポジウム」を開催しました。そして、翌年の5月に学会誌の『東アジア日本学研究』創刊号を出しましたが、創刊号には厳正な査読を経て学術論文25本、研究ノート5本が掲載されることになりました。創刊号掲載論文はその本数もさることながら、創刊号ならではの質が高く、バラエティに富む多分野の論文が紙面を飾りました。

それ以来、2019年暮れから世界を席巻した丸々3年間も続いたコロナ禍にもかかわらず、毎年春季号と秋季号を刊行し、今回も順調に第12号を出す運びとなりました。これは偏に積極的に投稿してくださった投稿者の皆様、学会誌編集委の皆様ならびに査読に関わった皆様の心労による賜物であると思われます。

6年間合計12号に掲載された論文（基調講演の論文も含む）や研究ノートはトータルで170本ですが、年度別に見ると、2019年41本、2020年43本、2021年23本、2022年21本、2023年22本、2024年20本で、掲載本数から言えば2021年以降は2019年と2020年のおよそ半数前後に過ぎません。これはおそらくコロナ禍の影響で対面による年度大会が開催できなかったからだと見ることができます。次に、研究分野から見てみると、言語研究（主として日本語と日本語との対照研究）51本、日本語教育40本で、全体的に言語と教育研究が半数以上を占めています。それから文学研究28本、社会研究26本、文化研究15本、歴史やその他の研究10本と続いています。投稿者の中にはやはり日本語教育に携わっている方々や日本語専攻の院生が多いことを物語っています。また、著者別（教師・研究者と院生別）の割合から見ますと、教師や研究者の論文は105本（共著の場合は第一著者を基準にする）で61.8%、院生の論文は65本で38.2%を占めています。院生の会員が少なくないことと関係あるでしょう。さらに、キーワードの出現頻度数では、「日本語教育」7回、「複合動詞」6回、「夏目漱石」と「教育」がそれぞれ5回、「許容度」、「後藤朝太郎」、「日本留学」がそれぞれ4回ヒットされています（3回以下は省略）。

以上の統計を通して、これまでの6年間、合計12号に掲載された論文のアウトラインがくっきり浮かんでくると思います。

学会誌は1つの学会のシンボルであり、顔でもあります。言い換えれば、ある学会の優劣は学会誌によって表されるのではないでしょうか。したがって、これからも本学会の「顔を立てる」ために、人類社会に役立つより良い論文が投稿され、掲載されることを期待してやみません。

目 次

卷頭言	李東哲(東アジア日本学研究学会会長)	1
-----	--------------------	---

【論文】

顏佳婷	二重否定表現「ナイワケデハナイ」について	3
羅非凡	複合動詞「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の特徴について	17
謝展眉	中国人学習者の日本語文産出における有生性の影響 —絵描写課題による一考察—	33
劉婧怡	レベル別の日本語教科書の計量的分析 —一日中比較の観点から—	49
王淋萱	「調味料の添加」を表す動詞についての日中対照研究	67
崔雪梅	夏目漱石文学におけるニーチェ哲学の受容 —『虞美人草』を例にして—	85
村下慣一	合気道研究における社会学的アプローチの意義とはなにか? —ヴェーバー的モダニティ論の批判的超克を目指して—	97
学会役員		113
学会動向		114
会員消息		115
東アジア日本学研究学会会則		116
『東アジア日本学研究』投稿要領		119
『東アジア日本学研究』執筆要領		122
『東アジア日本学研究』査読要領		123
編集後記		125

二重否定表現「ナイワケデハナイ」について

顏 佳婷（北京外国语大学大学院生）

要旨

二重否定は、常に「否定の否定」であって、2つの否定で相殺され肯定に戻ることができる。しかし、それは二重否定が単純な相互取り消し効果を示しているというわけではない。これまでの日本語学研究において、二重否定に関する研究は、二重否定の判断基準、構造の種類、語用の役割などを含み、全体像を把握するものが多く、具体的な表現に焦点を当てた研究は少ない。本論文は、現代日本語で典型的な二重否定表現「ナイワケデハナイ」に注目し、語用論の視点から考察していくものである。

本論文では、否定の意図の有無に基づいて、「ナイワケデハナイ」を「否定式」と「非否定式」に分けた。結果として、「否定式」は四つの発話場面に対応していることが明らかになった。即ち、「相手が否定的な質問を出すとき」、「相手の発言に否定的な意見があるとき」、「相手が否定的な意見を持ち得ると話し手が予測するとき」、「話し手自身の発話に否定的な含意があるとき」。この際、「ナイワケデハナイ」は主に「否定的な意味を受け取ったことを相手にみせる」を担っている。一方、「非否定式」は「前に位置する「～ナイ」は誰のものでもなく、それを否定することも考えにくいとき」と対応しており、「ナイワケデハナイ」は主に「主観的な気持ちを相手に伝える」役割を果たしていることが明らかになった。

キーワード：二重否定、語用論、発話場面、付加的役割

はじめに

「ナイワケデハナイ」は典型的な二重否定表現の一種であるが、それを考察対象として積極的に取り扱う資料は現状において見当たらず、「ワケデハナイ」や「二重否定」などの下位項目としてしか言及されていない。例えば、森田・松木(1989)は「……ないくぬ>わけではない」を「わけではない」の下位項目として立てている。その用法について、二重否定の形を取ることによって消極的に事実を肯定する態度を示し、多くは逆接の表現を伴って後の語句にかかる、と説明している。また、日本語記述文法研究会(2007)では、「ないわけではない」について、聞き手などの「～ない」という推論を否定するものであるとされている。それらの知見は有益なものとして本研究も参考にしているが、「ナイワケデハナイ」の用法がはっきりしているとは言い難い。

本稿では、「ナイワケデハナイ」が、会話中のどのような位置において、どのような行為を実現する手続きとして使用されているか、といった点から記述を行っていく。具体的に、「ナイワケデハナイ」の発話場面と発話の付加的役割という二つの点から論を展開していく。これによって、「ナイワケデハナイ」ないし日本語の二重否定表現の機能解明に一方近づけるのではないかと考える。

1. 「ナイワケデハナイ」の発話場面

「ナイワケデハナイ」は、特定の場面なしには発話されにくい。「ナイワケデハナイ」の付加的役割を論じるための下準備として、本節では、「ナイワケデハナイ」が容易に発言される場面、すなわち、会話中のどのような位置において産出されているかを紹介していく。主に 5 つの場面が挙げられる。

1.1 相手が否定的な質問を出すとき

第一の場面は、「ナイワケデハナイ」文が発話される典型的な状況である。相手が否定疑問文で質問する時、話し手が先行発話のキーワードを繰り返し、先行発話との強い関連性を示唆しつつ、それに対する即応的反応（＝認めたくない）を示している。次の例(1)(2)を見てみよう。

- (1) (研究室にて、皆は授業の後、映画をみることを相談しているが、B が不機嫌そうな顔をしている)

A : 授業の後、映画館に行きたくないですか？

B : 行きたくないわけじゃないんですけど…／行きたいんですけど…／行きたくないです。

- (2) (研究室にて、皆は授業の後、映画をみることを相談している)

A : 授業の後、映画館に行きたいですか？

B : 行きたいです。／行きたくないです。／? 行きたくないわけではないです。

例(1)は否定疑問文、例(2)は普通疑問文でそれぞれ同じ内容について質問している。その返答として例(2)での「ナイワケデハナイ」式の返答だけが不自然に響く。そこで、話し手は「聞き手にどこまで詳細な情報を与えればよいか」をリアルタイムで推し量っていると考えると、この差異を説明できる。例(2)の場合、A は、B が映画館に行きたいか行きたくないかを知りたいはずであり、それは B からしても容易に理解できるはずである。仮に、例(2)で B は「行きたくないわけではないです」と言ったら、A が「自分が行きたくない」と勝手に推測するニュアンスを帶びてしまう。逆に、例(1)では、「行きたくないですか」という否定的な質問を出したら、A がその状況を知っていると B が推測できる。

また、コーパスから抽出した用例として、例(3)～(4)が挙げられる。

(3) 「そこへ成見沢が来たんだったよな。」

「あ、えっと、はい、そうでした。」

先生に言われて、成見沢がうなずく。

「で、成見沢に聞いても、どこへ行ったのか判らないと言うんだ。二人で雁首並べて首をひねったもんだよ。」

「それからどうしたんですか。」と、龍之介くんが質問する。

「どうしたもこうしたも、いないものは仕方がない。職員室に行ったよ。」

なんだか無責任なような気がするけど、確かに、ないものはどうしようもない。

「先生は気にならなかつたんですか、ニワトリがいなくなつてたこと。」

「気にならないわけじゃないけどな、まあ、逃げ出したんだろう。そのうちどつかその辺から、ひょっこり出てくるさ。だからな、成見沢、お前は責任感じることはないんだからな。ニワトリが勝手に逃げたのは、お前のせいじゃない、事故みたいなもんだ。だからあんまり思いつめるなよ。」

(PB49_00063 『ほうかご探偵隊』)

(4) 「どうして、お父さんが、僕の弁当を作ってくれるの？お母さん、病気なのかな」と追い討ちをかけたら、

「それよ。お母さんはな。一種の病気じゃねえかと思うんだ。書家の娘だから、頭が悪くて、味が判らねえってのに、毎朝、俺やお前よりも早く起きて、お前の弁当のおかず作ってる」

「お母さんが、作っちゃいけないの」

「いけねえわけじゃないが、味の判らねえ奴が、おかずを作ったって食べる身にもなってみろ。まずくて食う気がしねえだろ」

(LBm5_00053 『食い食い虫』)

例(3)～例(4)は、上記例(1)と同様の例であり、相手の「～なかつたんですか」とか「～ないの」という質問に対し、「～ないわけじゃない」という表現が使いやすいのは、直接的な肯定表現、すなわち、「気になる」、「いける」よりも、「まず相手の考えを否定する」ということに眼目が置かれているからだろう。話し手は、自分が質問を受け取ったと相手に見せるため、「ナイワケデハナイ」を発話していると考えられる。

1.2 相手の発言に否定的な意見があるとき

第一の場面と異なり、この場面では、相手がある事柄について話した後、話し手がその言い方が不適切だと気付いた。そのため、「ナイワケデハナイ」を発話している。

(5) 「まさか」

「嘘じやないわよ、あなただってあの男の様子を見たらおかしいってわかるわ！」

あの白いロープで猫の首をきゅうっと絞めて、木から死体をぶら下げておくつもりなのよ！」

あたしがこれほど一所懸命話しているのに、籠の壁の向こう側、さらにプラスチックのキャリアの内側から聞こえて来る正太郎の声にはあまり熱意が感じられなかつた。

「信じてないのね、正太郎。でもあたしの勘は当たるのよ。何か大きな悲劇が起きてからじや遅いのよ！」

「「チエルシーの勘を信じないわけじやないんだ…そうじゃなくて、ちょっと考えてことがあるんだよ」

「考えてること？」

(PB59_00401 『透明な貴婦人の謎』)

(6) 「パウエル建設です」

深みのある声が答えた。

「やあ、ジェイス。最近、仕事がないから電話番をしているなんて言うなよ」ギルがからかった。

ジェイスージェイソン・パウエルとは、納屋の建築を依頼して以来の仲だつた。ジェイソンは笑つた。

「仕事がないわけじやないさ。秘書が休憩中なんだ。いまのところ、商売はうまくいっているよ。そっちはどうだい、ギル？」

(PB19_00252 『キスは厳禁！』)

例(5)では、「信じてないのね」というチエルシーの発言を受けて、正太郎が「信じないわけじやない」と返答している。これによって、チエルシーの勘違いを否定している。同様に、例(6)では、ギルは「仕事がないから」という発言に気付き、これを間違いだと考え、「仕事がないわけじやない」と返事している。第一の場面と第二の場面は、いずれも相手の発言に刺激された表現といえる。

1.3 相手が否定的な意見を持ち得ると話し手が予測するとき

相手が発話で否定的な意見を明確に述べていなくても、「ナイワケデハナイ」文を使用する場合が存在する。話し手は、先行発話を根拠として、予測される否定的な意見を否認するため、「ナイワケデハナイ」文を発話している。これは、工藤(1997)で言及された「ワケデハナイ」の「結論の否定」用法と関連している。結論が否定的であるため、「ナイワケデハナイ」文が生じている。たとえば次の例(7)を見られたい。

(7) A 「問題はそこだよ。少し、週刊誌的な見方になるが、その男が有名人だったとする。女の部屋にいる事実を、よそに知られるとまずいわけだ。恐らく、隣りにフリーのカメラマンが住んでいることは知っていたんだろう。そして、そのカメラマンが橋場を救いに来たとなれば、彼としては姿を現すわけにはいかないよ。写真に撮られたらまずいからね。そこで、彼女の部屋のどこかに身を隠し、ごたごたが納まるのを待っていた」

B 「ははあ、ずいぶん大胆な説ですね」

A 「大胆と言っても、根拠がないわけではないよ。何しろ、この写真に、これだけはっきりと男の靴が写っているんだ」

B 「有名人ですか、あり得ますね。彼女の勤めているクラブには、芸能人やスポーツ選手、相撲取りなんかもよく来るそうですから、その中の一人と個人的な交際をしている可能性は十分にあります」

(PB29_00335 『殺人買います』)

例(7)において、A と B がある事件について推理と仮説を交わしている。B の発話には、「根拠がない」のような表現が出ないにも関わらず、A はその発言から「根拠がないだろう」と読み取れるため、それを取りあげて否認していると考えられる。「根拠がないわけではないよ」と述べ、写真にはっきりと男の靴が写っていることを根拠に、B の発言の不適切さを指摘している。逆に、話し手が、ただ「根拠がある」ことを相手に伝える場合、「ナイワケデハナイ」文は通常要らない。肯定表現と意味的には同じであるが、それぞれを発話する時、発話者の心的プロセスは異なっている。

(8) 「つまり、ビリーは両親が亡くなったことを、悲劇ではなく生の一面にすぎないと考えるってことね」

「そうなんだが、誤解しないでほしい。ビリーは悲しんでいないわけじゃない。深い喪失感に苦しんでいるはずだよ。喪失感はどの文化でも同じだ。でも今は、自分が知っているただひとつ的方法で両親の死を受けとめることが大切なんだ」

(PB19_00690 『恋人たちの聖地』)

(9) フレデリックは顔を上げ、教授の顔を見た。

「僕が自信がもてないのは演奏のことじゃないんです。皇帝の御前で弾くことに疑問を感じるんです」

すると、ホフマンの晴れやかな顔が曇った。

「フレデリック、君の気持ちがわからないわけではないよ」

諭すような口調で彼は言う。

(PB19_00411 『小説ショパン』)

例(8)では、話し手は相手の発話から、「ビリーは悲しんでないか」と感じている。このような誤解を生じないために、自分の方から先回り否定している。例(9)では、フレデリックは皇帝の前で演奏することについて、消極的な心情を述べている。それに対して、ホフマン先生は「こいつは私が彼の気持ちがわからないと思っているだろう」と想定しているから、「君の気持ちがわからないわけではない」と発言している。

以上のように、この場面での「ナイワケデハナイ」は、直前の発話や行動に表れた相手の認識や想定上の問題点を指摘した後否定する表現として理解することができる。

1.4 話し手自身の発話に否定的な含意があるとき

上記3つの状況において、「ナイワケデハナイ」は相手の発話に続いて出現しやすい。すなわち、相手の発話や考えを否定するために使用されている。ただし、「ナイワケデハナイ」の使用はそれだけに限らず、話し手が自分の発言に否定的な含意がある場合に、「ナイワケデハナイ」を使って補足説明をするという使い方もある。この用法は、実際の例で確認されている。次の例(10)～(12)について考える。

(10) 「彼女はわたしについて話してくれたわ」

アリスは続けた。

「わたしが思っていることや、わたしに影響を与え、今も悩ませている生き立ちのことを。彼女の苦言をいつも快く聞いていたわけではないよ。認めたくないこともいろいろ言われたわ。それでも彼女の魅力に逆らえずに通いつづけるうちに、いつしか友人になったの」

「予知というものを信じておられますか？」

アリスは眉を寄せて考えた。

「最初、彼女に会うようになったのは楽しかったから、珍しかったからよ。わたしは息子が生まれてから決まりきった生活を送ることを選んだけれど、たまの娯楽を必要としていなかったわけではないわ。特別な体験を」

彼女がにっこりすると眉間の皺は消えた。

「クラリッサは紛れもなく特別だわ」

「つまり、あなたは娯楽を求めて彼女に会いに行っていたと？」

(PB49_00123 『愛する予感』)

例(10)において、アリスはクラリッサと会うようになった経緯を述べている。しかし、聞き手は、ここで述べられている事柄からは、「たまの娯楽を必要としていなかった」とは推論しないだろう。その事実を知っているのは話し手だけである。ここでは、話し手は相手の考えに反発しているのではなく、自分の発話で伝わりかねない否定的な含意を先に

取り上げて否定している。否定的な含意が話し手自身の発話に基づくか相手の発話に基づくかによって、この分類を設けている。

(11) 「今日、リンゼイ・クロフォードと話したかどうか知りたいんだが」

「ええ、たしかに。でもご心配はいりませんよ。彼女は優秀なビジネスウーマンです。準備も完璧でした。とにかく、わたしはリンゼイになら安心して融資したでしょう」

それからチャーリーはあわててつけ加えた。

「あなたの事業を評価していないわけではないですよ、ミスター・ダニエルズ。充分、評価しております。わたしでなにかお役にたてることがありましたら、どうぞおっしゃってください」

(PB19_00252 『キスは厳禁！』)

(12) 「ねらってるのは、もちろん世界チャンピオン。なれると思ってるし、そのためにはあまいこともやってられないし。世界チャンピオンになっても、それを維持というか、もっと向上していくために、がんばんなきやいけないですけどね。世界一になったからって、それ以上、上に行けないわけじゃない。っていうか、それ以上、上の走りをしていかなくちゃいけないと思うんですよね。」

(PB2n_00133 『将来の仕事なり方完全ガイド』)

例(11)～例(12)も同様の例であるように思われる。例(11)は、チャーリーは自分の話を聞いたら、相手が「私のことを信頼していないか」、「私の事業を評価していないか」などと思うかもしれないが、そうではない、ということを早めに伝達していると解釈される。例(12)において、「世界一」は「上に行けない」ということを意味しない。

以上3つの事例が示しているように、聞き手が否定的な意味を感じ取るかどうかに関わらず、話し手は「ナイワケデハナイ」文を使用して、あらかじめ自分の発話に含まれるかもしれない否定的な意味を否定している。

1.5 前に位置する「～ナイ」は誰のものでもなく、それを否定することも考えにくいとき

以上の例を見ていると、「ナイワケデハナイ」はある人の否定的な発言や考えを否認するように思われるが、次の例はそれでは説明が出来ない。例えば例(13)の文脈に示された事象に基づいて誰かが「先生は老後を安楽に暮らそうと思わない」と推論するとは考えられない。例(14)での「可能性がない」という考えは聞き手に属するとは考えられない。例(15)での「グリーンの切符を持っていなければ、グリーン車に入れない」という考えは規制に従って得るものと理解できるが、特定の人の考えに帰属できない。したがって、「ナ

「イワケデハナイ」は明確した否定的な含意を否認することからなる表現とは限らないことになる。

(13) 「根津君のとき、真田紐を使ったのは、むしろ、望月君や由利さんに、警告したつもりだったんです。けれど、それもムダでした。望月君などは、私が直接ホテルで会って、善人に立ち返るように、話をしたのですがね。彼は笑っていました。もっとも、私はそれを予期していたんですがね。それから最後の由利さん。あの女は助けてやりたかった。広恵さんを助けても、警察には喋らないだろうと、由利さんを誤魔化していたんですが…だめでした。放っておくと、あの毒牙が…箕さん、あなたに及びそうなのを、私は知ったんです。用意していった鉄棒をふりおろすとき、私は目をつぶってしまいました。あの一撃は、同時に、私の頭上にも当たったと同じでした。私のこの気持ち…あなたにはとても分からんでしょうが…」

「先生。いま、どちらにいらっしゃるのですか？」

と、早百合は訊いていたが、先生は構わずに続けた。

「昔から私の心の中には、彼等の悪を見て見ぬふりをしながら、老後を安楽に暮らそうと思わないわけではなかったんですよ。けれども、私は箕弘美さんのとき、その悪の芽をむしらず、その結果、今日の有様です。…」

(LBm9_00081 『謎の幽霊探偵』)

(14) 「そうなんですが、そうでもしないと、大和説派は絶対に邪馬台国を畿内へ持つてゆけませんし、九州説派もそれを九州内に収めるのが非常に難しくなるからです。もちろん、東を南と読み替えるについては、それなりの根拠があるのですが」
「どういうこと？」

「陳寿の書いた原本には東とあったのを、書き写すとき南と間違えた一などというのは論外ですが、倭人伝の記述は方角がかなり狂っているんです。ですから、九十度ぐらいずれている可能性があるんです。また、当時、日本列島は九州を北にして南へ長くのびた島と考えられていた可能性もないわけではないんです」

「中国に、古い地図でも残っているの？」

(LBh9_00105 『「邪馬台国」の謎』殺人事件)

(15) 「なぜですか？ グリーンには当日、被害者の三宅夕子と、その男たちしかいなかった筈ですよ。若いアベックは、田沢湖から、乗って来たんですから」

「確かに、そうだがね。最初から、グリーン車にいて、車掌に顔を見られている。犯人としたら、ずいぶん、間抜けだと思わないかね。第一、グリーンの切符を持っていなければ、グリーン車に入れないわけじゃないんだ。自由席にいて、殺す時だけ、グリーンに行ってもいいし、その方が、車掌に、顔を見られずにすむ」

(OB3X_00245 『L 特急たざわ殺人事件』)

これらの例において、話者が伝達しようとした意味、あるいは聞き手が聞き取る意味はどのようなものか。この場面では、先行するやり取りの中に「否定」のターゲットになるような要素は明確に存在しない。ただし、話し手は、好き勝手にこの話題を述べているではなく、この情報は、相手に対して価値がある、または会話の進めに対して意味があると考えている。

例(13)では、先生は自分の考えを述べているが、聞き手がその内容に詳しいか否かを明確に知りようがない。話を進める中で、相手にその内容を伝える必要性を感じ、「老後を安楽に暮らそうと思わないわけではなかったんですよ」という情報を提供している。例(14)では、邪馬台国の所在地について説明している。話し手が聞き手よりもその内容に詳しいようであり、「日本列島は九州を北にして南へ長くのびた島と考えられていた可能性もないわけではないんです」という情報を提供することで、話の展開を導いている。例(15)では、グリーン車に入るかどうかについて説明している。これは規制のようなものであるため、詳細を知っていない人にはわからない情報であるが、この情報は現在の判断において重要である。

上記の例に現れる「ナイワケデハナイ」文は聞き手の存在を厳しく要求せず、特定の誰かの考えを否定するとも言いにくい。

2. 「ナイワケデハナイ」の発話の付加的役割¹⁾

「ナイワケデハナイ」は、対応する肯定表現に対して、「普通でない」表現と言える。この「普通でない」表現は、しばしば何らかの付加的内容を伝えていると考えられる。例えば例(16)の発話の事例で、目下の文脈では「助けたい」と同義に理解できる。ここで話し手がもっと短い「助けたい」ではなく「助けたくないわけじゃない」というより冗長な表現を用いる背景には、より短い「普通の」表現を用いたら何らかの問題があるからだと考えられる。つまり、論理的に不必要的「ナイワケデハナイ」文については、妥当な理由付けが十分可能である。

(16) 「おまえを助けたくないわけじゃない。しかし、おまえに勝ち目はない」

ナイアルが答えようとしなかったので、ドギンズは続けた。

(PB19_00310 『スパイダー・ワールド』)

二重否定文に関する代表的研究は、ホーンとレヴィンソンが挙げられる。二人は、グライスの古典的分析を踏まえ、会話の推意に関する分析を修正・発展させている (Horn 2001, Levison 2000 など)。それに、二重否定文の発話の弱化的内容 (weakening effect) を、

ある物事や状況に対する「普通でない」表現を含む文の発話による非典型的な内容の推意として分析している。例えば、ホーン(2018:404-405)では、「二重否定が単純な相互取り消し効果を示しているわけではない」、「話者の側にかかる労力の少ない短い表現の代わりに、より長い有標の表現を使用することは、話者にとって単純な方を採用することが適切な状況ではなかったことを示している」と指摘している。

本節では、「ナイワケデハナイ」の発話の付加的役割について考察を行う。第1章での考察によると、場面1~4での「ナイワケデハナイ」は明確な帰属（=聞き手か話し手か）がある。本稿では、このような「ナイワケデハナイ」を「否定式」と呼ぶ。一方、場面5のように明確な帰属がない、あるいは明確に帰属し難い「ナイワケデハナイ」を「非否定式」と呼ぶ。それぞれの付加的役割は「否定的な意味を受け取ったことを相手に見せる」と「主観的な気持ちを相手に伝える」に分類される。以下では、それぞれの行為の扱いについて述べる。

2.1 否定的な意味を受け取ったことを相手に見せる

否定式「ナイワケデハナイ」とは、目下の会話で、「～ナイ」という文が事前に発話されたり、聞き手がその内容を信じていると見込まれる場合に発話される文のことである。意味的には、「否定の否定」は肯定と同義である。しかし、直接的な肯定表現と異なり、「ナイワケデハナイ」は、否定的な内容を取り上げ、それを否定する。これによって、「否定的な意味を受け取ったことを相手に見せる」という付加的役割を果たし、先行発話との関連が強調される。具体例は下記のようである。

(17) B 「ははあ、ずいぶん大胆な説ですね」

A 「大胆と言っても、根拠がないわけではないよ。何しろ、この写真に、これだけはっきりと男の靴が写っているんだ」

(PB29_00335 『殺人買います』 (7)再掲)

(18) 「そうだ。これ以上の手はない。ほぼ絶望的という状況だが、希望がまるっきりないわけじゃないぞ。盗んだのがやつらのうちのだれだか、いまからでもわかれば、まだその手もとにある可能性だって、なくはない。…」

(LBqn_00047 『名探偵ホームズ消えたラグビー選手』)

例(17)では、話し手は相手が述べた「大胆」という表現に対して、「根拠がないだろう」と読み取り、「根拠がないわけではない」と述べることでその否定的な内容を否定している。例(18)では、話し手は「希望がまるっきりないわけじゃない」と述べることで、自身の発言によって相手に抱かせる考えを話題にし、それを否定している。

これらの発話は、会話の中で焦点となっている否定的な意味を引き受け、それを明確に

した後に否定している。もし事前に発話されていない、あるいは聞き手がその内容を考えていないと思われれば、この種の「ナイワケデハナイ」文の発話は自然ではないと考えられる。ホーン(2018:86)は、否定を、「先行の主張を否認したり、可能な誤った印象を訂正したり、予想され、恐れられ、暗示され、あるいは望まれていたものと現実との対比を表現したいと思う時に」用いられる手段であるとまとめている。「ナイワケデハナイ」文には、単純な肯定表現で表わせない「否定的な意味を受け取ったことを相手に見せる」という付加的役割があると考えられる。

2.2 主観的な気持ちを相手に伝える

否定会話の文脈上で二重否定表現には配慮用法があることを語用論的観点から指摘した先行研究群がある（たとえば、パリハウダナ(2013)、大堀(2021)等）。また、「ナイワケデハナイ」に関する研究では、「消極的に事実を肯定する態度を示す」（森田・松木(1989:211)）、「曖昧、婉曲などのモダリティを伝える」（盛(2010)）などのような指摘があるが、本稿ではそれらに反対するつもりはない。「ナイワケデハナイ」は、「婉曲」以外に、非難の気持ちなどを伝えることがある。例えば、例(19)(20)は肯定表現の絶対性を弱めるものと捉えられるが、例(21)のような使い方はこれにあてはまらない。これを考慮した上で、本節では一旦「主観的な気持ちを相手に伝える」とまとめておく。

- (19) 「いや、あの叔父のことだ。どんな悪巧みがあるやもしれぬ。狐騒ぎを私の罪に
でっちあげて、今度こそ謀反人として都払いするつもりなのか…。お願いじや、
火華鬼、頼まれてくれ…せめて、南院のようすを…道長の手先がそこで何をして
おるのか、見てきてはくれぬか」
すがりつかれ、少年は美しい唇を冷笑の形に歪めた。情けない貌で頬つてくる中
年男を振り払おうとして…急に気が変わったのか、ゆっくりその手を外させる。
「私も興味がないわけではない。とりあえず、見てくるとしよう。すべてはその
後だ」
素早く背を向けると、同時に御簾が巻き上がり、少年は廊へと滑り出た。

(LBn9_00233 『燐火鎮魂』)

例(19)では、話し手は、道長の手先が何をしているかに興味があることを示している。前の文脈から見ると、最初は興味がなかったが、何らかの理由で興味がわいてきた。話し手が「興味がある（わけだ）」という発話の不適切性を想定している理由は、この表現がある基準で下位であるとみなしているからだ。目下の状況で、「興味がある（わけだ）」とは言い難い、または自分の本音をそのまま口に出すことが難しいため、「興味がないわけではない」と発話している。この例では、「興味がある（わけだ）」と断定的に同意す

ることへの遠慮が態度として表現されていると見れば、これも配慮表現と言える。

- (20) 「…私のこの気持ち…あなたにはとても分からんでしょうが…」
「先生。いま、どちらにいらっしゃるのですか？」
と、早百合は訊いていたが、先生は構わずに続けた。
「昔から私の心の中には、彼等の悪を見て見ぬふりをしながら、老後を安樂に暮らそうと思わないわけではなかったんですよ。けれども、私は寛弘美さんのとき、その悪の芽をむしらず、その結果、今日の有様です。…」

(LBm9_00081 『謎の幽霊探偵』 例(13)再掲)

例(20)の発言は、話し手自身の昔の考えであるため、肯否については自明である。ただし、はっきりとした肯定表現を避け、かわりに「思わないわけではなかった」という複雑そうな表現を用いる理由は、自分の考えを率直に話すことによって羞恥心を覚えるかもしれないと思っているからである。また、文末に終助詞「よ」が付けられていることから、この内容を際立たせて伝えたいという気持ちが含まれている可能性がある。

- (21) 「ダルタニヤン様、ダルタニヤン様」
「うるさいぞ、ヴィヨン。おまえも俺の拘りを知らぬわけではあるまい」
ああ、そうだ、珈琲は静かに味わう主義だ。台詞を決めると、それきりダルタニヤンは従者を無視した。背中をシャトレ塔の壁につけ、むつり黙りこまれると、やれやれという感じで短い首を動かしながら、さすがの喋り魔も観念したようだった。

(LBp9_00040 『二人のガスコン』)

例(21)では、話し手は相手が自分にこだわりがあることを知っているが、更に冗長な「知らぬわけではあるまい」を使う理由は、簡単な肯定表現では不充分だからと考えられている。先行発話に誘発されずに二重否定文を発話することは自然ではないかもしれないが、ここでの二重否定文は肯定文が表現しきれない非難の気持ちを含んでいると捉えられている。

これらの「ナイワケデハナイ」は、論理的には肯定表現と同義であるが、このように二重表現が用いられることによって話し手の主観的な気持ちを相手に伝える表現効果を果たすことがある。

おわりに

本稿では、「ナイワケデハナイ」がどのような発話環境に現れ、どのような理由で使われ

るかの論述を試みた。論述にあたっては、「ナイワケデハナイ」の発話場面、「ナイワケデハナイ」の発話の付加的役割という二つの側面から考察した。この記述をまとめたものが表1になる。

表1 「ナイワケデハナイ」に関する考察

	発話場面	付加的役割
否定式	場面 1:相手が否定的な質問を出すとき	否定的な意味を受け取ったことを相手にみせる
	場面 2:相手の発言に否定的な意見があるとき	
	場面 3:相手が否定的な意見を持ち得ると話し手が予測するとき	
	場面 4:話し手自身の発話に否定的な含意があるとき	
非否定式	場面 5: 前に位置する「～ナイ」は誰のものでもなく、それを否定することも考えにくいとき	主観的な気持ちを相手に伝える

本稿は「ナイワケデハナイ」という1つの二重否定表現について考察したものである。今後は、「ナイワケデハナイ」をはじめ、自然会話における二重否定表現のさらなる考察を行いたいと考えている。

注

- 1) 四津(2019)の用語である。「二重否定文——Sの発話は時に、Sの内容を伝えつつそれ以上の内容も伝える」ことを指す。グライスなどが使われる「会話の推意（conversational implicature）」という用語に意味が重なるかもしれないが、ここで理解しやすい「付加的役割」という表現を使うこととする。

参考文献

- 大堀裕美 (2021) 「日本語の二重否定モダリティ：二重否定の型と発話機能の事例から」『日本語コミュニケーション研究論集』卷10、65-63頁。
- 工藤真由美(1997)「否定文とディスコース:『～ノデハナイ』と『～ワケデハナイ』」『ことばの科学8』65-102頁。
- 定延利之 (2018) 『コミュニケーションへの言語の接近』ひつじ書房。
- 盛会茹 (2010) 「日本語における二重否定表現の意味再確認:『海辺のカフカ』を中心に」(燕山大学 2010 年度修士論文)
- 陶振孝 (1991) 「日本語の二重否定について」『日本語学』Vol. 10. 6月号、75-82頁。
- 陶振孝 (1994) 「日本語の二重否定の構造」(北京外国语大学日語系『日本語学研究論叢』高等教育出版社)、62-77頁。

パリハワダナ, ルチラ (2013) 「二重否定表現『～なくは/もない』『～ないでも/はない』『～ないことは/もない』『～ないものでは/もない』の使い分けを巡って」『京都大学国際交流センター 論攷』3、43–59 頁。

森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』株式会社アルク。

四津雅英 (2019) 「二重否定文の発話の付加的役割について」『科学哲学』52(1)、93–111 頁。

ローレンス R. ホーン (2018) 『否定の博物誌』(濱本秀樹・吉村あき子・加藤泰彦訳、原著は 2001 年発行 ひつじ書房。

渡邊美弥 (2007) 「二重否定表の意味の強弱に関わる要素について：芥川龍之介作品を対象として」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』10、275–288 頁。

Horn, L.R. (2001) *A Natural History of Negation*, Chicago: The university of Chicago Press.

Levinson, S.C. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature Language, Speech, and Communication*, London: MIT Press.

コーパス

国立国語研究所 現代日本語書き言葉コーパス BCCWJ <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (最終検索日 2024 年 2 月 10 日)

An Analysis of the Double Negation: *nai wake de wa nai*

YAN, Jiating

Abstract

Two negatives can make one affirmative. However, this does not mean that two negatives cancel each other simply. In the study of Japanese linguistics so far, research on double negation has mostly focused on the overall description, including criteria for judging double negation, types of structures, and pragmatic functions, with few studies concentrating on specific expressions. Thus this paper focuses on a typical double negative expression in Japanese: *nai wake de wa nai*, and examines it from the perspective of pragmatics.

In this paper, we classified *nai wake de wa nai* into Negative Type and Non-negative Type based on whether the speaker has an intention of negation or not. It shows that there are four scenes of Negative Type and in these cases, *nai wake de wa nai* primarily serves to show the interlocutor that the speaker has received the negative meaning. On the other hand, Non-negative Type mainly plays a role in conveying the speaker's subjective feelings to the interlocutor.

Keywords : double negation, pragmatics, utterance scenes, additional roles

複合動詞「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の特徴について

羅 菲凡（名古屋大学大学院生）

要旨

本研究は、内部移動を表す日本語の複合動詞「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞（V1）の特徴について論じるものである。

コーパスから抽出した異なり語数で「V1 込む」の前項動詞 253 語と「V1 入れる」の前項動詞 65 語を奥田（1992）の動詞分類を基に修正・分類した。その結果、語彙的な意味から見ると、「V1 込む」はほとんどの動詞と結合するが、「V1 入れる」は「自己運動としての動作・変化動詞」「変化・自然現象」の自動詞、「人間的な接触動詞」「意志動詞」「人間の生理・情動的な状態動詞」を表す前項動詞と結合しないことが分かった。

また、これらの前項動詞を①「V1 込む」と「V1 入れる」の両方と結合する場合（「V1 込む」と「V1 入れる」が置き換えて意味があまり変わらないもの」と「「V1 込む」と「V1 入れる」が置き換えたたら意味が変わるものの）、②「V1 込む」だけと結合する場合、③「V1 入れる」だけと結合する場合に分けて、「V1 込む」と「V1 入れる」の違いを具体的に考察した。

キーワード： 複合動詞、「V1 込む」、「V1 入れる」、前項動詞の特徴、自他性

はじめに

本研究は内部移動を表す日本語の複合動詞「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞（V1）の特徴について考察するものである¹⁾。「V1 込む」と「V1 入れる」は例（1）や例（2）のようにどちらも使える場合もあれば、例（3）のように「V1 込む」のみ使える場合や、例（4）のように「V1 込む」のみ使える場合もある。

- (1) 彼は洗濯物を取り {込んだ/ 入れた}。²⁾ (他動詞)
- (2) 彼は商品を買い {込んだ/ 入れた}。 (他動詞)
- (3) a. 夫が寝 {込んだ/ *入れた}。 (意志的自動詞)
b. 水道の水が流れ {込んだ/ *入れた} (無意志自動詞)
- (4) 私は彼の提案を受け {*込んだ/ 入れた}。 (他動詞)

しかし、日本語学習者はどのような前項動詞が「込む」と結合し、どのような前項動詞が「入れる」と結合するのかが分からず、うまく使いこなせないという問題がある。そこで本研究では、内部移動を表す複合動詞「V1 込む」や「V1 入れる」と結合する前項動詞の意味と自他性の違いについて考察し、日本語教育に貢献することを目的とする。

1. 先行研究

複合動詞「V1 込む」「V1 入れる」に関する先行研究には影山（1993）、松本（2009）、姫野（1978）などがある。以下この順に見ていく。

影山（1993）は「V1 込む」を「A. 方向性を表すもの」と「B. V1 の動作・状態に没入する、すっかり～するという意味に解釈されるもの」の二つに分けている。さらに、「A」の前項動詞には他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の三つが来るなどを指摘している。「B」の前項動詞については特に記述がない。

I. 方向性を表すもの

a. V1（他動詞）+ 込む

①V1 自体が目的語の位置変化を意味する場合、「V1 込む」はV1 を強調する。

例：仕舞い込む、植え込む、注ぎ込む、詰め込む

②V1 が目的語に対する働きかけを表すが位置変化は含意しない場合、「V1 込む」は位置変化を表す。

例：叩き込む、突き込む、押し込む、刷り込む、折り込む、縫い込む

b. V1（非能格自動詞）+ 込む

V1 自体が移動を表す場合、「V1 込む」はV1 の到着点を強調する

例：駆け込む、逃げ込む、飛び込む、入り込む、乗り込む

c. V1（非対格自動詞）+ 込む

①V1 が自然発生的を表す場合、「V1 込む」は物理的な移動を表す

例：流れ込む、転げ込む、落ち込む、染み込む

②V1 が自発的事情を表す場合、「V1 込む」は状態変化を表す

例：ずれ込む、もつれ込む

II. V1 の動作・状態に没入する、すっかり～するという意味に解釈されるもの

例：老け込む、思い込む、考え込む、冷え込む、使い込む、ふさぎ込む、

しおげ込む、めかし込む、話し込む、寝込む、沈み込む、決め込む、

黙り込む、眠り込む、落ち込む

影山（1993）は I a. 「V1（他動詞）+ 込む」のV1 をさらに「①目的語の位置変化を意味する場合」と「②目的語に対する働きかけを表すが位置変化は含意しない場合」に分けて

いる。そして①に属する「V1 込む」は「裏庭に竹を {植える/植え込む}」のように V1 と「込む」の移動先が同一場所であり、「込む」が付かなくても「内部移動」の意味を表すのに対し、②に属する「V1 込む」は「押入に布団を {*押す/押し込む}」のように「込む」が付くことによって「内部移動」の意味を表すと指摘している。しかし、同じ②に属する「折り込む」「刷り込む」は「紙の端を内側に {折る/折り込む}」「名前を名刺に {刷る/刷り込む}」のように「込む」が付かなくても「内部移動」の意味を表すことができる。この場合の「折り込む」「刷り込む」は①に近いと考えられる。

また、影山（1993）の分類では「落ち込む」は I c. と II の両方に属しているが、「気分が落ち込む」は「羊が穴に落ち込む」のような物理的な移動の派生的な用法で、心理的に気分が沈むことを表しているため、I c. に属すると考えられる³⁾。以上のような問題が他にあるため、影山（1993）の分類を修正する必要がある。

一方、松本（2009：180–183）は「V1 込む」を以下のように「移動動詞としての『込む』」「使役移動動詞としての『込む』」「主要部ではない『込む』」の三つに分けている。

①移動動詞としての「込む」（動作主自身の移動を表すもの）

例 なぐり込む、怒鳴り込む、切り込む、割り込む、攻め込む、持ち込む、連れ込む

②使役移動動詞としての「込む」（V1 の行為の対象が使役により何かの内側へと移動することを表すもの（これらの「込む」には「入れる」の意味がある。））

例 織り込む、縫い込む、刷り込む、磨き込む、鋤き込む、吹き込む

③主要部ではない「込む」（空間的な移動を表さず、前項動詞の表す状態変化の意味を補強し、その結果状態に制約を加えている。（これらは主語の状態変化に関して使われ、移動動詞の「込む」の延長線上にある。））

例 眠り込む、黙り込む、ふさぎ込む、惚れ込む、信じ込む

松本（2009：180–183）のまとめ

松本（2009）は②の使役移動動詞としての「込む」には「入れる」の意味があると指摘している。しかし、「吹き {込む/入れる}」のように置き換えられる場合もあるが、「受け入れる」という表現はあるが「*受け込む」という表現はない。そのため、「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の違いを明らかにする必要がある。

一方、姫野（1978）は「V1 込む」と「V1 入れる」を対照しながら論じている。姫野（1978）はまず「V1 込む」を「I 内部移動」と「II 程度進行」の二つの意味に分けている。さらに前者を移動の領域によって「閉じた空間」、「固体」、「流動体」、「集合体または組織体」、「動く取り囲み体」、「自己の内部（自己凝縮体）」、「その他」の七つに分け、それぞれの複合動詞を「主体の移動（自動詞）」と「対象の移動（他動詞）」に分けている。一方、後者は進行の様態によって「固着化」、「濃密化」、「累積化」の三つに分けている。また、姫野（1978：63）

は「V1 入れる」は全て「～に～を～入れる」の文型を取り、前項動詞は「何かを入れるために目的や方法などを表している」と述べ、「V1 込む」と同様に前項動詞の違いによって五つに分けている。両者の対応関係を表1に示す。⁴⁾

表1 姫野（1978）における「V1 込む」の分類と「V1 入れる」との対応関係

意味	V1 込む	V1 入れる
I 移内動部の移動域	閉じた空間 自:人が穴に落ち込む 他:人を穴に落とし込む 前項動詞と「込む」の関係:「～して入る(入れる)」「～するようにして入る(入れる)」と言い換えられる	取り入れる
	固体 自:針金が体に食い込む 他:釘を柱に打ち込む	擦り入れる
	流動体 自:薬品が水に溶け込む 他:薬品が水に溶かし込む	溶かし入れる
	集合体・組織体 自:砂が米に混じり込む 他:豆を米に混ぜ込む	編み入れる
	動く取り囲み体 他:金を布にくるみ込む ①前項動詞の種類によって、取り囲み体の性質や囲み方の形態などもさまざまである。 (握り込む/挟み込む…) ②前項動詞は自らの意志で取り囲み体を対象物に付着せしめることを表す。(着込む/履き込む…)	――
	自分の内部 (自己凝縮体) 自:胴が内側にくびれ込む 他:裾を内側に折り込む	たくし入れる
	その他 他:中を覗き込む	――
II 進行度の進行態	固着化 人が黙り込む 前項動詞:人間の心理・生理・思考作用などに関わる	――
	濃密化 人が老い込む 前項動詞:状態の変化を表す	――
	累積化 人が毎日 1km 泳ぎ込む 前項動詞:繰り返しのきく、人間の意志的行為を表す	――

姫野（1978:49-50、65）を基に作成

姫野（1978:63）は以下の例を挙げて、「V1 込む」と「V1 入れる」が同じ前項動詞を取る場合の意味の比較をしている。

- i) 意味の同じもの 書き込む：書き入れる 運び込む：運び入れるなど
- ii) 意味的に異なるもの 子を懷に抱え込む (子を中に抱え入れる) 草を短く刈り込む (草を中に刈り入れる)
- (列に割り込む (卵を割り入れる) 話を聞き込む (話を聞き入れる) 車に乗り込む (車を乗り入れる) 切符を申し込む (援助を申し入れる)

姫野（1978:63）

その結果、姫野（1978）は『込む』の用法が複雑なのに対して（抱え込む=主体に近づける、刈り込む=対象の領域侵入、乗り込む=主体の移動など）、『入れる』は常に対象を

ある場所へ移動させるということを示しており、複合動詞として構成が単純であることが分かる」(p. 63)と述べている。

しかし、これ以上の説明はなく、具体的にどのような前項動詞が「V1 入れる」と結合するのかについては考察していない。また、同じ前項動詞と結合する場合、意味の同じものと意味的に異なるもののペアについての説明はまだ不十分である。そこで、本研究では「V1 入れる」の前項動詞の意味を細かく分類して、「V1 込む」の前項動詞との違いを考察する。

2. コーパス調査

本研究では、「Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)」、「現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版」、「複合動詞レキシコン」を用いて調査を行う。まず、「Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)」を利用し、「V1 込む」と「V1 入れる」の用例を抽出した。その結果、異なり語数で「V1 込む」の前項動詞は 253 語、「V1 入れる」の前項動詞は 65 語出現した。このうち上位 65 語をそれぞれ表 2 と表 3 に示す。

表 2 「V1 込む」と結合する前項動詞の上位 65 語

順番	V1	用例数									
1	書く	7,555	18	巻く	2,747	35	包む	2,268	52	溜める	2,050
2	申す	5,039	19	差す	2,711	36	踏む	2,262	53	連れる	2,044
3	見る	4,682	20	組む	2,560	37	引く	2,209	54	挿す	2,041
4	飛ぶ	4,248	21	覗く	2,494	38	払う	2,208	55	炊く	2,038
5	煮る	3,853	22	流す	2,452	39	乗る	2,205	56	溶ける	2,021
6	突く	3,773	23	送る	2,438	40	叩く	2,170	57	吹く	2,018
7	読む	3,536	24	走る	2,417	41	冷える	2,153	58	編む	2,012
8	振る	3,384	25	撃つ	2,401	42	攻める	2,152	59	回る	2,000
9	思う	3,303	26	刈る	2,383	43	売る	2,140	60	入る	1,992
10	落ちる	3,279	27	流れる	2,381	44	呼ぶ	2,137	61	描く	1,983
11	取る	3,172	28	詰める	2,358	45	落とす	2,130	62	蹴る	1,965
12	盛る	3,153	29	食う	2,344	46	使う	2,130	63	敷く	1,962
13	持つ	3,094	30	貼る	2,321	47	はめる	2,107	64	練る	1,954
14	漬ける	2,906	31	押す	2,296	48	駆ける	2,096	65	挟む	1,927
15	追う	2,774	32	飲む	2,293	49	折る	2,095			
16	吸う	2,758	33	積む	2,289	50	投げる	2,080			
17	打つ	2,753	34	沈む	2,272	51	混ぜる	2,062			

表 2 と表 3 から分かるように、「V1 込む」と結合する前項動詞上位 65 語には自動詞も他動詞も来ているのに対し、「V1 入れる」と結合する前項動詞は「乗る」と「吹く」以外は全て他動詞であった。

表3 「V1 入れる」と結合する前項動詞 65語

順番	V1	用例数	順番	V1	用例数	順番	V1	用例数	順番	V1	用例数
1	受ける	4,893	17	注ぐ	1,654	33	誘う	768	49	汲む	168
2	取る	2,823	18	引く	1,589	34	混ぜる	689	50	振るう	168
3	流す	2,199	19	聞く	1,542	35	描く	630	51	刺す	166
4	雇う	2,097	20	摂る	1,533	36	呼ぶ	570	52	加える	160
5	繰る	2,084	21	迎える	1,517	37	差す	528	53	掃く	137
6	乗る	1,993	22	運ぶ	1,501	38	並べる	524	54	彫る	127
7	借りる	1,969	23	招く	1,489	39	挿す	506	55	つまむ	125
8	預ける	1,926	24	落とす	1,333	40	吹く	455	56	漉す	120
9	投げる	1,911	25	回す	1,275	41	絞る	410	58	量る	99
10	申す	1,840	26	割る	1,138	42	溶かす	349	59	ひねる	97
11	採る	1,825	27	押す	1,137	43	移す	346	60	積む	94
12	組む	1,764	28	蹴る	1,074	44	刈る	315	61	掬う	92
13	突く	1,754	29	振る	997	45	編む	280	62	数える	89
14	踏む	1,719	30	戻す	956	46	叩く	233	63	ちぎる	87
15	書く	1,683	31	溶く	951	47	探る	228	64	挟む	83
16	買う	1,669	32	導く	893	48	刻む	189	例外	仕入れる	

3. 本研究の分類

次に、抽出した「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞を奥田（1992）の動詞分類を基に修正・分類すると、表4のようになる。このうち灰色にしたものは「V1 込む」と「V1 入れる」に共通して現れる動詞であることを示す。

表4 「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の意味による分類

V1 の意味			V1 込む		V1 入れる	
			自他	例（前項動詞）	自他	例（前項動詞）
人に関する I 人間の肉体的動作動詞	① 対象にはたらきかける動詞	位置変化動詞 ⁵⁾	他	書き-、突き-(突っ-)、差し-(挿し-、刺し-)、押し-、踏み-、引き-(引っ)、叩き-、蹴り-、取り-(採り、摂り)、組み-、刈り-、積み-、混ぜ-、挟み-、注ぎ-、加え-、繰り-、振り-、流し-、落とし-、投げ-、運び-、回し-、掃き- 打ち-、撃ち-、攻め-、描き-、塗り-、噛み-、抑え-、押さえ-、弾き-、引きずり-、殴り-、握り-、擦り-、引っ張り-、当て-、ねじり-、触れ-、連れ-、担ぎ-、拭き-、生け-、巻き-、詰め-、貼り-、背負い-、はめ-、溜め-、丸め-、付け-、混ざり-、粘り-、つなぎ-、くるみ-、隠し-、含み-、掛け-、盛り-、送り-、ずれ-、倒し-、写り-、吊り-(釣り-)、写し-、閉め-(締め-)、射-、沈め-	他	踏み-、突き-、書き-(描き-)、引き-、押し-、差し-(挿し-、刺し-)、蹴り-、叩き-、取り-(採り、摂り)、組み-、注ぎ-、混ぜ-、刈り-、加え-、積み-、挟み-、流し-、投げ-、運び-、落とし-、振り-(振りい-)、回し-、掃き- 打い-、蹴い-、隠し-、含み-、掛け-、盛り-、送り-、ずれ-、倒し-、写り-、吊り-(釣り-)、写し-、閉め-(締め-)、射-、沈め-
				さまがえ動詞		割り-、絞り-、刻み-、汲み-、ひねり-、こし-、ちぎり-

				-、洗い-、すり-、えぐり-、剃り-、曲げ-、入れ-、つぎ-、消し-、張り-、 編み-、彫り-		
		生産動詞		編み-、彫り-		編み-、彫り-
	②自己運動としての動作・変化動詞	自		飛び-、走り-、駆け-、回り-、入り-、咳き-、着-、迷い-、履き-、逃げ-、忍び-、潜り-、座り-、舞い-、倒れ-、上がり-、滑り-、立ち-、降り-、泊まり-、のめり-、しゃれ-、跳び-、遊び-、踊り-(躍り-)、這い-、めかし-、泳ぎ-、追い-、囲い-、囲み-、铸-、鍛え-、練り-、縫い-、織り-、抱え-、抱き-	-	
			乗り-		自	乗り-
	VIやりもらい活動動詞	他	買い-、 持ち-、払い-、売り-、教え-、貯め-、貸し-		他	買い- 受け-、借り-、雇い-、預け-
	VII人間的な接触動詞	他	住み-、負け-			-
II 心理的 的な 活 動	③言語活動動詞	他	申し-、誘い-、呼び-、招き-、 読み-、話し-、頼み-、怒鳴り-、黙り-、歌い-、詠み-、たらし-、鳴らし-、騙し-		他	申し-、誘い-、呼び-、招き-
	①感性活動動詞		聞き- (聴き-)、見-、覗き-			聞き-
	②思考活動動詞		思い-、考え-、覚え-			-
	④意志活動動詞		決め-、信じ-			-
	IV状態:人間の生理・情動的な状態動詞	自	寝-、惚れ-、へたり-、眠り-、塞ぎ-、浸り-、急き-、泣き-、悩み-			-
物 に 関 す る	III変化動詞・ V自然現象動詞	自	流れ-、沈み-、落ち-、しゃがみ-、なだれ-、冷え-、溶け-、切れ-、めり-、染み-、紛れ-、転がり-/転げ-、はまり-、老け-、植え-、枯れ-、老い-、崩れ-、漏れ-、混じり-、暴れ-、折れ-、埋まり-		-	
		他	溶き-、溶かし-、吹き-、放り-、曲がり-	他	溶き-、吹き-、 溶かし-	

まず、「V1 込む」の前項動詞は人に関する動詞や物に関する動詞が来る。このうち、「自己運動としての動作・変化動詞」「変化・自然現象」の一部、「人間の生理・情動的な状態動詞」を表す動詞は自動詞、その他は他動詞である。

次に、「V1 入れる」は「自己運動としての動作・変化動詞」「変化・自然現象」の自動詞、「人間的な接触動詞」「意志動詞」「人間の生理・情動的な状態動詞」を表す前項動詞とは結合しない。

以上のことから、「V1 込む」と「V1 入れる」がともに結合しやすいのは位置変化動詞であることが分かる。また、「V1 込む」は「さまがえ動詞」のような「対象を変化させる他動詞」、「自己運動としての動作」「人間の生理・情動的な状態」のような「意志的な自動詞」、「変化動詞」のような「無意志的自動詞」と結合しやすいのに対して、「V1 入れる」はこれらの動詞と結合しにくいことが分かる。そこで、本研究では「V1 込む」と「V1 入れる」と結合する前項動詞を①「V1 込む」と「V1 入れる」の両方と結合する場合、②「V1 込む」とのみ結合する場合、③「V1 入れる」とのみ結合する場合の三つに分けて考察する。

また、今回の調査結果によると、表4の灰色の部分に示すように「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞が共通するものは41ペアあった。一方、「V1 込む」とのみ結合する動詞は212語、「V1 入れる」とのみ結合する動詞は14語であった。

以下「V1 込む」と「V1 入れる」に結合する前項動詞の違いとその特徴について見る。

4. 「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の特徴

本節では「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の特徴の違いを見る。表5のように「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞を「『V1 込む』と『V1 入れる』の両方と結合する場合」、「『V1 込む』だけと結合する場合」、「『V1 入れる』だけと結合する場合」に分けて論じる。以下、順に見て行く。

表5 「V1 込む」と「V1 入れる」前項動詞の違い

分類		「V1 込む」の例		「V1 入れる」の例
V1 の意味				
両方と結合する	置き換えても意味があまり変わらない	位置変化	書き-、突き-(突っ-)、差(挿、刺)し-、押し-、踏み-、引き-(引っ)、叩き-、蹴り-、取(採、摑)り-、組み-、刈り-、積み-、混ぜ-、挟み-、注ぎ-、加え-、繰り-、振り-、流し-、落とし-、投げ-、運び-、回し-、掃き-、溶き-、溶かし-	
		自然現象	吹き-	
	置き換えたら意味が変わる	状態変化	絞り-、割り-、刻み-、ひねり-、汲み-	
			主体の変化	乗り-
		人間の生理	呼び-、招き-、申し-、誘い-	
			聞き-	
		生産動詞	編み-、彫り-	
		やりもらい活動	買い-	
一方だけと結合する	対象に働きかける動詞		打ち-、撃ち-、塗り-、噛み-、抑え-、押さえ-、背負い-、弾き-、引きずり-、殴り-、握り-、擦り-、引つ張り-、当て-、ねじり-、触れ-、連れ-、担ぎ-、拭き-、生け-、詰め-、貼り-、はめ-、溜め-、付け-、混ざり-、粘り-、つなぎ-、建(立)て-、くるみ-、隠し-、含み-、掛け-、盛り-、ずれ-、倒し-、写り-、吊(釣)り-、写し-、閉(締)め-、射-、沈め-、追い-、放り-、曲がり-	掬い-、つまみ-、迎え-、戻し-、導き-、並べ-、移し-、数え-
	やりもらい活動		持ち-、払い-、売り-、教え-、貯め-、貸し-	受け-、借り-、雇い-、預け-
	状態変化	対象の変化	煮-、漬け-、炊き-、切り-、刷り-、焼き-、揉み-、作(造、創)り-、削り-、掘り-、埋め-、斬り-、磨き-、洗い-、すり-、えぐり-、剃り-、曲げ-、つぎ-、消し-、張り-、吸い-、食い-、飲み-、折り-、敷き-、締め-、搔き-、封じ-、仕舞い-、合わせ-、铸-、鍛え-、練り-、織り-、縫い-	こし-、ちぎり-
			包み-、囲い-、囲み-、巻き-、丸め-、畳み-、抱え-、抱き-、着-、履き-	
		主体の変化	飛び-、走り-、駆け-、回り-、入り-、咳き-、迷い-、逃げ-、忍び-、潜り-、座り-、倒れ-、上がり-、滑り-、立ち-、降り-、泊まり-、のめり-、しゃれ-、跳び-、遊び-、踊(躍)り-、這い-、めかし-、泳ぎ-	-
			沈み-、落ち-、しゃがみ-、なだれ-、冷え-、溶け-、切れ-、めり-、染み-、紛れ-、転がり-/転げ-、はまり-、舞い-、老け-、植え-、枯れ-、老い-、崩れ-、流れ-、漏れ-、混じり-、暴れ-、折れ-、埋まり-	
	人間的接触		住み-、負け-	
	人間の生理・心理	言語活動	読み-、話し-、頬み-、怒鳴り-、黙り-、歌い-、詠み-、たらし-、鳴らし-、騙し-	
			見-、覗き-	
		思考動詞	思い-、考え-、覚え-	
		意志動詞	決め-、信じ-	
		生理状態	寝-、惚れ-、へたり-、眠り-、塞ぎ-、浸り-、急き-、泣き-、悩み-	

4.1 同一の前項動詞が「V1 込む」にも「V1 入れる」にも使われる場合

本節では前項動詞が「V1 込む」と「V1 入れる」の両方と結合する場合について見る。この類に属する 41 ペアの中には「V1 込む」と「V1 入れる」を置き換えるても意味があまり変わらないものもあれば、「V1 込む」と「V1 入れる」を置き換えた後意味が変わるものもある。以下順に見ていく。

4.1.1 「V1 込む」と「V1 入れる」の意味があまり変わらない場合

まず、「V1 込む」と「V1 入れる」を置き換えるても意味があまり変わらない場合について見る。この類に属する前項動詞は例 (5) ~ (9) のように広義の「位置変化」を表すものである。この場合、「V1 込む」も「V1 入れる」も「主体ガ 対象ヲ 場所の内部ニ V1 込む/入れる」という構文を取りやすく、「主体が対象のある空間の内部へ位置変化させる」という意味を表し、他動詞として使われている。

- | | |
|--------------------------------------|-------------|
| (5) 彼は路地に足を <u>踏み</u> {込んだ/入れた} 。 | (接触動詞) |
| (6) 大きな器の中に水を <u>注ぎ</u> {込んだ/入れた} 。 | (とりはずし動詞) |
| (7) バスケットにボールを <u>投げ</u> {込んだ/入れた} 。 | (うつしかえ動詞) |
| (8) 味噌をスープに <u>溶かし</u> {込んだ/入れた} 。 | (物に関する変化動詞) |
| (9) 送風管に息を <u>吹き</u> {込んだ/入れた} 。 | (自然現象) |

ここで「V1 込む」と「V1 入れる」はいずれも「主体が対象のある空間の内部へ位置変化させる」という意味を表しているが、「V1 入れる」より「V1 込む」の方が対象がある空間の内部に深く進入するというニュアンスが伴う。

4.1.2 「V1 込む」と「V1 入れる」の意味が変わる場合

次に、「V1 込む」と「V1 入れる」を置き換えると意味が変わる場合について見る。この類に属する前項動詞は「状態変化」「生産動詞」「人間の生理」「やりもらい活動」を表すもので、例 (10) ~ (18) のようなペアがある。

まず、前項動詞が「状態変化」の意味を表すペアを見る。この場合、前項動詞はさらに「対象の変化」を表すものと「主体の変化」を表すものに分けられる。前項動詞が「対象の変化」を表す場合、例 (10) や例 (11) のように「V1 込む」も「V1 入れる」も他動詞としても使われるが⁶⁾、「V1 込む」はある状態の深化・定着を表し、「V1 の動作によって対象を変化させ、その状態を深化・定着させる」という意味を表すのに対し、「V1 入れる」は具体的移動を表し、「V1 の動作によって対象を移動させ、ある空間の内部に入れる」という意味を表すという違いがある。

- (10) a. 彼はフリーワードで情報を絞り {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
 b. 彼はレモンを紅茶に絞り {?込んだ/入れた}。 (他動詞)
- (11) a. 情緒を人びとの心の深層へ刻み {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
 b. 小松菜に生姜を少し刻み {?込んだ/入れた}。 (他動詞)

例えば、例 (10a) の「絞り込む」は「情報をできるだけ絞る（それによって必要な情報を取り出しやすくする）」という意味を表し、例 (11a) の「刻み込む」は「情緒を心中に深く刻んで入れる（それによって心に定着させる）」の意味を表す。一方、例 (10b) の「絞り入れる」は「レモンを握って中の汁を出して紅茶に入れる」という意味を表し、例 (11b) の「刻み入れる」は「生姜を切って小松菜に入れる」という意味を表す。この場合、「レモンを紅茶に絞り込む」、「小松菜に生姜を少し刻み込んだ」と言えないことはないと思われるが、今回のコーパスからはこのような用法は出現しなかった。このことから、このような場合は「V1 入れる」の方が選択されやすいと考えられる。

一方、前項動詞が「主体の変化」を表す場合は、例 (12) の「乗り込む」と「乗り入れる」のペアしか見られなかった。例 (12a) のように「乗り込む」は自動詞として使われ、「主体が乗り物の中に入る」という意味を表している。一方、「乗り入れる」は例 (12b) のような自動詞用法と例 (12c) のような他動詞用法が見られる。前者は「バスや鉄道などの路線を延長して、ある別の空間に入る」という意味を表し、後者は「車に乗ったままある空間に入る」という意味を表している。

- (12) a. 吉沢は梅田から通勤電車に乗り {込んだ/*入れた}。 (自動詞)
 b. 東海道新幹線が新大阪駅に乗り {*込んだ/入れた}。 (自動詞)
 c. 山田さんが生協の駐車場に車を乗り {*込んだ/入れた}。 (他動詞)

次に、前項動詞が「人間の生理」の意味を表すペアを見る。この場合、前項動詞は「言語活動」を表すものと「感性活動」を表すものに分けられる。前項動詞が「言語活動」を表す場合、例 (13) や例 (14) のように「V1 込む」も「V1 入れる」も他動詞しか使えない。

- (13) a. 海外の観光客を日本に呼び {込んだ/入れた}。 (他動詞)
 b. 南の太陽のパワーを借りて幸運を呼び {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
- (14) a. お客様をお店に招き {込んだ/入れた}。 (他動詞)
 b. この鏡を飾ると幸運を招き {*込む/入れる} ことができる。 (他動詞)

ここで注意したいのは、「呼び込む」と「呼び入れる」は例 (13a) の「客」のように対

象に人を取ると「声をかけてある空間に誘って入らせる」という同じような意味を表すが、例 (13b) の「幸運」のように対象に抽象物を取ると「呼び込む」しか使えないのに対し、「招き込む」と「招き入れる」は例 (14a) の「客」のように対象に人を取ると同じような意味を表すが、例 (14b) の「幸運」のように対象に抽象物を取ると、「招き入れる」しか使えないという点である。この理由は現段階では不明であるが、例 (13b) は「V1 込む」、例 (14b) は「V1 入れる」のみが使えることを指摘しておきたい。

一方、前項動詞が「感性活動」を表す場合は、「聞き込む」と「聞き入れる」のペアしか見られなかった。この場合、「聞き込む」も「聞き入れる」も他動詞として使われるが、意味が異なる。例えば、「聞き込む」は例 (15a) のように「ある人の話を聞いて、情報を得る」という意味を表すが、「聞き入れる」は例 (15b) のように「意見などを聞いて、その意見を受け入れる」という意味を表している。

- (15) a. 領主から重要な情報を聞き {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
 b. 彼が部長会議の意見を聞き {*込んだ/入れた}。 (他動詞)

次に、前項動詞が「生産動詞」の意味を表すペアを見る。この類に属するものには例 (16) の「編み込む/編み入れる」と例 (17) の「彫り込む/彫り入れる」の2ペアがある。

- (16) a. 髪を編み {込む/*入れる}。 (他動詞)
 b. 糸をセーターに編み {込む/入れる}。 (他動詞)
 (17) a. 裏蓋にはロゴを彫り {込む/*入れる}。 (他動詞)
 b. カメラに自分の名前を彫り {込む/入れる}。 (他動詞)

この場合、「V1 込む」も「V1 入れる」も「対象を V1 することによってある空間に入れる」という意味を表し、他動詞として使われている。しかし、「編み込む」は例 (16) のように「髪」や「糸」など様々な対象に使われるのに対し、「編み入れる」は「糸」など編み物に関する場合に使われやすいという違いがある。また、「彫り込む」は「ロゴ」や「名前」などの対象に使われるのに対し、「編み入れる」は「名前」にしか使われないという違いがある。

次に、前項動詞が「やりもらい活動」の意味を表すペアを見る。この類に属するものは例 (18) の「買い込む」と「買い入れる」しかなかった。例 (18) のように「買い込む」も「買い入れる」も「対象のある場所から買って入れる」という意味を表しているが、例 (18a) の「買い込む」は「食料をたくさん買って入れる」の意味を表し、「買い入れる」は「たくさん」という意味が含まれないという違いがある。

- (18) a. 家庭生活に必要な食料を週末に買い込む。 (他動詞)
 b. 私鉄から中古車両を買い入れた。 (他動詞)

4.2 「V1 込む」のみ使われる場合

次に、前項動詞が「V1 込む」とだけ結合する場合について見る。この類に属する前項動詞は例 (19) ~ (36) のように「対象に働きかける」「やりもらい活動」「状態変化」「生産動詞」「人間の接触」「人間の生理・心理」を表す動詞である。以下順に見て行く。

まず、前項動詞に「対象に働きかける動詞」が来る場合を見る。この場合、例 (19) や (20) の「撃つ」「塗る」のように動きや行為を表す動詞が前項動詞に来て、「V1 込む」が「V1 という動作をして対象が移動の領域に深く定着する」という意味を表す。

- (19) 彼は麻酔の弾丸をそのまま撃ち {込む/*入れる}。 (他動詞)
 (20) 皮膚に薬を塗り {込む/*入れる}。⁷⁾ (他動詞)

次に、前項動詞に「やりもらい活動動詞」が来る場合を見る。この場合、「V1 込む」は例 (21) ~ (23) のように「貸す」「売る」「払う」のような「主体が対象を自分側から向こう側に移動させる」という遠心的な方向性の意味が含まれる動詞と結合しやすく、「V1 の行為を何度も強く相手側に及ぼす」という意味を表す。

- (21) 農家を漬るために金を貸し {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
 (22) 顧客に商品を売り {込んだ/*入れた}。 (他動詞)
 (23) 郵便局で寄附金を払い {込んだ/*入れた}。 (他動詞)

次に、前項動詞が「状態変化」を表す場合を見る。この場合、前項動詞は「対象の変化」を表す場合と「主体の変化」を表す場合に分けられる。前項動詞が「対象の変化」を表す場合、「V1 込む」は例 (24) や例 (25) のように他動詞として使われ、「主体が対象を V1 してその状態が定着して時間が経つと V1 の状態がどんどん深まっていく」という意味を表す。

- (24) 焼き豆腐を煮 {込み/*入れ}、味噌ダレで調味する。 (他動詞)
 (25) 豚ブロック肉をタレに漬け {込む/*入れる}。 (他動詞)

例えば、例 (24) の「煮込む」は「食材に煮汁が染み込むまで時間をかけて煮る」という意味を表し、例 (25) の「漬け込む」は「食材がしっかり漬かるまで時間をかけて漬ける」という意味を表す。

次に、前項動詞が「主体の変化」を表す場合は、「意志的」と「無意志的」の二つに分けられる。例 (26) と (27) は「主体の変化・意志的」の場合で、「主体が意志的に V1 の動作をしてある着点に定着する」という意味を表す。例えば、例 (26) の「飛び込む」は「主体が意志的に飛んで、プールの中に勢いよく入る」という意味を表し、例 (27) の「駆け込む」は「主体が意志的に駆けて、病院の中に勢いよく入る」という意味を表す。

- (26) 彼はプールに飛び {込んだ/*入れた} 。 (意志的自動詞)
 (27) 彼は病院に駆け {込んだ/*入れた} 。 (意志的自動詞)

一方、例 (28) と (29) は「主体の変化・無意志的」の場合で、「主体が無意志的にある空間の着点に V1 して定着する」という意味を表す。例えば、例 (28a) の「沈み込む」は「主体が無意志的に大陸プレートの下という具体的な空間に定着する」という意味を表すのに対し、例 (28b) は「失意の状態」という「抽象的な空間に定着する」という意味を表す。例 (29a) と (29b) の「落ち込む」も同様である。

- (28) a. 海洋プレートが大陸プレートの下に沈み {込む/*入れる} 。 (無意志自動詞)
 b. 彼は失意に沈み {込んだ/*入れた} 。 (無意志自動詞)
 (29) a. 羊が穴に落ち {込んだ/*入れた} 。 (無意志自動詞)
 b. 破産状態にまで落ち {込んだ/*入れた} 。 (無意志自動詞)

次に、前項動詞が「人間的な接觸」を表す場合を見る。この類に属するものには例 (30) の「住み込む」と例 (31) の「負け込む」がある。この場合、「住み込む」も「負け込む」も自動詞として使われ、「V1 という動作が定着し続ける」という意味を表す。

- (30) 私は小沢一郎党首の自宅に住み {込んでいた/*入れていた} 。 (意志的自動詞)
 (31) a. 彼は博奕で四〇〇両も負け {込んだ/*入れた} 。 (無意志自動詞)
 b. 彼のチームは、0勝3敗と負け {込んだ/*入れた} 。 (無意志自動詞)

次に、前項動詞が「人間の生理・心理」を表す場合を見る。この類に属する前項動詞は例 (32) ～ (36) のように「感性活動」「意志活動」「言語活動」「思考活動」「生理状態」を表す。これらの前項動詞はいずれも他動詞であるが、「V1 込む」の形になると、例 (32) や例 (33) のように他動詞として使われる場合もあれば、例 (34) ～例 (36) のように自動詞として使われる場合もある。この場合、「V1 込む」は物理的な「内部移動」の意味から、抽象的な「ある状態に落ち入る」という意味へと派生している。

-
- (32) 絹香は春菜の瞳を覗き {込んだ/*入れた} 。 (感性動詞)(他動詞)
 (33) 彼は公然と無視を決め {込んだ/*入れた} 。 (意志活動)(他動詞)
 (34) 彼は議長と話し {込んだ/*入れた} 。 (言語活動)(自動詞)
 (35) 彼はその内容を真実と思い {込んだ/*入れた} 。 (思考活動)(自動詞)
 (36) 彼は漱石の文学に惚れ {込んだ/*入れた} 。 (生理状態)(自動詞)

4.3 「V1 入れる」のみ使われる場合

最後に、前項動詞が「V1 入れる」とだけ結合する場合について見る。この類に属する前項動詞の数は少なく、例 (37) ～ (40) のように「対象に働きかける」「やりもらい活動」「状態変化(対象の変化)」を表す動詞が来る。

この場合、「V1 入れる」は例 (37) や例 (38) のように前項動詞が移動の意味が含まれる動詞と結合しやすい。例 (37) のように「二格」と共起する場合は「主体が対象に V1 して空間の内部に移動させる」という意味を表すのに対し、例 (38) のように「カラ格」と共起する場合は「主体が対象に V1 して主体が所在する空間に移動させる」という意味を表す。

- (37) 彼はその子どもを自分の家庭に迎え {入れた/*込んだ} 。 (他動詞)
 (38) 彼は資金を金融機関から借り {入れた/*込んだ} 。 (他動詞)

また、例 (39) や例 (40) のように前項動詞が移動の意味を含まない状態変化動詞との場合は「V1 することによって、対象を中に入れる」という意味を表す。

- (39) 鍋に八丁味噌をこし {入れた/*込んだ} 。 (他動詞)
 (40) 高菜漬けを混ぜ合わせ、そこに豆腐をちぎり {入れた/*込んだ} 。 (他動詞)

おわりに

以上、内部移動を表す日本語の複合動詞「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の特徴を考察した。その結果、前項動詞に広義の位置変化の意味が含まれている場合は「V1 込む」と「V1 入れる」が置き換えやすいことを指摘した。また、「V1 込む」は様々な動詞と結合するが、「受ける」「借りる」「迎える」のような「自分の方に移動してくる」という求心的な意味を表す動詞とは結合しにくいことを明らかにした。一方、「V1 入れる」は「払う」「貸す」「売る」など「自分の方に離れていく」の意味を表し動詞とは結合にくく、「主体の無意志的変化」や「人間の生理・心理」を表す動詞とは結合しないことを明らかにした。

今回は「V1 込む」と「V1 入れる」の前項動詞の違いについて考察した。「V1 込む」と「V1 入れる」の意味についても少し触れたが、今後はさらに詳しい考察が必要である。また、

「V1 込む」と結合する「対象に働きかける動詞」や「対象の変化」を表す動詞グループをさらに細かく分類し、「V1 込む」の意味をより明確にする予定である。

注

- 1) 現代語で「込む」は本動詞としては用いられず、複合動詞の後項としてしか用いられないのに対し、「入れる」は本動詞としても複合動詞の後項としても用いられるという違いがある。古語の「込む」や現代語の「入れる」の意味についても比較する必要があるが、紙幅の都合で今後の課題とする。また、現段階では、「寝込む」「付け込む」などの語が一語化しているものかどうかの判断が難しいので、これも今後の課題とする。
- 2) 例 (1) ~ (40) は全て「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版」や「Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）」から抽出した実例を基に作例したものである。
- 3) 「気分が落ち込む」とは言うが「気分が落ちる」とはあまり言わないため、「落ちる」の多義によるものではなく「落ち込む」という複合語になった後の派生であると考えられる。
- 4) 姫野 (1978: 49–50, 65) の表のうち「V1 込める」と「V1 入る」を省略し、全体的に見やすいように表の体裁を修正した。また、一部平仮名表記であったものを漢字表記に改め、他のページにある「V1 込む」の前項動詞についての論述を表に書き入れた。
- 5) このグループは奥田 (1992) の接触動詞、とりつけ・とりはずし動詞、うつしかえ動詞の集合である。
- 6) 「割り込む」は少し特殊である。前項動詞の「割る」は対象の状態変化を表す他動詞であるが、「割り込む」の中では元の他動詞の意味が希薄化している。「列に割り込む」は「列を押し分け、その中に無理矢理入る」という意味を表すが、「列を」とはならず、「割り込む」全体で意志的自動詞として機能している。また、「人口が1億人を割り込む」は対象を「ヲ格」で表示しているため形の上では他動詞構文となっているが、この「割る」は「ある基準を下回る」という無意志の変化を表すもので、典型的な他動詞構文から外れている。このような「込む」の多義性については別稿で論じることにする。
- 7) 先の例 (17a) の「*裏蓋にロゴを彫り入れる」や例 (20) の「*皮膚に薬を塗り入れる」が使えないのは「裏蓋」や「皮膚」が平面で空間でないことと関連していると考えられる。（査読者のアドバイスによる。）これについては今後の課題とする。

参考文献

- 奥田靖雄 (2015) 『奥田靖雄著作集3 言語学編(2)』むぎ書房。
 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。
 姫野昌子 (1987) 「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞類」, 『日本語学校論集』5, 47–70頁。
 松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』

由本陽子, 岸本秀樹編, くろしお出版, 175-193 頁。

羅菲凡 (2023) 「移動を表す複合動詞「V1 出す」と「V1 出る」の前項動詞の特徴について」『東アジア日本学研究』第 9 号, 71-80 頁。

コーパス :

Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版) : <https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php>

現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版 : <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

複合動詞レキシコン : <https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>

A study on features of the first verb of compound verbs "*V-komu*" and "*V-ireru*"

LUO, Feifan

Abstract

This study discusses the features of the first verb of compound verbs "*V-komu*" and "*V-ireru*" which express internal movement.

By using the corpus, 253 type frequency of first verb of "*V-komu*" and 65 type frequency of "*V-ireru*" were extracted and modified and classified based on Okuda (1992) verb classification. The results show that, in terms of lexical meaning, "*V-komu*" combines with most verbs, but "*V-ireru*" does not combine with the intransitive verbs that express "action/change verbs as self-motion (*jikounndou*)," "change/natural phenomenon (*hennka/shizengensyou*)", and verbs that express "human contact verbs (*ningenteki na sessyoku*)", "volitional activity (*ishi katsudou*)", "human physiological/emotional state(*ningen no seiri/jyoudouteki na jyoutai*)".

In addition, these verbs can be divided into three types: (1) when they are combined with both "*V-komu*" and "*V-ireru*" (those whose meaning does not change much when "*V-komu*" and "*V-ireru*" replace each other and those whose meaning changes when "*V-komu*" and "*V-ireru*" replace each other), (2) when they are only combined with "*V-komu*", (3) when they are only combined with "*V-ireru*", then the difference between "*V-komu*" and "*V-ireru*" is specifically discussed.

Keywords : compound verb, *V1-komu*, *V1-ireru*, the first verb, intransitive/transitive

中国人学習者の日本語文産出における有生性の影響 —絵描写課題による一考察—

謝 展眉（浙大寧波理工学院）

要旨

英語や日本語などの諸言語を対象とした心理言語学実験では、概念の有生性情報が文産出において文法符号化プロセスに影響することが明らかになっている。中国語母語話者の中国語産出でも、関係節や等位名詞句構造の産出から有生名詞をより優先的に主語または文の早い位置に割り当てる傾向が見られた。しかし、誤用分析などでは、中国人日本語学習者は日本語母語話者が「私は肩を先生に叩かれた」のように言うところを、「私の肩は先生に叩かれた」、「(男が) 石に転ばれた」などのように不自然に表現する傾向がある。これは、日本語母語話者は有生名詞を優先的に文の主語とする一方、中国語母語話者にはこうした選好性がないという中日両言語の相違を示した。

このように、中国語母語話者の産出において母語と外国語の間で異なる有生性の影響が示唆されたが、文処理の観点からは検証されていない。したがって、本研究は絵描写課題を通して、中国人学習者の日本語文産出における有生性効果を判明させようとした。他動詞文の産出を考察した結果、中国人学習者は日本語を産出する際、能動文と正順語順(SOV語順)を強く好む一方、有生名詞を文の主語とする傾向もあった。動作者への選好性が否定できないものの、有生性の影響も確認された。これに基づいて、中国人学習者の日本語文産出プロセスに2段階の処理メカニズムが存在していると考えられる。

キーワード： 文産出、有生性、概念接近度、言語処理、日本語学習

はじめに

中国人日本語学習者の誤用分析では、受動文の誤用が多く挙げられている。例えば、「私は肩を先生に叩かれた」「私は髪を母に切られた」のような持ち主の受身を、中国人日本語学習者はよく「私の肩は先生に叩かれた」(Feng, 1993)、「私の髪は母に切られた」(王忻, 2008)のように表現する。また、「幸せな生活は私たち一家に送られている」(顧・徐, 1980)、「ご飯は私に食べられた」(Feng, 1993)のように、中国人学習者は無生物名詞が文頭に来る受動文を使用することも多い。これらの典型例はいずれも文法的に正しいが、日本語としてはやや不自然である。さらに、中国人学習者は中国語の習慣に従って「(男が) 石に転

ばれた」（張蘇, 2014）、「(私は) 昨日見た映画に感動されました」（劉寧暉, 2021）のような無生物を動作者、有生物を受動者にした文を産出する場合もよく見られる。

Feng (1993) と張麒声 (2001) によると、中国語の受動文において無生物主語の出現頻度が日本語より高いため、中国人学習者はこれに影響され、日本語の誤用をすることが考えられる。陳岩 (2007) も被害を表すとき、中日両言語も受動文を使用するが、日本語は所有者の人間名詞に注目するのに対して、中国語は物に注目すると指摘し、この違いで日本語の誤用が生じたと述べた。

また、張麒声 (2001) は、日本語には文の主語位置に来る優先順位を示す「名詞ランキング」が存在し、無生物名詞よりも人間名詞などが主語になりやすいと指摘した。その一方、中国語には主語になる名詞に対する選好性がない。例えば、日本語母語話者は「僕、例の酒を飲んでしまった」を言うところを、中国人学習者は「例の酒が僕に飲まれた」のように表現する傾向が見られた。張麒声 (2001) は、こうした表現の違いは名詞ランキングの欠如、つまり中国語では「衣服被我弄脏了」（服が僕に汚されちゃった）と「我把衣服弄脏了」（僕、服を汚しちゃった）が同等に使われることに起因するのではないかと述べている。

張麒声 (2001) は文学作品の例を引用して、中日両言語の表現の違いを翻訳の観点からも提示した。例えば、中国語の「这个字终于被我写像样了」に対応する日本語訳は、「この字はついに私によってまともに書かれた」よりも「私はとうとうこの字を上手に書けるようになった」のほうが自然である。Shioiri (2017) も中国語の無生物主語をもつ受動文がよく日本語の能動文に訳されると指摘した。例えば、「……有几粒玉米被啃了下来」は「…五、六粒かじりとった」に、「却之练习写下的一张张小楷，被两个孩子拿去欣赏品味」も「却之が練習に書いた字を姉弟は手にとって鑑賞した」のように日本語に訳された。

以上のように、誤用分析の研究はある程度、主語の付与における中日両言語の相違を述べた。すなわち、日本語母語話者は有生名詞を優先的に文の主語とする一方、中国語母語話者の産出には有生名詞への選好性が見られていない。しかし、心理言語学などの実証的研究から、誤用分析研究の結論と異なる証拠が得られた。

1. 研究背景と目的

まずは、本研究の中心点となる文産出について説明する。

1.1 文産出プロセスと概念接近度

Levelt (1989) の言語産出モデルによると、発話は特定の言語形式に変換される前に、概念化(conceptualization)、形式化(formulation)および調音(articulation)という三段階の産出プロセスを経験する。概念化段階では、発話者は伝えたいことを計画する、すなわち発話計画を立てて概念表象を構築する。この際、記憶から概念を検索する容易さを表す

「概念接近度」が機能し、接近度のより高い概念が優先的に活性化され、概念表象に取り込まれる。この概念接近度に影響する要素として、具象性(Bock & Warren, 1985)、典型性(Kelly, Bock, & Keil, 1986)、既知性(Bock & Irwin, 1980 など)、有生性(Tanaka, Branigan, McLean, & Pickering, 2011 など)などが挙げられている。例えば、「漁師がボートを運んでいる」という出来事を伝えるとき、有生名詞「漁師」の方が無生名詞「ボート」よりも早めにアクセスされ、後続の処理に影響を及ぼす(Tanaka et al., 2011)。

次に、概念表象は形式化を通じて言語形式に具現化される。接近度のより高い概念も優先的に形式化を経験する。この段階では、さらに統語表象（統語形式）の構築に関わる文法符号化(grammatical encoding)および音韻形式の構築に関わる音韻符号化(phonological encoding)が含まれている。本研究は文法符号化にのみ注目する。

Bock and Levelt (1994)は文法符号化の中に、さらに機能的処理(functional processing)と位置的処理(positional processing)の2段階があると仮定した。機能的処理では、メンタルレキシコン（心的辞書）から概念に対応する語彙を選択して文法機能を付与する。位置的処理では、構造素配列と語尾変化を操作する。こうした文産出プロセスは漸次的なものであると考えられている。一般的には、最初に活性化した概念は機能的処理を通して優先的に文法機能を付与され、位置的処理を通して優先的により早い文位置に割り当てられる。したがって、概念の検索、つまり概念接近度に影響する要素は形式化段階のすべての操作に効果を及ぼす可能性が極めて高い。

1.2 言語産出における有生性の影響

MacDonald, Bock, and Kelly (1993)は聞いた文を再生する文再生課題を使って英語母語話者の産出を考察した。その結果、英語母語話者は文を再生するとき、「冷蔵庫は農夫によって買われた」(A refrigerator was purchased by a farmer)のような無生名詞主語をもつ受動文を、「農夫が冷蔵庫を買った」(A farmer purchased a refrigerator)のような能動文に変更する傾向が見られた。英語の語順制限により、この傾向は有生名詞を文のより早い位置に割り当てる選好性を同時に示した。また、Nice and Dietrich (2003)は絵を見てその内容を説明する絵描写課題でドイツ語母語話者の文産出における有生性の影響を検証した。ドイツ語母語話者は書面と口頭両方の産出課題においても、「熊がスーツケースを押す」(Der Bär schiebt den Koffer)の絵よりも、「車椅子が豚を押す」(Der Rollstuhl schiebt das Schwein)のような無生物が動作者である絵に対して受動文を多く産出した。この結果も語順の決定または主語の付与に対する有生性の影響を示した。

さらに、Tanaka et al. (2011)は文再生課題で日本語母語話者の文産出を考察した結果、日本語母語話者には「漁師がボートを運んだ」あるいは「ボートを漁師が運んだ」のように再生の順番に関わらず、有生名詞を優先的に主語とする能動文、または「漁師がボートを運んだ」あるいは「漁師にボートが運ばれた」のように、文法機能に関わらず有生名詞

を優先的に文頭に割り当てた文を産出する傾向があった。特に重要なのは、こうした傾向は互いに独立しており、日本語において名詞の有生性が機能的処理と位置的処理の両方へ直接に影響することが実証された。

Philipp, Bornkessel-Schlesewsky, Bisang, and Schlesewsky (2008)は ERPs (事象関連電位) を用いて中国語の文理解研究を行った。その結果、中国語母語話者が文を読んでいる際、第一名詞の無生物が動作者であると気づいた時点で、N400 (意味違反に対して惹起する陰性電位) が観察できた。これは中国語母語話者の文理解において、有生性が名詞項の間の意味関係を理解するうえの重要な手がかりであることを示した。また、文理解に限らず、中国語の文産出にも有生性の影響が見られた。Hsiao and MacDonald (2016) は絵描写課題を通して、主要名詞が有生物の場合、中国語母語話者は受動構造の関係節を圧倒的に多く産出する傾向を考察できた。したがって、関係節の構造選択に対する主要名詞の有生性の影響が確認された。さらに、Yan and Dong (2011) では同じ課題を通じて、中国語母語話者が「A と B」といった等位名詞句構造において、有生名詞を先行して発話する傾向が証明された。例えば、中国語母語話者は「浮浪者が…幸福と妻を見つけた」(流浪汉……找到了幸福和妻子) よりも「浮浪者が…妻と幸福を見つけた」(流浪汉……找到了妻子和幸福) を多く産出した。

1.3 研究の目的

このような有生名詞を優先的に主語または文のより早い位置に付与する現象を以下、「有生性効果」と呼ぶ。先行研究では多くの言語にわたって有生性効果を観察できた。上記の実証的研究では、中日両言語の文構築に有生性効果が共通して証明され、中国語母語話者の有生名詞に対する選好性も見られた。その一方、誤用分析などによると、中国人学習者の日本語産出から母語と違った傾向が示された。要するに、中国語母語話者の産出における有生性効果は母語と外国語の間で異なるのかという問題が残されたが、これは文産出の観点でまだ十分に検証されていない。

本研究の目的は、この問題に基づいて、中国人学習者の日本語文産出における有生性効果の検証、さらにその考察によって中国人学習者の日本語処理メカニズムを明らかにすることである。

2. 研究方法

本研究は絵描写課題を利用した。絵描写課題は自由度が高く、産出傾向そのものを調べる意味合いが強い（森下ほか、2011）ほか、記憶力、単語の親密度や文理解の影響も比較的に少なく、文産出の考察に広く使われている。本研究では、中国人学習者の日本語文産出において有生性効果が見られるかどうか、また、日本語母語話者の産出に考察できた有生性効果が学習されるかどうかについて、構造的プライミング手法を加えた絵描写課題で

中国人学習者の日本語処理メカニズムを調べることにした。

構造的プライミングは直前に接触した構造を再利用する現象を指している。構造的プライミング手法の利用を通して、有生性情報の処理に対する学習の考察ができるほか、協力者が実験中、一律に同じ構造を使う状況を避けることもできる。直前に接触した文は「プライム文」と呼ばれている。協力者がプライム文と同じ構造を再利用した場合、プライミング効果があったと言える。

2.1 実験協力者

中国人日本語学習者 29 名が実験に参加した。絵描写課題を完成するには比較的高い日本語力が必要なため、協力者は全員日本語能力試験一級(N1)に合格している（平均得点 125 点、範囲 101~176 点）。手順を間違えた 1 人を除き、本研究は最終的に、28 名のデータを分析対象とした。

日本語能力試験は「言語知識（文字・語彙・文法）」「読解」「聴解」の 3 科目で構成されているため、同じ点数の場合でも科目の偏りが存在する。したがって、協力者の日本語能力をさらに区別するように、本研究では、N1 の総合得点（満点 180 点）および文法能力と関連性の高い「言語知識」科目的得点（満点 60 点）を参考に協力者を分類した。N1 の総合得点と「言語知識」得点の中間値はそれぞれ 116 点と 40 点であるため、両方の得点も中間値を超えた 14 名の学習者を上位群、その他の 14 名を下位群に分けた。

上位群の場合、総合得点と「言語知識」得点の平均値はそれぞれ 140 点 ($SD = 19.84$) と 48 点 ($SD = 8.48$) であり、下位群の場合ではそれぞれ 109 点 ($SD = 5.13$) と 33 点 ($SD = 3.95$) である。対応なしの t 検定によると、上位群の得点はいずれも下位群より有意に高いことが分かった（順に $t (26) = 5.81, p < .001$; $t (26) = 6.34, p < .001$ ）。

2.2 実験材料

構造的プライミング手法を利用したため、絵を説明する直前に接触するプライム文として、語順（正順語順・かき混ぜ語順）、ヴォイス（能動文・受動文）と動作者（有生動作者・無生動作者）を組み合わせて 8 種類の他動詞文を作成した。

また、有生名詞に対する日本語母語話者の処理に対応しながら、プライム文を 3 つの条件に分けた。それぞれは、有生主語をもつ「有生主語」プライム、有生名詞が無生名詞に先行する配列をもつ「有生一無生」プライムと「ベースライン」である。「有生主語」プライムの条件から主語の付与に対する有生性の影響、「有生一無生」プライムの条件から名詞配列の決定に対する有生性の影響を考察した。以下、この 2 つの条件を「ターゲットプライム」と総称する。有生名詞の処理に影響を与えない無生主語と「無生一有生」配列を共にもつ文を「ベースライン」として、学習者本来の産出傾向を考察するために用いた。プライム文の例を表 1 に示した。

表1 プライム文の例

プライム条件	ヴォイス	語順	
		正順語順	かき混ぜ語順
有生主語 ターゲット	能動	秘書が電話を切った。	電話を秘書が切った。
	受動	スキーヤーが雪崩に巻き込まれた。	雪崩にスキーヤーが巻き込まれた。
プライム 有生一無生	能動	秘書が電話を切った。	スキーヤーを雪崩が巻き込んだ。
	受動	スキーヤーが雪崩に巻き込まれた。	秘書に電話が切られた。
ベース	無生主語&	能動	雪崩がスキーヤーを巻き込んだ。
ライン	無生一有生	受動	電話が秘書に切られた。

協力者に提示する絵については、最初に有生動作者と無生動作者の両方を取ることでできる 27 の他動詞を使って 54 枚の絵を作成した。さらに、54 枚の絵を「出来事の合理性」「文と絵の一致性」「絵自体の分かりやすさ」という 3 つの指標で評価するアンケート調査（尺度 1~7、7 は最も高い得点）を実施した。最終的に、得点の高い順で有生動作者と無生動作者の絵を 15 枚ずつ、合計 30 枚の絵を選定した。

2.3 手順

実験の目的を意識させないために、協力者にこの実験は単語再認課題であると指示し、単語学習フェーズを最初に実施した。

本番の実験では、協力者はまず、500 ミリ秒の十字記号の後に出てくるプライム文を声に出して読んだ。特に、ベースラインのプライム文は一回に 1 文のみ、ターゲットプライム文は一回に 3 文連続して提示された。500 ミリ秒後、絵の説明に必要な単語が提示され、協力者はそれらの単語を黙読して発音と意味を確認した。4000 ミリ秒後、一枚の絵が提示され、協力者は直前に見た単語を使って絵を説明した。産出した文の構造を制御するため、説明する際、協力者は格助詞「が・に・を」を使って完全文を作るよう指示された。

完全文を産出した後、動詞の再認問題をすぐに提示され、協力者は 3000 ミリ秒以内で「この動詞は学習フェーズで見たことがありますか」という質問を「はい／いいえ」で答えた。ターゲットプライムとベースラインを提示する場合における一試行の流れをそれぞれ図 1 に示した。

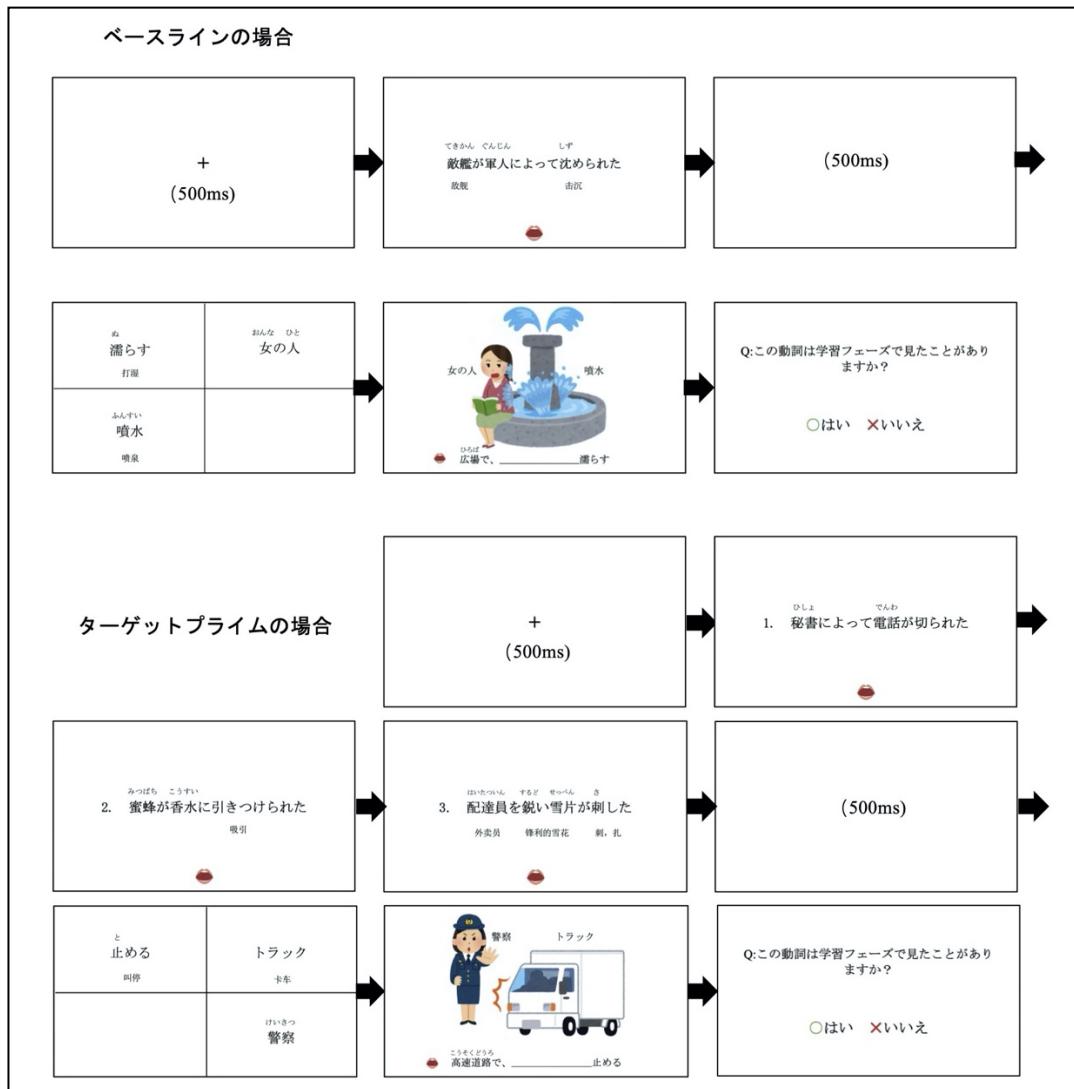


図1 実験の流れ（一試行）

協力者はランダムに各ターゲットプライム条件に割り当てられた。最終的に、上位群の6名と下位群の8名が「有生主語」プライムを、上位群の8名と下位群の6名が「有生—無生」プライムを受けた。一人の協力者はベースライン10文とターゲットプライム60文に接触し、合計30枚のターゲット絵を説明した。協力者の回答はすべて録音された。

3. 分析と結果

提示された絵に対する協力者の説明が分析の対象とされた。中国人学習者の日本語処理メカニズムとその過程にある有生性効果を判明させるために、協力者が産出した文をボイス、語順、有生主語、「有生—無生」配列という4つの側面から考察を行った。

3.1 ボイスの産出

まず、協力者のボイスの産出状況を考察した（図2）。協力者は産出の直前に接触した

3つのターゲットプライムには同じ構造（能動文あるいは受動文）が必ず2文あるため、1文のみ現れるベースラインプライムと比較して、接触頻度によるプライミング効果の違いを考察した。

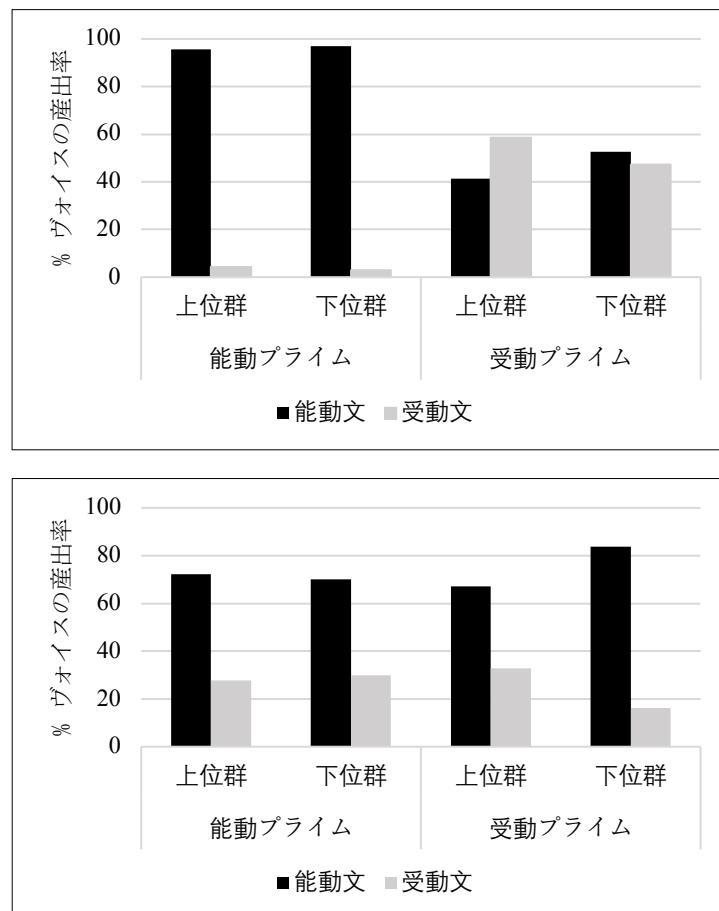


図2 ベースライン条件（上）とターゲット条件（下）における能動文と受動文の産出割合

ベースラインの文に接触した後の産出について、反応タイプ（能動・受動）×群（上位・下位）×プライム種類（能動・受動）を独立変数とした三元配置分散分析を行った結果、反応タイプの主効果 ($F(1, 52) = 109.43, p < .001$) および反応タイプとプライム種類の交互作用 ($F(1, 52) = 142.25, p < .001$) が見られた。すなわち、協力者は有意に能動プライムの後に能動文を、受動プライムの後に受動文をより多く産出した。単純主効果検定の結果として、能動プライムの後に産出された能動文は受動文より圧倒的多い一方、受動プライムの後に同じ程度の能動文と受動文が産出された。「群」の主効果が見られなかったため、上位群と下位群は同じ傾向を示した。

実験デザインのため、プライム文の動作者の有生性はいつもターゲット絵と異なる。ベースラインの場合、能動プライムの後に現れる絵の動作者は必ず有生動作者、受動プライムの後に現れる絵の動作者は必ず無生動作者となっていた。したがって、学習者は全体的

に能動文を好む中、無生動作者の出来事において、受動プライムに触れた直後に受動文をより多く産出したことから、ヴォイス（受動態）のプライミング効果が判明した。

続いて、同じ三元配置分散分析でターゲットプライム条件におけるヴォイスの産出を考察した結果、反応タイプの主効果 ($F(1, 52) = 152.74, p < .001$) のみが見られた。すなわち、プライム文のヴォイスに関わらず、協力者は能動文を圧倒的に多く産出した。この傾向も上位群と下位群に共通した。

ターゲットプライム条件において受動文のプライミング効果がなくなったのは、実験デザインの影響が考えられる。ベースラインと違って、各プライム文の後に来る絵の出来事には有生動作者と無生動作者の両方もある。有生動作者の絵が提示された時、協力者は優先的に有生動作者を主語とした能動文を産出したため、受動プライムが受動文の産出を引き出さなかった可能性が考えられる。

要するに、ヴォイスのプライミングが発生するが、その効果は出来事の動作者の有生性にも影響されることが明らかになった。

3.2 語順の産出

次に、語順産出の全体像、すなわち絵の直前に現れるプライム文と一致する語順の産出割合を考察した。

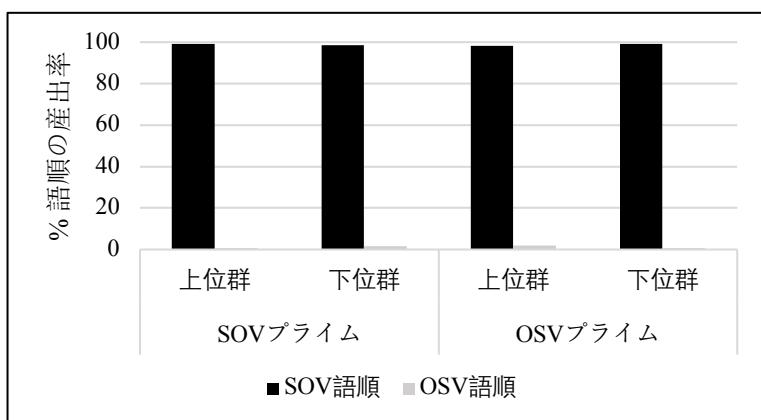


図3 SOV語順とOSV語順の産出割合

群（上位・下位）×プライム種類（正順語順・かき混ぜ語順）を独立変数とした二元配置分散分析を行った結果、プライム種類の主効果 ($F(1, 26) = 6147.41, p < .001$) のみが見られた。つまり、正順語順のプライム文に従う SOV 語順の産出はかき混ぜ語順のプライム文に従う OSV 語順の産出より有意に多い。

3.3 有生主語の産出

前述のとおり、ベースラインの文は無生主語と「無生一有生」配列をもっているため、

協力者の有生名詞の処理に影響せず、その直後の産出は協力者本来の選好性を示すことができると思われる。したがって、協力者がベースラインの後に産出した主語を最初に分析した。

群（上位・下位）×出来事種類（有生動作者・無生動作者）×反応タイプ（有生主語・無生主語）を独立変数とした三元配置分散分析の結果、反応タイプの主効果 ($F(1, 52) = 145.25, p < .001$) および出来事種類と反応タイプの交互作用 ($F(1, 52) = 109.43, p < .001$) が見られた。すなわち、有生主語は有生動作者の出来事においてより多く使用され、無生主語も無生動作者の出来事においてより多く使用された。また、有生動作者の出来事に対して、有生主語の産出割合は無生主語より圧倒的に高い。その一方、無生動作者の出来事に対して有生主語と無生主語の産出割合に有意な差がなかった。

次に、「有生主語」プライムを受けた後の有生主語の産出に対して比較を行った。群（上位・下位）×出来事種類（有生動作者・無生動作者）×接触頻度（なし・あり）を独立変数とした三元配置分散分析の結果によると、有生動作者の出来事における有生主語の産出は無生動作者の出来事より有意に多い ($F(1, 12) = 30.00, p < .001$)。群と接触頻度の主効果および変数間の交互作用は見られなかった。すなわち、「有生主語」プライムに接触することは協力者の産出に影響がなかったうえ、全ての協力者は同じ傾向を示した（図4）。

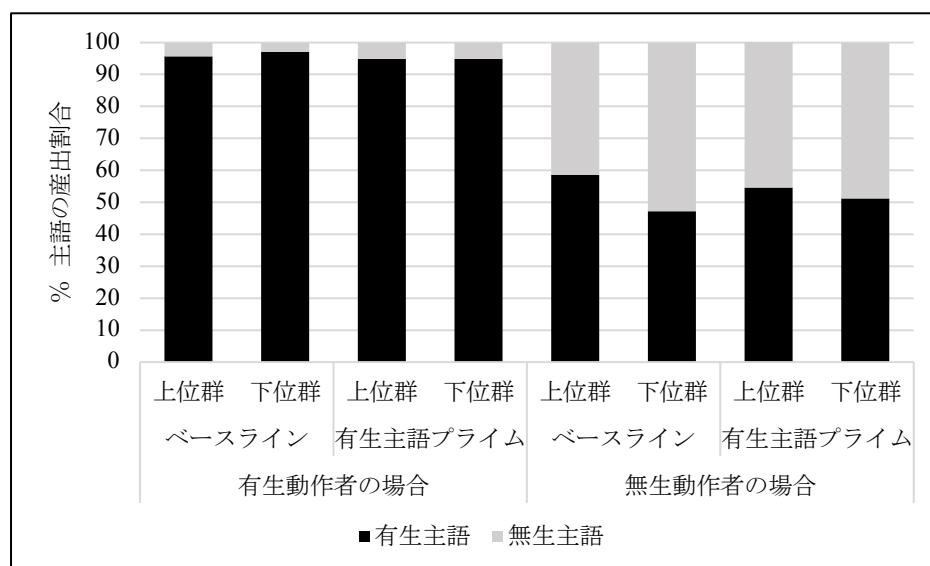


図4 有生主語と無生主語の産出割合

3.4 「有生—無生」配列の産出

前節と同じように、ベースラインの直後の名詞配列の産出について群（上位・下位）×出来事種類（有生動作者・無生動作者）×反応タイプ（有生—無生・無生—有生）を独立変数とした三元配置分散分析を行った。

その結果、反応タイプの主効果 ($F(1, 52) = 126.40, p < .001$) および出来事種類と

反応タイプの交互作用 ($F(1, 52) = 112.82, p < .001$) が有意であった。つまり、有生主語の産出と類似する傾向が見られた。「有生一無生」配列の産出は有生動作者の出来事においてより多くあるとともに、「無生一有生」配列の産出も無生動作者の出来事においてより頻繁である。また、有生動作者の出来事に対して、「有生一無生」配列の産出割合は「無生一有生」配列より圧倒的に高い一方、無生動作者の出来事に対して二種類の名詞配列の産出割合に有意な差がなかった。この傾向も協力者全体に共通している。

「有生一無生」プライムを受けた後の状況と比較した結果、有生動作者の出来事における「有生一無生」配列の産出は無生動作者の出来事より有意に多いと分かった。群と接触頻度の主効果もなかったため、プライム文の影響が確認されなかった（図5）。

さらに、異なるプライム文に接触した協力者の産出傾向における相違を確認するため、反応タイプの差が大きい無生動作者の出来事に対する各種ターゲット産出を取り出して比較を行った。プライム種類（有生主語・有生一無生配列）×接觸経験（なし・あり）×群（上位・下位）を独立変数とした三元配置分散分析の結果として、すべての要因およびその交互作用の有意効果が見られなかった。すなわち、プライム文に接触したか否か、またどの種類のプライム文に接触したかに関わらず、協力者全体にわたって、有生主語と「有生一無生」配列の産出割合に差がなかったと判明した。

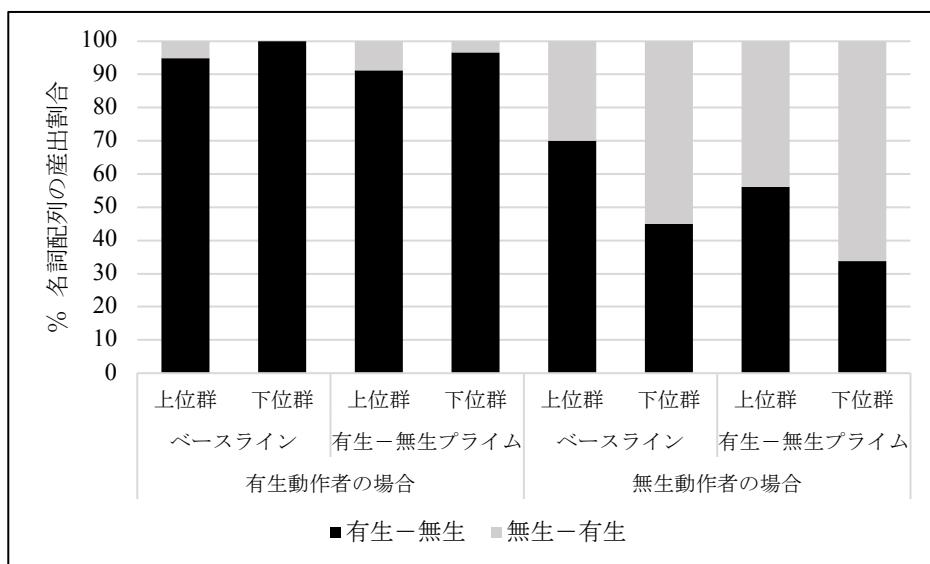


図5 名詞配列の産出割合

4. 考察

以上の結果から、中国人日本語学習者の産出傾向を一部考察することができた。

まず、ヴォイスの産出から、能動文に対する学習者の強い選好性が見られた。これは文構造自体の親密度にも関わっている。日本語の受動文を作るには、動詞を受身形に変換する必要がある。この活用は孤立語の中国語を母語とする学習者に処理の負荷をもたらすた

め、彼らは産出の際、受動文の使用を避ける傾向がある。したがって、受動文の親密度が低くなる可能性が考えられる。特に、動作者が有生物のとき、その動作者名詞は概念接近度がより高く、より優先的に主語機能と結合され、能動文の産出を引き起こした。この場合、受動文のプライミング効果が極めて限られている。しかし、動作者が無生物の場合、受動文のプライミング効果が観察できたため、概念接近度の影響を利用しながら学習者に親密度の低い構造を学習させる可能性が示唆された。

語順の産出から、正順語順（SOV 語順）に対する中国人学習者の選好性が圧倒的に高いことが確認された。日本語母語話者と違って、かき混ぜ語順（OSV 語順）への接触は中国人学習者の語順選択に影響しなかった。Deng, Oho, and Sakai (2012)によると、日本語母語話者はかき混ぜ語順のプライム文に遭遇した後、同じ語順の文をより頻繁に産出した。このプライミング効果の相違も母語の影響に起因することが可能である。中国語の語順は非常に制限されているため、中国人学習者にとってかき混ぜ語順の親密度もかなり低い。また、即時の口頭産出において、かき混ぜ語順の文を構築する負荷がより大きいため、学習者は簡単文でも主語から文を組み立てる傾向がある。

主語の産出から、中国人学習者は動作者を優先的に主語とする傾向にあることが判明した。この傾向は動作者の有生性にも強く影響されている。出来事の動作者が有生名詞の場合、動作者主語（有生主語）の産出が圧倒的に多くなり、動作者と主語との緊密な関連性が確認された。つまり、動作者の統語形式を選択するにあたって、中国人学習者は優先的に主語機能と結びつけた。そのうえ、有生性がこの主語の付与を促進したことが考えられる。

また、出来事の動作者が無生名詞の場合、学習者の産出した有生主語と無生主語には統計的に有意な差がなかった。この結果も動作者と主語との関連とともに、有生性の影響を示した。もし中国人学習者が有生主語より動作者主語を好むとすれば、無生動作者の場合でも圧倒的に多い無生主語を産出することが予測できる。したがって、有生主語の産出割合は有生性が主語の選択に与える影響を示している。つまり、名詞の有生性情報および動作者の意味情報は共に中国人学習者の日本語文構築に働きかけている。

さらに、無生動作者の出来事に対して、有生主語と「有生—無生」配列の産出の間に有意な差が見られなかつたことに加えて、学習者はほとんど正順語順（SOV 語順）を使用したことから、「有生—無生」配列は有生主語に付随したものである可能性が極めて高く、すなわち、「有生—無生」配列の産出自体も有生性から主語選択への影響を反映していると考えられる。したがって、主語の付与と語順の決定との関連性も明らかになった。

有生性情報処理のプライミング効果がなかつたことは、すべての産出が自然な傾向を表していることを意味する。上位群と下位群の産出にも有意な差がなかつたため、以上のような処理は今回の協力者全体に共通しているものと考えられる。

おわりに

本研究は主に、中国人学習者の日本語文産出における有生性情報の影響を検証し、その影響から中国人学習者の日本語文産出メカニズムを考察した。

絵描写課題では、中国人学習者は全体的に無生動作者の出来事に対して統計上同じ程度の有生主語と無生主語を産出したため、有生性情報が主語の決定に影響していると確認できた。この有生性効果は限られているものの、中国人日本語学習者の誤用を単純に母語の影響に起因できないことを示唆した。

また、かき混ぜ語順 (OSV 語順) の使用率が極めて低かったため、非主語の有生名詞を文頭に割り当てる傾向が見られなかった。すなわち、有生性情報が名詞配列の決定に直接に影響しないことを示し、配列の決定は主語機能と緊密に関連していると考えられる。

これらの結果に基づいて、中国人学習者は日本語の文を産出する際、文法符号化プロセスにおいて 2 段階の処理メカニズムが存在すると仮定できる。つまり、中国人学習者はある概念表象を統語構造に符号化するにあたって、最初の機能的処理では有生概念の機能付与が優先的に行われた。その際、有生概念が接近度のより高い主語機能と結合され、有生主語が決められた。次に、位置的処理では、主語の位置が優先的に決定され、接近度のより高い文頭位置と結合された。最終的に、有生主語が文頭にくる正順語順 (SOV 語順) の文が構築された。特に、機能的処理は有生性情報に影響される一方、位置的処理は機能的処理の結果に基づいて行われたと仮定できる。

要するに、誤用分析の主張と違って、本研究は絵描写課題を通じて名詞（または概念）の有生性情報が確実に中国人学習者の日本語文産出プロセスに影響することを確認できた。しかし、本研究で観察された有生性効果は限られており、これから多様な構文を使って異なる産出モダリティにおいて再検討する必要がある。

また、本研究では協力者を上位群と下位群に分けたが、全員が日本語能力試験一級に合格しているため、群間の違いは明らかに見られなかった。今後、さらに日本語レベルの異なる学習者を対象として、日本語文産出メカニズムに対する熟達度の影響を確認することも重要である。

参考文献

- 陈岩 (2007) 「谈汉语母语日语学习者常见的误用—以母语及本国文化干扰为例」『日语学习与研究』133、40–45 頁。
- 顧海根、徐昌華 (1980) 「中国人学習者によく見られる誤用例—疑問詞用法と受身文を中心に」『日本語教育』41、47–60 頁。
- 森下美和、中野陽子、門田修平、磯辺ゆかり、斎藤倫子、平井愛 (2011) 「授与動詞構文の産出における日本人英語学習者の統語計画：絵描写課題に基づく検討」『JACET Kansai Journal』13、50–61 頁。
- 刘宁晖 (2021) 「日语学习者被动态和使役态使用偏误的认知分析」『肇庆学院学报』42(6)、64–68 頁。

- 王忻 (2008) 『中国日语学习者偏误分析(新版)』 外语教学与研究出版社。
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例』 スリーエーネットワーク。
- 張蘇 (2014) 「中国人学習者の日本語受動文の習得研究」 東北大学国際文化研究科博士論文。
- Bock, J. K., & Irwin, D. E. (1980) "Syntactic effects of information availability in sentence production", *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, pp. 467-484.
- Bock, J. K., & Levelt, W. (1994) "Language production: Grammatical encoding", In M.A.Gernsbacher ed., *Handbook of psycholinguistics*, San Diego: Academic Press, pp. 945-984.
- Bock, J. K., & Warren, R. K. (1985) "Conceptual accessibility and syntactic structure in sentence formulation", *Cognition*, 21, pp. 47-67.
- Deng, Y., Ono, H., & Sakai, H. (2012) "How Function Assignment and Word Order are Determined: Evidence from Structural Priming Effects in Japanese Sentence Production", *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 34, pp. 1488-1493.
- Feng, F. R. (1993) "On influences of the mother tongue Chinese language on the learning processes of Japanese passive voice", *Journal of Educational Psychology*, 41, pp. 388-398.
- Hsiao, Y., & McDonald, M. C. (2016) "Production predicts comprehension: Animacy effects in Mandarin relative clause processing", *Journal of Memory and Language*, 89, pp. 87-109.
- Kelly, M. H., Bock, J. K., & Keil, F. C. (1986) "Prototypicality in a Linguistic context: Effects on sentence structure", *Journal of Memory and Language*, 25, pp. 59-74.
- Levelt, W. J. M. (1989) *Speaking: From intention to articulation*, Cambridge: MIT Press.
- McDonald, J. L., Bock, K., & Kelly, M. H. (1993) "Word and world order: Semantic, phonological, and metrical determinants of serial position", *Cognitive Psychology*, 25, pp. 188-230.
- Van Nice, K. Y. & Dietrich, R. (2003) "Task-sensitivity of animacy effects: Evidence from German picture descriptions", *Linguistics*, 41 (5), pp. 825-849.
- Philipp, M., Schlesewsky, I. B., Bisang, W., & Schlesewsky, M. (2008) "The role of animacy in the real time comprehension of Mandarin Chinese: Evidence from auditory event-related brain potentials", *Brain and Language*, 105, pp. 112-133.
- Shioiri, S. (2017) "Japanese transitive and intransitive verbs corresponding to Chinese BEI passives", *KGU Journal of Language and Literature*, 24, pp. 1-23.
- Tanaka, M. N., Branigan, H. P., McLean, J. F., & Pickering, M. J. (2011) "Conceptual influences on word order and voice in sentence production: Evidence from Japanese", *Journal of Memory and Language*, 65, pp. 318-330.
- Yan, H., & Dong, Y. P. (2011) "The effect of conceptual accessibility on positional processing during language production: Evidence from Chinese NP conjunctions", *Foreign Language Teaching and Research*, 43, pp. 239-250.

How animacy affect sentence production of Chinese JFL learners: Evidence from Japanese picture descriptions

XIE, Zhanmei

Abstract

In psycholinguistic experiments that focus on various languages, including English and Japanese, it has been revealed that the animacy of concepts significantly influences the grammatical encoding process in language production. Chinese native speakers exhibit a tendency to preferentially assign animate nouns to subjects or earlier positions in the construction of relative clauses or noun phrase (NP) conjunctions.

Error analysis studies have observed a distinct pattern among Chinese JFL (Japanese as foreign language) learners. Unlike Japanese native speakers, who would naturally say *watashi-wa kata-o sensei-ni tatakareta* (I was patted on the shoulder by the teacher), Chinese JFL learners often unnaturally phrase the same event as *watashi no kata-wa sensei-ni tatakareta* or describe “a man tripped over a rock” as *(otoko-ga) ishi-ni korobareta*. This highlights a difference in the processing of Japanese sentences: Japanese native speakers tend to prioritize animate nouns as sentence subjects, a pattern not observed in Chinese JFL learners.

Although the influence of animacy varies between native and foreign languages in the sentence production of Chinese speakers, this phenomenon has not been fully confirmed from the perspective of sentence processing. To address this gap, our study aimed to investigate the animacy effect in the Japanese language production of Chinese JFL learners using a picture-description task. We found that Chinese JFL learners strongly prefer to produce sentences in the active voice and in the canonical word order (SOV), and they also tend to assign animate nouns as the subject of a sentence. The current study confirmed the influence of animacy, despite the undeniable preference for agents. Based on our findings, we hypothesize the existence of a two-stage processing mechanism in the Japanese language production process among Chinese JFL learners.

Keywords: sentence production, animacy, conceptual accessibility, language processing, Japanese learning

レベル別の日本語教科書の計量的分析 —日中比較の観点から—

劉 婧怡（九州大学大学院生）

要旨

本研究は、計量的な分析手法を用いて日本と中国で出版された日本語学習用教科書の相違点を明らかにすることを目的とする。これにより、日中両国の日本語教育の現状及び教科書編纂の特徴を探り、将来の教科書編纂に対し、確かなデータに基づく示唆を提供することを目指している。具体的には、各レベル（初級、中級、上級）の日本語教科書の本文において、(1)言語要素、(2)話題の分布、(3)レベル分けに関する言語指標に着目し、レベル別の日中教科書間の差異を明らかにする。その結果、日中両国で出版された日本語教科書は、基本的に各国の言語教育目標と学習者のニーズに沿った編纂がなされているものの、大きな相違があることが明らかとなった。その中でも、言語的特徴における相違が最も顕著であり、中級レベルでその差が最大、上級で最小、初級はその中間に位置することがわかった。加えて、教科書の話題分布とレベル分けの基準にも著しい相違が確認された。これらの相違点を明確にすることで、今後の教材編纂においては長所を伸ばし短所を補うことが可能となり、計量的分析の結果を活用することで、より科学的な教材編纂が実現されると考えられる。

キーワード：レベル別、日本語教科書、言語特徴、日中比較、計量的分析

1. 背景と目的

本稿は、今後の日本語教科書作成に計量的な根拠を提供するため、日本と中国で出版された日本語教科書を対象に、日中比較の観点から教科書本文に含まれる言語要素がレベル別にどのような傾向を持っているのかについて計量的に分析するものである。以下では、本稿において基本概念の定義、日本と中国における日本語学習者の特徴および教材・教科書分析をめぐる研究の現状について述べる。

まず、「教科書」の定義については、本研究は吉岡（2016:6）および田中・川端（2018:79）に従い、「教科書」は「教材」の1種として扱い、教科書が教室で使用することを前提として作成された出版物とする。教科書の編纂方針は、目標言語の言語知識のみではなく、常に作成された当時の時代背景および編集国（社会文化、教育政策）における時代背景において

て学習者のニーズを反映するものである（cf. 河住 2016:50）。

次に、日本と中国における日本語学習者の特徴を概観する。日本国内の学習者は自立した言語使用者としてのスキル育成を共通の目標としているが、中国の日本語学習者は日本文化への関心だけでなく、留学や就職など実利的な目標も持っていることが特徴的である。具体的には、日本の日本語学習者はすでに日本に在住している外国人の学習者で、学習者の母語、文化背景、学習目的は多様である。文化庁（2023）「国内の日本語教育の動向」¹⁾における出身地域別の状況の統計結果によると、アジア地域、特に中国出身の学習者が多く占めているが、近年非漢字圏国出身の学習者が増加していることが明らかになっている。日本国内の学習者は、日本語を母語としない児童生徒、留学生によって異なる形の日本語教育の指導が必要とされているが、共生社会という時代の要望に伴い、共通の教育・学習目標として意思疎通を図り、自立した言語学習者を育成することが求められている。一方、中国の日本語学習者は、普段中国で在住しながら母語を中国語とする学習者ことを指す。国際交流基金（2023）「日本語教育国・地域別情報（中国）」²⁾によると、世界中でも最大の規模で約105万の中国人日本語学習者に増加し、これは日中間の緊密な経済関係が、留学、日系企業への就職等の実利的なニーズがあること、文化的側面が日本への関心を強く喚起していることが挙げられる。また、中国は日本と同じく漢字圏の国であるため漢字を使用していることから、幼少期から日本文化に親しみを感じることによって、大学入試時に日本語を外国語の受験科目とする学習者が増加している。以上の相違を踏まえ、重要な言語資源である日中の日本語教科書は上記の違いをどのように扱っているのかはまだ検討の余地がある。そのため本研究は、近年の日本と中国で出版された日本語総合教科書を比較することで、以上の差異の扱い方を検討する。

最後に、既存の教科書研究の手法および問題点について述べる。既存の教科書研究では掲載されている語彙リストと文型リストを使用し、言語項目の出現傾向と導入順序を分析し、それらが反映する言語教育観を検討することが一般的であった（大関 1993；阪上 2014）。しかし、問題点として2点を挙げる。1つ目は、単なる語彙・文型リストは新出語彙や重要語彙しか含まれておらず、さらに掲載基準は一様ではないことが挙げられる（田中・川端 2018:51）。そのため、教科書の言語使用を包括的に分析するのは難しいとされている。2つ目は、新しい日本語能力試験の導入に伴い、近年の教科書は課題遂行能力を向上することを重視し（吉岡 2016）、教科書の編纂も文法重視から特定話題を重視したものに移行する。したがって、特定の話題や場面に関連する具体的な言語使用を考察するためには、語彙や文型リストよりも教科書の本文を分析することが適していると考えられる。一方で、日本語教科書の言語要素に着目した研究においては、助詞の「よ・ね」（高 2011）や複合動詞（陳 2011）など、個別の言語項目を対象とするものが存在する。しかしながら、分析対象となる教科書の種類が限られているため、計量的手法により広範な教科書を網羅的に分析した研究は、未だ十分になされていないと考えられる。

本研究では、主に 2010 年以降に日本と中国で出版されたレベル別の日本語総合教科書を対象に、教科書本文の文字表記、語彙、文構造など包括的な言語要素を計量的に分析する。異なるレベルの教科書における言語要素と話題の分布の違いを考察し、実際の教育現場での留意点を明確にする。さらに、日中の日本語教科書のレベル分けに関する要因を明らかにし、今後の教科書編纂にデータ的根拠を提示する。以下の 3 つのリサーチクエスチョン(以下 : RQ) を設定した。

RQ1 日本と中国で出版された日本語教科書において言語要素の使用傾向は異なるか、
レベル別においてどのような相違があるか

RQ2 日本と中国で出版された日本語教科書において意味内容に関連する話題の出
現傾向は一致するか。出版国によってどのような偏りがあるか

RQ3 日本と中国で出版された日本語教科書においてレベル分けについて一様に扱
うことができるか、レベルに分けに関連する言語特徴は異なるか

2. データと手法

2.1 データ

本研究では、自作の『日中日本語教科書コーパス』を用いて日中の教科書文章の言語要素の特徴を分析する。このコーパスは、主に 2010 年以降に出版された日本の総合日本語教科書 29 冊、中国の教科書 22 冊から本文と用例を OCR 機器および目視で文字化して作成された(教科書リストを付録 1 を参照)。続いて、教科書の選定基準である①日本語学習者用の総合教科書、②出版年、および③教科書のレベル分け基準について説明する。

まず、総合日本語教科書は、日本語教育機関で広く使用される一般の日本語学習者向けに編纂されたもので、語彙、文法、文字などの言語要素および 4 技能をバランスよく、総合的な日本語運用能力の向上と 4 技能のバランスの取れた伸長を目指している(吉岡 2011)。また、2010 年は新しい日本語能力試験の導入に伴う日本語教材史の転換期と考えられ、吉岡 (2016:24) は「2010 年以降の教科書に見られる特徴は、(中略) 文型などのことばの表現形式より話す内容を優先し、日本語を習得することにより何ができるということを目標設定した教材が新たに作成され始めた」と指摘している。そのため、近年の日本語教育現状をよりよく反映できる 2010 年を目安とし、それ以降に出版された教科書を対象とした。なお、本研究は日中におけるレベル別の日本語教科書の検討を目的とするため、シリーズ教材の各レベルのものを可能な限り網羅することを重視している。したがって、同一シリーズ内の他の教科書が 2010 年以降に出版されている場合、そのシリーズに含まれる 2010 年以前に出版された教科書についても研究対象に含めることとした。

表1 『日中日本語教科書コーパス』の基本情報（出版国_レベル）

	日本_初級	日本_中級	日本_上級	中国_初級	中国_中級	中国_上級	総計
文章数	546	301	81	157	149	161	1,395
延語数	98,563	110,337	90,129	34,762	68,130	206,192	608,113
異語数	34,981	39,023	24,919	13,034	23,216	52,320	187,493
文数	10,378	6,179	3,124	3,708	4,094	9,941	37,424

さらに、本研究における文章のレベルは基本的には教科書の「まえがき」や「はじめに」の部分に所記されたレベルに従い³⁾、レベルが明確にされている教科書の本文を研究対象とした（表1）。教科書の本文は、編集方針となるシラバスの影響を受けるが、教科書の中核をなす部分であり、言語構造における「言語要素」と場面や話題における「内容要素」は、車の両輪のようにどちらも欠かせない部分だと考えられる。また、教科書においてレベル分けの基準は、初級は日本語能力試験 N4 レベルまでの単語や文法を身につける学習者を対象とし、中級は N3～N2 レベル程度の日本語力を目指す過程にある学習者、上級は N1 レベル程度の日本語力を目指している学習者が対象になる。ここでは、教科書において記載されている教育目標の具体例を取り上げる。

(1) 『学ぼう ほんご』における各巻の目標⁴⁾ :

初級1と初級2の教育目標は、終了時には日本語能力試験 N5, N4 合格レベル目標、中級は N2 合格、上級は N1 合格レベルを目標とする。

(2) 『新編日語教程 1』（第三版）⁵⁾の前言（まえがき）において記載された教育目標：

教材的第一冊相当于新日语能力考试 N5 级别的程度，第二册相当于 N4 级别的程度，第三册相当于 N3 级别的程度，第四册相当于 N2 级别的程度。高级阶段的第五，六册则是相当于 N1 级别的程度。（筆者訳：教科書の第1巻は日本語能力試験 N5 レベルに相当、第2巻は N4 レベル、第3巻は N3 レベル、第4巻は N2 レベルに相当する。上級の第5巻と第6巻は N1 レベルに当たる。）

このように、各課の内容や学習者のニーズによって細かい調整はあるが、3段階で分けられた初・中・上級の教育目標は、日中において基本的に共通していると言える。本稿では言語要素の出現頻度を比率に変更し、両国で出版された日本語教科書文章の特徴を計量的に分析することにする。

2.2 研究手法

本節では、研究設問順に手法を詳細に説明する。

RQ1（日本と中国においてレベル別の日本語教科書の言語特徴）では、まず、文章データを形態素解析を行い、文字語彙および文構造の2つの側面から 54 の言語要素の特徴を抽出した。文章の形態素分析と特徴抽出は、自然言語処理ライブラリの spaCy (Ver. 3.4.4) と GiNZA (Ver. 5.1.2) を用いて行った（表2）。

文字語彙の側面では、文字種と語種、語彙の多様性および意味の複雑性、語彙の特性など 7 の観点、42 の言語特徴を抽出した。文構造の側面では、量および複雑性から合計 12 の言語特徴を取り出した。そのうち、品詞の解析および文構造の解析は形態素解析ツールを基準としたが、語彙の特性を表す重要度、実務性、時事性、日常度の 4 の指標は実際の言語使用および語彙の意味内容に関連するため、判定根拠を詳しく説明する。

表 2 言語特徴量の抽出

	観点	No.	言語特徴の例
文字語彙	文字種・語種	X1~X8	漢字率・漢語率・外来語と漢語(GKR)の比率など
	量	X9~X19	動詞率・名詞率・形容詞率など
	多様性	X20	Guiraud値(異語数/√延語数)
	意味の複雑さ	X21~X25	内容語の使用・語彙の抽象度など
	語彙レベル ⁶⁾	X26~X36	初級前半語彙～上級後半語彙の使用率 日本語能力試験出題基準の1級語彙～4級語彙など
	語彙の特性	X37~X41	LB(図書館書籍)・PB(出版書籍)・PN(新聞)・OC(知恵袋)・OY(ブログ)でカバー率が95%以上の語の使用率
	感情傾向 ⁷⁾	X42	感情極性平均値
文構造	量	X43~X47	文節数・文数など
	複雑性	X48~X54	平均文長・平均文節数・従属節・依存距離など

語彙の特性について、本研究では『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下:BCCWJ）主要コーパス語彙表⁸⁾』および田中（2011）の知見を参考し、分析を行った。BCCWJ では、LB（図書館書籍）、PB（出版書籍）、PM（雑誌）、PN（新聞）、OC（知恵袋）と OY（ブログ）の 6 つのサブコーパスがあり、田中（2011:81）ではそれぞれ異なる性格⁹⁾を持つことが説明している。

また、『BCCWJ 主要コーパス語彙表』では、語彙の累積度数が当該サブコーパスに於いて延語数の何パーセントを占めるかどうかカバー率（累積使用率）が昇順で、一定の基準を設けてレベル a から e までに分けられた (cf. 田中 2011:78)。サブコーパスの語彙レベルの利用について、田中（2011:84-85）では OC（知恵袋）と OY（ブログ）は日常的な語彙が反映していると見られるため、日常度の指標として使える。PN（新聞）は時事的な語彙、PB（出版書籍）は社会における種々の実務で必要になる語彙であり、LB（図書館書籍）は現代語彙の一般的ありようを反映できる重要語彙と指摘している。カバー率を語彙の特徴の程度と扱う場合、a から e の順で語彙の特性が顕著であることになるが、本研究は便宜上カバー率が 95%以上の語が教科書においてどの程度出現するかを考察し、教科書語彙の特性を分析する。

分析にあたっては、日中で出版された日本語教科書の差を検討するために、独立サンプルの t 検定で統計処理を行い、有意水準 5%以下、かつ差の効果量 (Cohen's d) が 0.2 より大きい言語特徴を分析対象として、考察を行う。

RQ2（日中の日本語教科書におけるレベル別の話題分布）について、文や文章は語彙から成り、文章の話題は必然的に語彙の意味内容と関わってくると考えられるため、本研究では話題の判定は使用する語彙の話題に従い、『話題別日本語語彙表』（中俣他 2021）¹⁰⁾を参照し各文章に話題を付与していく。文章の話題付与は、個々の使用語彙の話題特徴値に基づいて1文章ずつ話題ごとの特徴値の合計を計算し、その合計が最も大きいものに対応する話題を文章の話題とする。また、多変量解析の手法であるコレスポンデンス分析を使用し、日本と中国で出版された教科書においてレベル別の話題分布およびその差を明らかにする。

RQ3（日中の日本語教科書のレベル分けに関連する特徴）を検討するため、Python3 の scikit-learn パッケージ（Ver. 1.2.2）を用いて、ランダムフォレスト（RF）による日中の教科書の難易度判定モデルを作成した。RF は多数の決定木を組み合わせることで精度を向上させる機械学習の手法である。データセットを 8:2 の割合で訓練セットとテストセットに分割し、標準化と 5 分割交差検証を用いてパラメータ調整と最適な分類器の構築を行った。テストセットでモデルの汎化能力を評価し、10 回の繰り返しにより結果の安定性を確保した。feature_importances() 関数を用いて、日中の教科書のレベル分けに関連する要因を重要度順で可視化した。

3. 結果と考察

3.1 RQ1：日本与中国においてレベル別の日本語教科書の言語特徴の差

3.1.1 初級の日本語教科書における日中の差

初級における日本と中国で出版された教科書文章では、言語統計量の値とその差を t 検定で確認した結果、54 の言語特徴のうち、28 (54%) の統計量においてその差が有意であった。また、効果量が中程度以上 ($Cohen's d > 0.5$) で認められる（水本・竹内 2010:48）言語特徴量を表 3 で示し、文字種に関連する 3 特徴および語種に関連する漢語率と外来語と漢語の比率である GKR の値、また語彙の多様性および難易度を表す Guiraud 値、2 級語彙、4 級語彙含有率、中級前半語含有率、固有名詞率が見られる。両国で出版された教科書の統計量の平均を簡便に比較するために、「◎」（中国>日本）と「-」（中国<日本）で示す。

まず、文字種・語種の観点から見ると、初級の教科書において中国で出版されたものは漢字語彙が日本より多く使用されていることが示された。これは、中国人日本語学習者はすでに漢字知識を持っているため、初級段階には和語や外来語より漢字語彙で提示される場合がより読みやすいという可能性が考えられる。ただし、日中同形異義語の意味範疇および用法について、実際の教育現場において説明を加える必要があると考えられる。中国人日本語学習者の漢字使用を考察する研究では（河住 2005）、「簡単・緊張」など語形が同じで意味が全く異なる「日中同形語異義語」による語彙の誤用の問題が示唆されている。

表3 初級における日中の日本語教科書の言語統計量

初級言語特徴		日本 (N=546)		中国 (N=157)		中国>日本	t 値	効果量 cohens'
		Mean	SD	Mean	SD			
文字種・語種(5)	漢字率**	0.16	0.09	0.29	0.05	◎	21.80	1.68
	片仮名率**	0.10	0.07	0.05	0.06	-	-8.74	-0.73
	平仮名率**	0.74	0.10	0.66	0.06	-	-11.56	-0.92
	漢語率**	0.05	0.04	0.08	0.03	◎	10.63	0.90
	外来語/漢語(GKR)**	3.50	4.55	1.46	0.92	-	-9.36	-0.62
語彙の難易度・多様性(5)	Guiraud豊さ**	4.84	0.88	5.56	0.94	◎	8.92	0.79
	2級語彙含有率**	0.12	0.07	0.17	0.07	◎	6.70	0.61
	4級語彙含有率**	0.42	0.12	0.33	0.09	-	-9.69	-0.80
	中級前半語含有率**	0.04	0.03	0.06	0.03	◎	10.25	0.95
	固有名詞率**	0.04	0.03	0.07	0.03	◎	8.91	0.50

注1:効果量Cohen's d の算出および閾値の判定基準は水本・竹内 (2010:49) を参照

注2 : ** $p < .01$

注3 : 以上の結果を小数後2桁まで保留

表4 中国で出版された初級教科書の上位 20 の漢字語彙

	語彙素	日_中対応		語彙素	日_中対応		語彙素	日_中対応
1	先生	≠	8	時間	>	15	分	><
2	本当	φ	9	料理	><	16	医者	φ
3	大学	=	10	家族	>	17	駅	φ
4	写真	><	11	公園	=	18	学生	=
5	中	><	12	旅行	>	19	最近	=
6	勉強	≠	13	連絡	φ	20	自分	φ
7	月	=	14	会社	φ			

注1(松下他2020を参照) :

≠ 同形異義 (日≠中) 日本語と中国語の基本義が異なる

> 同形類義 (日>中) 日本語のほうが意味が広い (日本語だけに独自義がある)

< 同形類義 (日<中) 中国語のほうが意味が広い (中国語だけに独自義がある)

>< 同形類義 (日><中) 共通義があるが、日中両語ともに独自義もある

φ 非同形 (φ) 中国語には当該語が存在しない

= 同形同義 (日=中) 日本語と中国語の基本義が同じ

表4は、中国で出版された初級教科書の使用頻度が上位 20 の漢語で、松下他 (2020) の『日中対照漢字語データベース』¹¹⁾を参照し、日中の意味対応関係をつけたものを示している。表4からわかるように、「月」「公園」「学生」「最近」を除き、多くの語に異なる意味が存在する。具体的には、日本語と中国語には共通義があるが、日中両語とも独自義もある語は4つ(写真；中；料理；分)、日本語の方が意味が広い(日>中)の語が3つ(時間；家族；旅行)、日本語と中国の基本義が異なる(日≠中)語が2つ(先生；勉強)が確認できた。したがって、中国の日本語学習者を指導する際には、漢字語彙における意味のずれや使用範囲の情報を意識的に提示することが必要だと考えられる。

次に、語彙の難易度・多様性の観点から見ると、中国で出版された初級教科書において、2級語彙含有率と中級前半語含有率の使用率は日本より高い一方、日本で出版された初級教科書では、初級に相当する4級の語彙の使用が特徴であることが示される。つまり、中国の初級教科書では、初級よりレベルが高い語が有意に使用されていることが明らかになった。

さらに、文構造の観点では、日中の差は 0.5 の効果量に超えるものが見られないものの、中国の日本語教科書において、1つの文章あたりの文数が有意的に多く、依存距離が長い（修飾語や従属節が多く含まれ、主語やそれに関連する述語の距離が遠いこと）複雑な文が多いことがわかった。

3.1.2 中級の日本語教科書における日中の差

日本と中国で出版された中級教科書では、言語統計量の値とその差を t 検定で確認した結果、全 54 の指標のうち、37（69%）においてその差が有意であった。中程度以上の効果量が確認できた特徴量は、15（28%）であった（表 5）。

表 5 中級における日中の日本語教科書の言語統計量

中級言語特徴		日本(N=301)		中国 (N=149)		中国>日本	t 値	効果量 cohens'd
		Mean	SD	Mean	SD			
文字種・語種(4)	漢字率**	0.27	0.07	0.32	0.06	◎	7.73	0.78
	漢語率**	0.10	0.04	0.12	0.04	◎	5.57	0.55
	外来語率**	0.13	0.03	0.12	0.03	-	-5.53	-0.54
	外来語/漢語(GKR)**	1.57	0.81	1.11	0.50	-	-7.69	-0.69
語彙の難易度・特性(9)	2級語彙含有率**	0.20	0.07	0.24	0.06	◎	5.56	0.53
	4級語彙含有率**	0.34	0.09	0.27	0.08	-	-8.67	-0.83
	初級後半語含有率**	0.11	0.02	0.09	0.02	-	-7.82	-0.76
	名詞率**	0.22	0.05	0.24	0.05	◎	5.40	0.53
	固有名詞率**	0.02	0.02	0.04	0.03	◎	6.88	0.73
	接続助詞率**	0.05	0.01	0.04	0.01	-	-5.48	-0.55
	LB_FLカバー率>=95含有率**	0.22	0.03	0.20	0.03	-	-5.62	-0.57
	PB_FLカバー率>=95含有率**	0.23	0.03	0.21	0.03	-	-6.31	-0.63
	感情極性平均値**	-0.44	0.09	-0.38	0.13	◎	5.46	0.58
文構造(2)	文数**	20.49	11.52	27.48	10.86	◎	6.24	0.62
	副詞節含有率**	0.15	0.05	0.11	0.05	-	-6.83	-0.68

注1:効果量Cohen's d の算出および閾値の判定基準は水本・竹内(2010:49)を参照

注2: **p<.01

注3: 以上の結果を小数後2桁まで保留

まず、文字種・語種に関して、日本で出版された中級の日本語教科書では外来語の使用率が中国の教科書よりも有意に高いことが明らかになった。外来語は、一般に新しく、感覚的な語彙が多い（田中 2011:81）ため、日本の教科書が日常生活に密接に関連する「衣食住」の内容が多く、そうした語彙を受け入れやすい側面を持っていることを示唆している。

次に、語彙の難易度、品詞および特性の面においても日中の差が見られた。具体的には、日本で出版された教科書において効果量が中程度以上に多く使用されている言語特徴は、4 級語彙含有率、初級後半語含有率、接続助詞率、図書館書籍語含有率、出版書籍語含有率の 5 つである。一方、中国で出版された教科書では、2 級語彙含有率、名詞率、固有名詞率、感情極性平均値の 4 つが見られた。つまり、中国の中級日本語教科書は中級段階では、

当該レベルに相当しない難解語が出現することが示された。一方、語彙の特性に関しては、日本の教科書は実用性と重要度に焦点をあて、PB（出版書籍）とLB（図書館書籍）の高頻度語が有意に多く使用されている。これは日本で出版された教科書が日常生活で役立つ語彙に重点を置き、実用性が高い言葉に焦点を当てていることを示唆している。

例1：〈日本出版〉『できる日本語中級本冊』18課（下線は筆者、従属節を示す）

私が残したいのはふるさとの森です。先週、奥多摩という所へ遊びに行きました。そこは都会に近いのにく(1)副詞節、山が多くてびっくりしました。途中に、湧き水を使って日本酒を作っているく(2)連体節酒蔵があったのでく(3)副詞節、試飲をさせてもらいました。一口飲んでく(4)並列節、なんておいしいんだろうく(5)引用節と思いました。その人が「このお酒がおいしいのは森があるからだよ」く(6)引用節と教えてくれました。森には雨水を蓄えたりく(7)並列節、その地下を通る水をきれいにおいしくしたりく(8)並列節する働きがあるそうです。その話を聞いて、私は自分の国の森のことく(9)補足節を思い出しました。今、開発のためにく(10)副詞節、大量に木が切られています。森がなくなってしまったく(11)副詞節、雨水を蓄えるく(12)連体節ことができません。最近、洪水の被害も多くなっています。木を植えればいいと言う人もいますがく(13)副詞節、一度なくなった森林が簡単に元に戻るわけがありません。自然が再生するのにく(14)副詞節、いったいどのくらいの年月が必要になることだろうく(15)引用節だと思います。すぐにでも手を打たないとく(16)副詞節大変なことになるに違いありません。ふるさとの森を残すためにく(17)副詞節、私たちにできるく(18)連体節ことは何なのだろうかとく(19)引用節、改めて考えるようになりました。

【延語数：298 文数：15 文節数：112 平均文長：19.87 平均文節数：7.47】

例2：〈中国出版〉『中日交流标准日本语（第二版）』16課（下線は筆者、従属節を示す）

寒くなってきた。毎朝目が覚めてもく(1)副詞節、暖かい布団の中からなかなか抜け出せないく(2)連体節季節である。今年も冬がやってきた。私は冬が好きだ。寒いのは嫌いだけく(3)副詞節、白い息や、もこもこの靴下、そして何よりも、冬の空が好きだ。特に、夜の星空が。私の故郷は、長野県茅野市という自然豊かな所である。八ヶ岳の山々に囲まれ、田んぼや畑が見渡す限り広がっている。トロに出てきそうな大自然なのだ。そんな私の故郷には、とても自慢できる素敵なもののが、一つある。それが冬の夜空なのだ。澄んだ空気がきらきらしてく(4)並列節、どこまでも続くく(5)連体節真っ暗な空に、無数の星が瞬いている。涙が出そうになるくらい、素敵な夜空である。高校進学の際に上京したく(6)連体節私は、そんな星空を見られるく(7)連体節ことは年に数回、帰郷した時く(8)副詞節のみになっている。東京の夜は街のネオンやビルやマンションから漏れるく(9)連体節灯りでいっぱいだ。東京の華やかな夜景も大好きだがく(10)副詞節、私はやっぱり長野の星空に敵うく(11)連体節夜景はないなく(12)引用節、と感じる。そして今年、東京に来て三度目の冬を迎えた。すると、心なしか、少し東京の夜空に星が増えてきたようにく(13)副詞節を感じた。何故だろう。答えは「節電」だった。今年の3月に起きた東日本大震災によってく(14)副詞節、日本中で節電の意識が高まり、夜の広告灯など、光を放つものが減っているのだ。そのおかげでく(15)副詞節、少しだけ東京の街は暗くく(16)並列節、そして星空は明るくなった。

【延語数：373 文数：22 文節数：156 平均文長：16.95 平均文節数：7.09】

さらに、文構造の観点から見ると、中国の日本語教科書では文数と文節数が日本より有意に多いが、日本の日本語教科書では平均文節数、平均文長、副詞節含有率、補文節含有率、平均依存距離において中国より有意に高いことが示されている。以下では、日中で出版された教科書の本文（例1・例2）で説明する。

例1と例2はいずれも、経験した場所（観光地・故郷）から、自然環境、特に森林や星空などの自然の恵みの大切さを訴えているものである。例1は、日本で出版された教科書の1例で、奥多摩の森林が雨水を蓄えたり地下水をきれいにする役割を果たしていることを説明し、自国の森林破壊の問題を取り上げ、森を残す必要性を訴えている。例2は、中国教科書の例で、故郷である長野県の星空の美しさを描写し、東京の夜空に星が増えた理由が節電によるものだと述べている。両方とも中級の文章で、内容的には共通する部分がある。しかし、例2は文章全体の文字数が多く、語数および文数も例1より多いことが読み取れた一方例1は平均文長及び平均文節数など、文章の複雑さに関連する指標では高い値を示している。また、従属節の使用においても、例1では「～と」という引用節、「～ことを思い出した」の補足節、副詞節（逆接・理由・目的）である「のに」「ので」「ために」、並列節を表す「～たり」、および連体節など、様々な従属節が多用されている。一方、例2においても従属節は使用されているものの、例1に比べて単文の割合が高い傾向が見られた。以上のことから、日本の教材編集者は中級段階から学習者の文法能力、特に従属節や長文の理解に注目する一方、中国の教科書は文章の長さを増やすことで、学習者が日本語で読む習慣を促し、日本語に親しみを感じられるようにすることが考えられる。

3.1.3 上級の日本語教科書における日中の差

言語特徴の統計量の値における日中の差をt検定で確認したところ、初級では28(52%)、中級では37(69%)に対し、上級では18(33%)の言語特徴の差が有意に確認できた。また、中程度以上の効果量が確認できたのは、7であった（表6）。

表6 上級における日中の日本語教科書の言語統計量

上級言語特徴		日本(N=81)		中国(N=161)		中国>日本	t 値	効果量 cohens'd
		Mean	SD	Mean	SD			
語彙の難易度 (3)	2級語彙含有率**	0.21	0.10	0.23	0.07	-	-4.75	-0.65
	中級後半語含有率**	0.14	0.03	0.11	0.04	-	-7.19	-0.95
	上級前半語含有率**	0.03	0.01	0.02	0.01	-	-4.29	-0.59
文構造 (4)	文数**	38.57	17.68	61.75	33.83	◎	7.00	0.86
	平均文節数**	11.16	2.61	8.22	3.79	-	-7.05	-0.90
	平均文長**	29.98	7.48	21.62	10.28	-	-7.20	-0.93
	名詞節含有率**	0.13	0.03	0.10	0.04	-	-6.62	-0.83

注1:効果量Cohen's d の算出および閾値の判定基準は水本・竹内(2010:49)を参照

注2: ** $p < .01$

注3: 以上の結果を小数後2桁まで保留

全体的に見ると、上級の段階において初級や中級と比べて日本と中国の言語特徴の差が顕著ではないことが示唆されている。上級において文章全体の長さに関わる文数、語彙の豊かさに関連するGuiraud値 ($t(240) = 4.07, p < .01, Cohen's d = 0.44$) および上級後半語の含有率 ($t(240) = 2.74, p < .01, Cohen's d = 0.30$) を示す語彙レベルでは、日本より中

国の方が高いことが見られた。一方、日本で出版された教科書は、文章全体の長さよりも、むしろ文構造の複雑さを示す平均文長や文あたりの文節数において、顕著な高さが認められた。そのため、「上級」という同じレベルにもかかわらず、語彙の複雑性や文の複雑性に関して、日中の日本語教科書はそれぞれ特徴があることで、同一に扱うことができないと考えられる。

3.2 コレスポンデンス分析によるレベル別の日中教科書の話題分布

本節では、語彙のまとまりで表す文章の意味内容に関する教科書の話題分布を考察するために、統計分析のソフト RStudio (Version 1.4.1717) と ca パッケージを用いて、多変量分析の手法の 1 つであるコレスポンデンス分析で調査を行った。コレスポンデンス分析は、2 つの項目のクロス集計において、行と列の相関が最大になるように並べ替える。結果を視覚化するために、行の得点と列の得点を同一平面に表示する散布図を使用した。

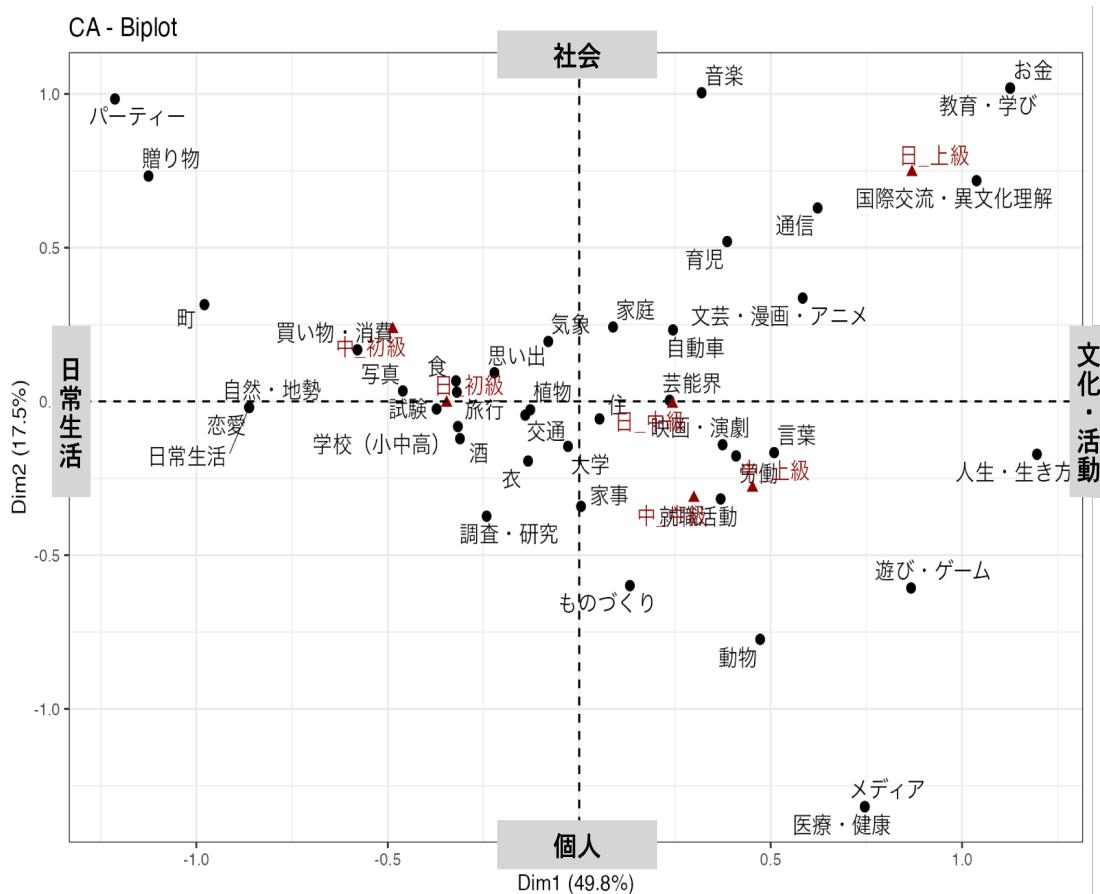


図 1 レベル別日の中の日本語教科書の話題分布

図 1 は、日本と中国で出版された日本語教科書において、レベルと話題のコレスポンデンス分析の結果を示しているものである。まず X 軸によって全体は左右に 2 分割されてい

る。右側には「文芸・漫画・アニメ」「国際交流・異文化理解」など文化活動に密接に関連している話題が特徴的である。一方、左側には「買い物・消費」「恋愛」など日常生活を表す話題が配置されている。また、Y 軸によって、上側には「パーティー」「贈り物」「教育・学び」など人間社会において社会活動に関連している話題が特徴的である一方、下側には、「医療・健康」「ものづくり」など個人の事情に関する話題が多いことがわかった。以上の発見を踏まえ、X 軸の右端と左端をそれぞれ「文化・活動」と「日常生活」、Y 軸の上端と下端を「社会」と「個人」のラベルを付け加えた。4 象限の分け方から図を分割すると、第 1 象限に分布している日本で出版された上級教科書の話題は[+文化活動]、[+社会]で、X 軸の左側である 2、3 象限に分布している初級教科書は、[+日常生活]が特徴的、X 軸の右側および第 4 象限に分布している日本で出版された中級教科書、中国の中級、上級教科書は[+文化・活動]の傾向が示されている。

また、両国の日本語教科書においてレベル別の話題分布を観察すると、出版国を問わず初級の日本語教科書では、「食」「旅行」「音楽」「写真」などが見られ、日常的な話題は特徴的なものである。また、初級以上になると、文化活動に関連する内容も取り上げられる傾向が見られる。中国で出版された中級と上級の教科書では、中国の日本語学習者の関心や学習目標に関連する「就職活動」「言葉」の内容が含まれる一方、日本で出版された中級と上級の教科書は、日本で生活できるように必要となる「育児」や「労働」に関連する話題、および近年よく言及されている多文化共生に関連する「国際交流・異文化理解」「教育・学び」の話題が特徴的なものである。前節の発見と関連して説明すると、上級の日本語教科書において言語特徴の統計量は初級と中級より顕著ではないが、取り扱う教科書文章の内容は大きな差が存在することがわかった。

3.3 RQ3：両国の教科書におけるレベル分けに関連する言語特徴

日本と中国で出版された日本語教科書のレベル分けに関連する言語特徴を明らかにするために、ランダムフォレストの手法を用いて難易度判定モデルを作成した。その結果、テストデータにおける分類精度が 86.3% および 87.4% と高く、説明力に優れた結果が得られた。また、モデルの判定に寄与する上位 10 の要因を図 2（日本）と図 3（中国）で示す。

図 2 から、日本で出版された教科書のレベル分けに関連する上位 5 の言語特徴は、語彙の豊かさを示す Guiraud 値、語彙の難易度に関連する中級後半語含有率、文構造に関連する依存距離であることがわかった。つまり、日本の教科書では、限られている文量のうちにレベル適切な多くの語を提示することが重要視され、語彙の豊かさや文構造の複雑性を十分配慮して作成されたものだと言える。一方、図 3 から、中国の教科書のレベル分けに関連する上位 2 の特徴は延べ語数と文数であり、レベルが上がるほど文章が顕著に長くなることがわかった。その次は、語彙の多様性に関連する Guiraud 値と 1 級語彙含有率、文構造の複雑性につながる最大依存距離である。1 級語彙の含有率は上位 4 になることは日

本より中国の日本語教科書の使用語彙は難しいこと意味している。

さらに、追加実験として日本および中国で出版された教科書文章に基づき作成された難易度判定モデルは、他国出版の教科書文章に適用するかを検証した。その結果、両方とも他国の教科書文章のレベルを75%程度しか正確に分類されなかつたこと窺えた。このことから、レベル分けの観点において、日本と中国で出版された教科書の差異が確認された。

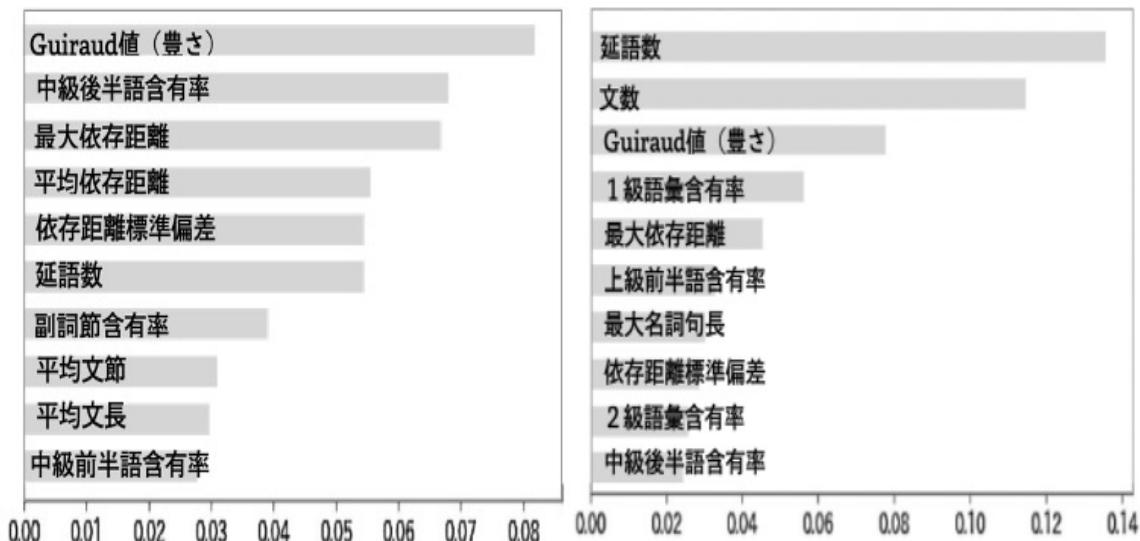


図2 レベル分けに重要な言語特徴（日本）

図3 レベル分けに重要な言語特徴（中国）

4. まとめと今後の課題

本研究は日本と中国で出版された日本語教科書の本文を対象に、計量的観点から各レベルにおける日中の差異を、(1)言語要素、(2)話題、(3)レベル分けに関連する言語指標の3点から検討した。日本語教科書は各国の学習者の現状とニーズに合致するが、各レベルの言語特徴やレベル分けの仕組みに相違点があるため、安易に同様に扱うことはできない。

RQ1（言語特徴における日中で出版された日本語教科書の差）について、日本で出版された教科書では、日常生活に密接に関連する時事性・日常度が高い語が多く使用され、レベルの上昇につれ、単なる文章の長さより文構造は複雑になることが見られた。これは在日学習者が日常会話で使える表現を学ぶことで自立した日本語話者となり、共生社会の実現に貢献することを目指しているためと考えられる。一方、中国で出版された教科書では、1)文章語が特徴的、2)語彙の難易度が相対的に高い、3)レベルが上昇につれ、延語数が増加し、文数も多くなることが確認された。これは学習者の読解量を増やし、日本語の文章への親しみを深めることで、受験や就職活動での日本語使用に対応することを意図していると推測される。

RQ2（話題の出現傾向）では、初級では差が顕著ではないが、中級以上では日本の教科書が生活や多文化共生に関連する話題を扱うのに対し、中国の教科書は就職活動や言語学習

に関する内容が多い。

RQ3（レベル分けの関連指標）では、日本の教科書はレベルが上がるほど語彙の多様性、難易度、文構造の難易度が高まるのに対し、中国の教科書は延語数と文数の増加が最も著しく、次いで語彙の多様性と難易度が高まる。これは中国の学習者が短期間で読解量を増やすことを重視していることを示唆するが、現在はコミュニケーション能力も重要視されているため、多様な表現で簡潔に伝達する力も必要とされる。

本研究で明らかになったレベル別の日中教科書文章の言語特徴は、異なる学習ニーズや母語知識を持つ日本語学習者に対応する際の補助教材や教授法の選定に役立つ基礎資料となることが示唆された。今後は、これらの調査結果を踏まえつつ、現場の教師へのインタビューや授業観察なども行うことで、現状との整合性を検証することが求められる。

注

1) 文化庁「国内の日本語教育の動向」（2023）：

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000544471.pdf> (2023.05 閲覧)

2) 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報（中国）」（2023）：

<https://www.jpf.go.jp/project/japanese/survey/area/country/2023/china.pdf> (2023.05 閲覧)

3) 教科書のシリーズによってレベルの命名が異なるため、本研究は便宜上に「初級上・初級下・初級1・初級2」で表記されるものを「初級」に分類し、中級と上級も同様に扱った。

4) 『学ぼう ほんご』（専門教育出版）における各巻の教育目標：

<http://www.aikgroup.co.jp/senmon/catalog/manabou/index.htm> (2023.09 閲覧)

5) 许小明（2021）『新編日语教程 1』（第三版）華東理工大学出版社

6) 本研究において語彙の教育レベルは、『日本語能力試験出題基準語彙表』

(<http://www7a.biglobe.ne.jp/nifongo/data/noryoku.html>, 2023.06 閲覧) および『日本語教育語彙表』(<http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV/>, 2022.07 閲覧) の語彙リストを参照した。

7) 『単語感情極性対応表』(http://www lr pi titech ac jp/~takamura/pubs/pn_ja dic, 2012.06 閲覧) を参照した。語彙ごとの感情極性平均値を計算し、その合計を文章の延語数で割る結果を文章の感情極性平均値とされる。

8) 『BCCWJ 主要コーパス語彙表』：

http://www lr pi titech ac jp/~takamura/pubs/pn_ja dic (2022.07 閲覧)

9) (1)LB（図書館書籍）は、一般的な語彙のありようを反映し、文章語をよく取り込み、語彙の基本的な部分が安定している。(2)PB（出版書籍）は、文章語的な語彙を多く含み、語彙の周辺的な部分には、新しく感覚的な語彙も取り込んでいる。(3)PM（雑誌）は、語彙の基本的な部分にまで、新しく感覚的なものを取り込んでいる。(4)PN（新聞）は、文章語的な語彙が特に多く、語彙の基本的な部分にまで、それを取り込んでいる。(5)OC（知恵袋）とOY（プログ）は、共に日常的な語彙が多くを占め、新しく感覚的な語彙も入り込んでいる。

- 10) 『話題別日本語語彙表』は、日本語教育の教材作成や授業準備のために作成された語彙と話題特徴度(log-likelihood ratio:LLR)の対応一覧表であり、話題の特徴度が高いにつれ、ある話題の特徴語と判断されやすく、特徴語と判断されれば話題との関連性が高いと説明できる。
- 11) 『日中対照漢字語データベース』第一版発行日:2017/11/24 第二版更新日:2020/4/21。本研究では第二版 <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html#cvd> を参照した(2023.09 閲覧)。

参考文献

- 大関真理 (1993) 「日本語学習用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』5、23-24 頁。
- 河住有希子 (2005) 「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7、53-65 頁。
- 河住有希子 (2016) 「日本語教材研究の視座—日本語教材研究フレームワーク作成への試案」(吉岡英幸編『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして』くろしお出版)、48-64 頁。
- 阪上彩子 (2014) 「話し言葉における「そして」の指導法—話し言葉コーパスと初級教科書の分析を通して」『神戸大学留学生センター紀要』20、61-74 頁。
- 田中牧郎 (2011) 「語彙レベルに基づく重要語彙リストの作成—国語政策・国語教育での活用のために」『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』、77-88 頁。
- 田中祐輔・川端祐一郎 (2018) 「戦後の日本語教科書における掲載語彙選択の傾向とその要因に関する基礎的定量分析」『日本語教育』170、78-91 頁。
- 中俣尚己・小口悠紀子・小西円・建石始・堀内仁 (2021) 「自然会話コーパスを基にした『話題別日本語語彙表』」『計量国語学』33(3)、194-204 頁。
- 松下達彦・陳夢夏・王雪竹・陳林柯 (2020) 「日中対照漢字語データベースの開発と応用」『日本語教育』177、62-76 頁。
- 水本篤・竹内理 (2010) 「効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために」『より良い外国語教育研究のための方法』、47-73 頁。
- 吉岡英幸 (2011) 「日本語教材から見た日本語能力観」『早稲田日本語教育学』9、1-7 頁。
- 吉岡英幸 (2016) 「日本語教材の歴史的変遷」(吉岡英幸編『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして』くろしお出版)、2-25 頁。
- 陳曦 (2011) 「日本語教科書における複合動詞の扱われ方に関する一考察—コーパスによる使用実態調査との比較を通して」『ことばの科学』24、119-131 頁。
- 高民定 (2011) 「日本語学習者の「よ」「ね」「よね」について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心」『国際教育』4、11-23 頁。

付録1：教科書リスト

日本出版(計29冊)				中国出版(計22冊)			
	教科書名	出版社	出版年		教科書名	出版社	出版年
初級	『つなぐにほんご初級1 『つなぐにほんご初級2』	アスク アスク	2017 2017	『実用日语初级上 『実用日语初级下』	『中日交流标准日本语初级上(第二版)』 『中日交流标准日本语初级下(第二版)』	北京大学出版社 北京大学出版社	2010 2010
	『大学の日本語ともだち初級Vol.1』 『大学の日本語ともだち初級Vol.2』	東京外国语大学出版社 東京外国语大学出版社	2017 2017	『中日交流标准日本语初级上(第二版)』 『中日交流标准日本语初级下(第二版)』	『中日交流标准日本语初级上(第二版)』 『中日交流标准日本语初级下(第二版)』	中国人民教育出版社 中国人民教育出版社	2013 2013
	『まるごと日本のことばと文化初級1(A2)りかい』 『まるごと日本のことばと文化初級2(A2)りかい』	三修社 三修社	2014 2014	『新大学日语标准教程基础篇1(第二版)』 『新大学日语标准教程基础篇2(第二版)』	『新大学日语标准教程基础篇1(第二版)』 『新大学日语标准教程基础篇2(第二版)』	高等教育出版社 高等教育出版社	2016 2016
	『できる日本語初級本冊』 『できる日本語初級本冊』	アルク アルク	2011 2011	『新编日语教程1(第三版)』 『新编日语教程2(第三版)』	『新编日语教程1(第三版)』 『新编日语教程2(第三版)』	華東理工大学出版社 華東理工大学出版社	2021 2021
	『学ぼう!にほんご初級1』 『学ぼう!にほんご初級2』	専門教育出版 専門教育出版	2005 2009	『実用日语中级上』 『実用日语中级下』	『中日交流标准日本语中级上(第二版)』 『中日交流标准日本语中级下(第二版)』	北京大学出版社 北京大学出版社	2012 2012
	『初級日本語げんき1(第3版)』 『初級日本語げんき2(第3版)』	ジャパンタイムズ ジャパンタイムズ	2020 2020	『実用日语中级上』 『実用日语中级下』	『中日交流标准日本语中级上(第二版)』 『中日交流标准日本语中级下(第二版)』	北京大学出版社 北京大学出版社	2015 2015
	『初級日本語新装改訂版上』 『初級日本語新装改訂版下』	凡人社 凡人社	2010 2010	『新编日语教程3(第三版)』 『新编日语教程4(第三版)』	『新编日语教程3(第三版)』 『新编日语教程4(第三版)』	華東理工大学出版社 華東理工大学出版社	2021 2021
	『初級日本語新装改訂版上』 『初級日本語新装改訂版下』	凡人社 凡人社	2010 2010	『実用日语上中级上』 『実用日语上中级下』	『中日交流标准日本语上中级上(第二版)』 『中日交流标准日本语上中级下(第二版)』	北京大学出版社 北京大学出版社	2012 2012
	『日本語5つのとびら初級1』 『日本語5つのとびら初級2』	凡人社 凡人社	2009 2010	『新编日语教程5(第三版)』 『新编日语教程6(第三版)』	『新编日语教程5(第三版)』 『新编日语教程6(第三版)』	華東理工大学出版社 華東理工大学出版社	2021 2021
	『まるごと日本のことばと文化中級1』 『まるごと日本のことばと文化中級2』	三修社 三修社	2016 2017	『实用日语上高级』 『实用日语上高级』	『中日交流标准日本语上高级上(第二版)』 『中日交流标准日本语上高级下(第二版)』	北京大学出版社 北京大学出版社	2013 2013
中級	『できる日本語中級本冊』(2012)アルク	アルク	2012	『新编日语教程7(第三版)』 『新编日语教程8(第三版)』	『新编日语教程7(第三版)』 『新编日语教程8(第三版)』	華東理工大学出版社 華東理工大学出版社	2021 2021
	『学ぼう!にほんご中級』(2007)専門教育出版社	専門教育出版社	2007	『東京大学出版社』	『東京大学出版社』	北京大学出版社	2013
	『テーマ別中級から学ぶ日本語〈三訂版〉』 『中級日本語教科書わたしの見つけた日本』	研究社 研究社	2014 2013	『凡人社』 『凡人社』	『凡人社』 『凡人社』	北京大学出版社	2013 2013
	『中級日本語新装改訂版上』 『中級日本語新装改訂版下』	東京大学出版社	2015 2015	『中日交流标准日本语上高级上(第二版)』 『中日交流标准日本语上高级下(第二版)』	『中日交流标准日本语上高级上(第二版)』 『中日交流标准日本语上高级下(第二版)』	中国教育出版社 中国教育出版社	2018 2018
	『日本語5つのとびら中級』 『テーマ別上級で学ぶ日本語改訂版』	凡人社 研究社	2008 2010	『新编日语教程5(第三版)』 『新编日语教程6(第三版)』	『新编日语教程5(第三版)』 『新编日语教程6(第三版)』	華東理工大学出版社 華東理工大学出版社	2019 2019
上級	『学ぼう!にほんご上級』 『上級日本語』	専門教育出版社 研究社	2010 2010	『スリーエーネットワーク 表へ改訂版』	『新经典日本语高级教程第一册(第二版)』 『新经典日本语高级教程第二册(第二版)』	外语教学与研究出版社 外语教学与研究出版社	2019 2019
	『トピックによる日本語総合演習テーマ探しから発表』 『日本をたどりなおす29の方法』	スリーエーネットワーク 東京外国语大学出版社	2010 2016	『日本をたどりなおす29の方法』	『日本をたどりなおす29の方法』	外语教学与研究出版社 外语教学与研究出版社	2019 2019

Quantitative Analysis of Japanese Language Textbooks based on different levels: A Comparative Perspective between Japan and China

LIU, Jingyi

Abstract

This study aims to identify the differences between Japanese language textbooks published in Japan and China through quantitative analysis methods. By doing so, it seeks to explore the current state of Japanese language education and the characteristics of textbook compilation in both countries, thereby providing data-driven suggestions for future textbook development. Specifically, the study focuses on (1) linguistic elements, (2) topic distribution, and (3) language indicators related to level classification in the main text of Japanese language textbooks at each level (beginner, intermediate, and advanced). The findings reveal significant differences between Japanese and Chinese textbooks at each level, particularly in linguistic features, where the gap is widest at the intermediate level, narrowest at the advanced level, and moderate at the beginner level. Additionally, notable disparities were observed in the topic distribution and level classification criteria of the textbooks. Clarifying these differences can strengthen the strengths and address the weaknesses in future teaching material compilation. Furthermore, the results of the quantitative analysis can guide a more scientific approach to textbook development.

Keywords : Level-specific, Japanese language textbooks, linguistic features, Japan-China comparison, quantitative analysis

「調味料の添加」を表す動詞についての日中対照研究

王 淋萱（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿は、日本語と中国語では「調味料の添加」という手順を説明するためにどのような動詞が用いられるかを明らかにするものである。

具体的には、まず日本と中国での代表的な調味料を調査対象として選定し、日本語と中国語のコーパスを利用してこれらの調味料とのコロケーションの強度が高い動詞を収集した。次に、収集した動詞のうち、「調味料に働きかけて食材や容器へ移動させる」ことを意味する動詞を本稿の研究対象「調味動詞」として抽出した。その結果、日本語動詞「入れる」「振る」「絡める」など計27語、中国語動詞“撒”“淋”“拌”など計20語を一般的に使用される調味動詞であると認定した。さらに、対象語として取りやすい調味料で抽出した調味動詞を分類した上で、フレーム意味論の視点から、ある調味料を対象語として取りやすいかどうかということは、調味動詞と該当する調味料のフレーム要素の整合・不整合によって説明できることを論じた。

キーワード： 調味動詞、現代日本語書き言葉均衡コーパス、コロケーション、日中対照

はじめに

料理本などのレシピで「調味料の添加」が説明される際、日本語では「(醤油を)入れる」「(砂糖を)付ける」など、中国語では“撒(盐)”“蘸(酱油)”などの動詞がよく使われる。加熱調理場面における動詞日本語と中国語のうち、「炒める」「煮る」「炸」「蒸」のような調理用語は従来から研究されてきたが(玉村1980、太田1984、孫1992、孫1993、孫1994)、味の調整も調理プロセスの一環であるにも関わらず、「調味料の添加」を表す動詞に触れる研究は数少なく(野中2017)、どのような語が存在するのか、そしてそれらの語の文法・意味の特徴などの諸問題は解明されているとは言えない。従って、本研究はまず日中コーパスを利用し、コロケーション強度の計算により、日本語と中国語で「調味料の添加¹⁾」という手順を説明するためにどのような動詞が用いられるのかを明らかにする。また、フレーム意味論の視点から、調味動詞と調味料それぞれの組み合わせの容認度の差(コロケーションの強度の差)の解釈を試みる。「料理を作る」ことは非常に日常的な活動であるため、中国人日本語学習者や日本人中国語学習者が料理やレシピについてコミュニケーション

ーションする機会は多いことが想定され²⁾、日本語と中国語の動詞ないし調理表現を記述することは、動詞の日中対照研究という言語学的な観点からだけでなく、言語教育の観点からも意義があると考える。

1. 先行研究

1.1 調理・調味動詞について

日本語の調理動詞について、太田（1984）は分類語彙表・調理学用語辞典・調理学教科書を調査し、調理操作を表す動詞を収集した。また、先行研究の加熱調理動詞に関する分類を踏まえ、さらに非加熱的な調理操作も取り扱い、次の図1の示すように調理用語の分類リストを提案した。

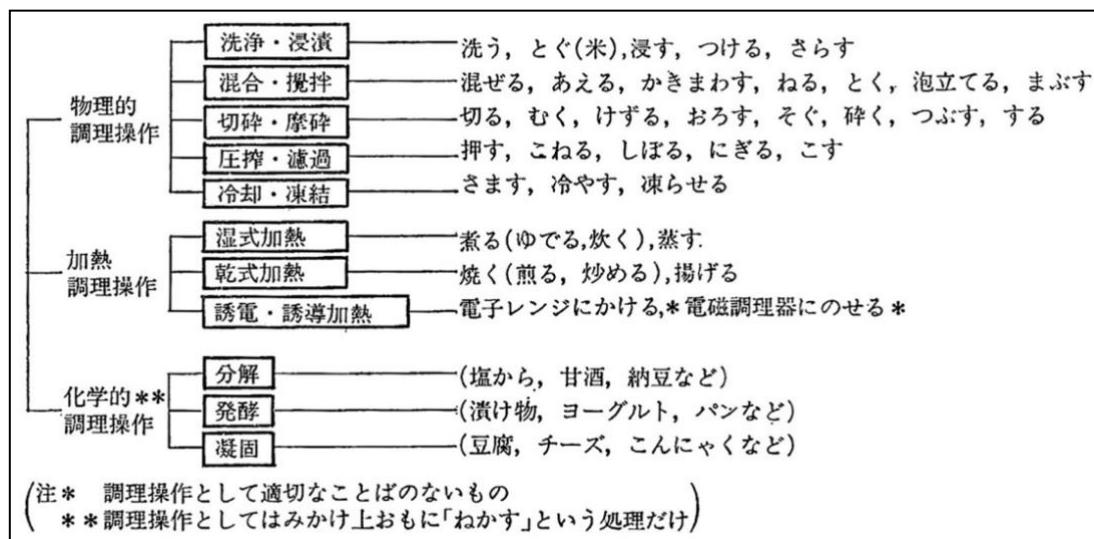


図1 調理用語の分類（太田 1984 : 218）

調理動詞の日中対照について、孫（1992、1993、1994）は焼き物ライン・揚げ物ライン・煮物ラインという順で中国語と日本語の調理動詞の意味特徴を分析し、意味の対応を考察した。例えば、焼き物ラインの場合、中国語の動詞では“烧”“烙”“煨”的ように、加熱手段による使い分けが観察され、日本語の動詞では「焼る」「焼く」のように、火の強さによる使い分けが観察されている³⁾。

しかし、これらの研究においての「調理動詞」には、調味料の添加を表す動詞が含まれていない（そもそも「調味」というプロセスも「調理操作」として扱われていない）。調味料の添加を表す動詞（以下、調味動詞）を一つのグループとして扱う研究としては、日本語では野中（2017）⁴⁾のみ、中国語では管見の限りない。

野中（2017）は「日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、「塩」「胡椒」とコロケーションの強度が高い動詞を抽出し、日本語の調味動詞とした。それから、「調味料をかける行為は、対象物に働きかけてどこかへ移動させるという使役移動事象の一種である」

(p. 178) という使役移動構文の観点から、収集した調味動詞を移動物と着点の格によって次の表1のように分類し、英語の調味動詞の構文特徴との対照分析を行った。

表1 〈塩/胡椒〉と動詞、構文（野中 2017: 190）

動詞	<塩/胡椒>	着点	例
加える／振る／入れる／振りかける／…	ヲ格で表現する	ニ格で表現する	鍋に塩・こしょうを加える 肉に塩・こしょうを振る
味をつける／下味をつける／味を調える／味付けする／調味する／…	デ格で表現する	表現しないかハを用いることが多いが、動詞によってはニ格、ヲ格で表現することもある	肉は塩・こしょうで味を調える 肉を塩・こしょうで味つけする
塩こしょうする	サ変動詞として表現する	ニ格で表現することが多いがヲ格の例もある	肉に塩こしょうする

しかし、「塩」と「胡椒」の形状や物理的性質は類似している。従って、「塩」と「胡椒」とは異なる形状・物理的性質を有する調味料を対象とした場合には異なる動詞が使われる可能性がある。そのため、本稿は考察範囲を広げて日本語と中国語の調味動詞をより包括的に収集し、日中調味動詞の特徴を明らかにしたい。

1.2 理論的背景

本研究はフレーム意味論の観点から抽出した調味動詞の考察を行う。フレーム意味論の論考では、概念（文や単語の意味）は絶対的・独立的で記憶されるのではなく、使用される文脈、関連する経験や習慣などの背景状況とともに記憶される。例えば、「直径」の概念を理解する際に、直径にあたる「線」そのものだけでなく、「円」「円周」「円の中心」という背景も一緒に認識しなければならない。意味フレームとは、語の意味を理解するのにこれらが必要な背景状況を含む図式化された知識構造で (Fillmore, 1982)、その中には、「直径の線」のようなプロファイルされた中心的要素（概念）と「円」「円周」「円の中心」のような周辺的要素（背景状況である知識や情報）が含まれている (Fillmore & Baker, 2010)。また「直径」に言及する際、「円」「円周」「円の中心」も一緒に想起されるように、実際の使用で概念が背景状況と関連づけられて形成されるため、概念が使われるとき、その背景にある状況も自然に一緒に喚起される。

本研究が行ったコーパス調査の結果から、調味動詞と調味料それぞれの組み合わせには容認度の差が観察される。例えば「味噌を振る」のように、これらの容認度の低い組み合わせは味を調整するための動作としては考えにくいが、作例(1)のような実際の言語使用においては非文もしくは不自然な文であるとも断言できないことから、この現象に関わる要

因は文法規則や語の国語辞典に記述されるような意味自体がないことが推測できる。従つて、フレームの視点から動詞と調味料それぞれの背景知識、つまりフレーム要素の考察が必要である。

(1) 母さんは手に持っている味噌を振りながら、「見て、自分で作ったの」と私に見せた。

2. 調味動詞の抽出

2.1 調査対象とする調味料の選定

調味動詞の抽出にあたり、まずコーパスを利用し、調味料と共に起する動詞を抽出してコレクションの強いものを収集し、次にその中から「調味料の添加」を表すものを手作業で抽出する。しかし、日本も中国も日常的に使用される調味料の種類が数多く、本研究ではその全てを調査することができない。一般的に使用される調味料と共に起する調味動詞は、一般的に使用される調味動詞であろう。従つて、両国において一般的な調味料を選定し、調査対象とする。

2.1.1 日本の調味料

日本の代表的な調味料を選定するにあたり、マイボイスコム株式会社が行った『調味料に関するアンケート調査』シリーズの調査結果を参考にした。『調味料に関するアンケート調査』シリーズはウェブサイト「MyVoice」のアンケートモニターを対象としたインターネット調査であり、2013年～2022年の10年間にわたって計4回実施され、4回の調査とも回答者数が10,000名を超えており、アンケートの内容は家庭料理に関する調味料に関する質問（計7～9問）であり、そのうち、「自宅にある調味料の種類」と「よく使用する調味」という二つの設問の回答結果において、毎回の調査結果において回答者数が最も多い上位五つの調味料は「塩」「胡椒」「砂糖」「醤油」「味噌」である（その順位が前後することはある）ことから、この五つの調味料が日本で最もよく使用されている、つまり最も一般的な調味料であると認定した。

調味料を添加する際の人間の動きは、調味料の特徴によって異なることも考えられ、「塩」「胡椒」「砂糖」「醤油」「味噌」の五つの調味料は風味や料理における役割などの面において独自の特徴も持っている。特に、「味噌」は日本ならではの調味料であり、仮に日本語には日本でしか見られない調味料の使い方を表現する動詞が存在しているのなら、それが「味噌」のような伝統的かつ特有な調味料と共に起する可能性が高い。さらに、一般的に使われる調味料には物質としての状態からみれば固形（粉末）、液体、粘液の三つのタイプがあり、調査対象とした「塩」「胡椒」「砂糖」「醤油」「味噌」は、この三つのタイプをすべて満たしている。従つて、これらの五つの調味料を対象にして調査を行うことで、日本語の代表的な調味動詞を収集できるのではないかと考える。

2.1.2 中国の調味料

中国の調味料において、日本においてマイボイスコム株式会社が行った『調味料に関するアンケート調査』シリーズのような信頼度の高い社会調査は管見の限りない。そのため、中国の調理教科書《調料使用大全》に記載されている全ての調味料を収集し、“BCC 現代汉语語料庫”（以下、「BCC コーパス」）の“多領域”ジャンル⁵⁾でそれぞれの出現頻度を確認した。頻度が上位のものを次の表 2 に示す。

表 2 「BCC コーパス」での調味料の出現頻度

順位	調味料	頻度	順位	調味料	頻度
1	盐	73076	9	料酒	1507
2	酱油	11833	10	鸡精	1224
3	冰糖	3568	11	番茄酱	1073
4	白糖	3500	12	胡椒粉	958
5	胡椒	3050	13	生抽	815
6	味精	2894	14	老抽	595
7	红糖	2442	15	辣椒酱	558
8	芥末	1877

表 2 からわかるように、“冰糖（氷砂糖）”を除き⁶⁾、前節で日本語の調査対象として選定した調味料と共に通する“盐（塩）”“酱油”“白糖（白砂糖）”⁷⁾“胡椒”の四つの調味料は「BCC コーパス」でも出現頻度が調味料類のうちの最も上位にある。一般的に使われているため、最もよく言及されると考えてよいであろう。従って、この四つの調味料が中国でよく使用されている調味料であると認定し、固形（粉末）と液体の調味料の共起動詞を抽出するための調査対象とした。粘状の調味料の共起動詞の場合、粘状調味料のうち頻度が最も高い“番茄酱（ケチャップ）”を調査対象にした。ただし、“番茄酱”は中国の伝統的な調味料ではないので、中国語でしか見られない調味料の使い方を表現する動詞を調査するために、中国料理での独特性と代表性を持つ調味料“辣椒酱（唐辛子ソース）”と“豆瓣酱（豆板醤）”の使用例も合わせて収集して観察する⁸⁾。

2.2 調味動詞の抽出手順及び抽出結果

2.2.1 日本語の調味動詞の抽出

日本語の場合、野中（2017）を参考にし、まず「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」の検索アプリケーション「中納言」を用い、「短単位検索」で調味料の前方 6 文字以内に共起する全ての動詞を収集した。

野中（2017）は共起頻度がそれぞれ第 15 位までの動詞を選び出してダイス係数、T スコアと MI スコアの三つの係数を計算してコロケーションの強度を測っている。頻度の低い特

殊な結びつきをしているコロケーションが存在する可能性も考えられるため、本研究はより網羅的に抽出したい。Hunston (2002) は、共起頻度 10 以上、コロケーションを構成する個々の語の頻度が 100 以上、T スコアが 2.0 以上であり、MI スコアが 3.0 以上であることがコロケーションとしての基準であるとしている (p. 71)。従って、「塩」「砂糖」「醤油」「味噌」の四つの調味料については、共起頻度が 10 以上の動詞全てを対象としてコロケーションの強度を考察した。「胡椒」の場合、共起頻度が 10 以下のものが全体の 87% を占めており、共起する動詞は共起頻度が低いという特徴がある。そのため、頻度が第 30 位までの動詞のコロケーションの強度を計算し、数値の高い順で収集した語をリスト化した。三つの係数の数値いずれかが上位 20 位に入っていると、対応する動詞は調味料と特に結びつきの強い語であると考えられる。例として調味料「砂糖」と共起する動詞のリストを次の表 3 に示す。

表3 「砂糖」と共起する動詞の三つの係数

順位	語彙素	ダイス係数	語彙素	T スコア	語彙素	MI スコア
1	交ぜる	0.0186	入れる	16.0216	塗す	11.0403
2	加える	0.0181	加える	12.6930	混ぜ合わせる	9.4255
3	塗す	0.0170	為る	9.3531	溶ける	9.3703
4	溶ける	0.0145	交ぜる	7.8607	交ぜる	9.2046
5	煮る	0.0139	使う	7.2062	煮る	9.1551
6	入れる	0.0125	作る	6.3706	溶かす	9.1157
7	振るう	0.0090	掛ける	6.2128	振るう	8.7036
8	溶かす	0.0081	煮る	6.0721	加える	8.5078
9	混ぜ合わせる	0.0081	溶ける	5.9909	入れる	7.8075
10	温める	0.0048	入る	5.7730	温める	7.7632
11	控える	0.0037	塗す	5.5651	控える	7.1749
12	振る	0.0027	食べる	5.3908	焼く	5.9794
13	焼く	0.0025	飲む	4.8762	振る	5.9602
14	飲む	0.0021	取る	4.7353	飲む	5.3359
15	掛ける	0.0019	振るう	4.6792	掛ける	5.0721
16	食べる	0.0017	溶かす	4.1157	食べる	4.9753
17	使う	0.0016	居る	4.1139	含む	4.8918
18	含む	0.0015	混ぜ合わせる	3.9942	使う	4.7552
19	作る	0.0014	含む	3.9842	作る	4.6583
20	入る	0.0011	振る	3.8108	合わせる	4.4582

ただし、上記の表 3 にある全ての語が調味料の添加を表す調味動詞とは限らない。本研究における調味動詞は、料理の味を調整するために調味料（移動物）に働きかけて食材や容器（着点）へ移動させることを表す動詞であると定義する⁹⁾。コーパスの使用例を参照しながらコロケーションの意味を考察し、除外した動詞を表 4 に示す。

表4 共起動詞のうち「調味動詞」ではないと判定したもの

除外の基準	動詞の分類	対象外とした語 (「砂糖」の場合)
A. 独立している動詞ではない	文法的な機能を果たすもの（補助動詞） 例：梅から水分が出たり、 <u>砂糖を入れたり</u> しているから、梅酒自体の比重が高まっただけ。（『日本《島旅》紀行』2005）	「為る」「居る」
B. 動作の対象は調味料ではない	調味料でなく「料理」全体を対象とするもの 例： <u>パンケーキにレモン汁をかけ、砂糖を振りかけて食べる</u> のが、イギリス流の食べ方だそうです。（『Yahoo!ブログ』2008）	「飲む」「食べる」「作る」
C. 動作の目的「味調整」ではない	調理場面ではない動作を意味するもの 例：チャールズはメリーが握りしめていた砂糖の包み紙をとり、彼女の手を口元に持ちあげて指先にキスをした。（『仕組まれた再会』2002）	「取る」「含む」「取る（摂る）」
D. 「調味料の移動」を含まない	a. 調味料の移動に関係がないもの 例：かぼちゃの裏ごしを1ホールにつき約二百g使用し、 <u>砂糖とバターを控えて、</u> かぼちゃ本来の甘みを出している。（『ベーカリーパティスリーブック』2005）	「控える」「使う」
	b. 調味料の移動後の状態意味するもの（自動詞） 例：じやこを炊くとき、すでに酒やみりん、 <u>醤油、砂糖が入っていて、</u> しっかり味がついています。（『旬の味、だしの味』2004）	「入る」「溶ける」
	c. 移動の後の加熱調理プロセスを意味するもの 例：水・醤油・酒・みりん・砂糖を平鍋に <u>温め、</u> 沸騰したら、鯛とごぼうを並べ入れます。（Yahoo!知恵袋 2005）	「煮る」「温める」「焼く」

以上の語を取り除き、残った動詞が本研究で扱う日本語の調味動詞である。「砂糖」の場合、「交ぜる」「加える」「塗す」「入れる」「振るう」「溶かす」「混ぜ合わせる」「振る」「掛ける」「合わせる」の10語が「砂糖」とのコロケーションの強度が高い調味動詞として抽出された。残りの「塩」「胡椒」「醤油」「味噌」も同じ手順で作業を行い、調味動詞を抽出した。抽出された語を次の表5に示す。表5では、調味動詞と該当する調味料のコロケーションの強度が高いと判定された場合は「○」で表示し、そうでない場合は「×」と塗りつぶしで表示している。

結果として、「和える」「合わせる」「入れる」「置く」「落とす」「加える」「掛ける」「絡める」「刷り込む」「擦り下ろす」「為る」「垂らす」「付ける」「浸ける」「溶かす」「溶き入れる」「塗る」「乗せる」「挽く」「振り掛ける」「振る」「振るう」「交ぜる」「混ぜ合わせる」「塗す」「揉む」「回し掛ける」（五十音順）計27語を日本語の調味動詞として認定した。

ここで注意したいのは、上記の語はそれぞれ調理・調味以外の多くの場面でもよく使用されるものであり、「サイコロを振る/ルビを振る/塩を振る」「スポンジを揉む/氣を揉む/こ

んにやくを塩で揉む」の示すように、多義的でありながら、共起語（「塩」などの調味料）や使用場面（調理・調味場面）により規定された「調味料の添加」という具体的な動作を表現できるという共通点を持つことによって同じ「調味動詞」グループとして認定される点である。次の中国語動詞の場合も同様である。

表5 日本語の調味動詞（動詞別）

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
動詞	交ぜる	加える	入れる	掛ける	付ける	振る	塗る	混ぜ合わせる	擦り下ろす
塩	○	○	○	○	○	○	○	○	×
胡椒	○	○	○	○	○	○	○	○	○
醤油	○	○	○	○	○	○	×	○	×
砂糖	○	○	○	○	×	○	○	○	×
味噌	○	○	○	○	○	×	×	×	×
番号	10	11	12	13	14	15	16	17	18
動詞	浸ける	溶かす	乗せる	和える	揉む	為る	置く	合わせる	振り掛ける
塩	○	○	×	×	○	○	○	×	○
胡椒	×	×	○	○	×	○	○	×	○
醤油	○	×	×	○	×	×	×	○	×
砂糖	×	○	×	×	×	×	×	○	×
味噌	×	×	×	○	×	×	×	○	×
番号	19	20	21	22	23	24	25	26	27
動詞	刷り込む	絡める	落とす	振るう	垂らす	挽く	塗る	回し掛ける	溶き入れる
塩	○	×	×	×	×	×	×	×	×
胡椒	○	×	×	×	×	○	×	×	×
醤油	×	○	○	×	○	×	×	○	×
砂糖	×	×	×	○	×	×	×	×	×
味噌	×	×	×	×	×	×	○	×	○

2.2.2 中国語の調味動詞の抽出

中国語の調味動詞を抽出するためには、まず前節で述べた日本語調味動詞の抽出手順と同じく、「BCC コーパス」の“多領域”ジャンルを利用して、調味料の前方 6 文字以内に共起する動詞を抽出してコロケーションの強度で調味動詞の認定を行った。

しかし、“盐”と“酱油”は農業・工業などの場面での使用例の割合が大きく、“白糖”“胡椒”と“番茄酱”はコーパスにおいて出現頻度が全体的に少ない。そのため、計算の結果から、一般的に使用されていると考えられる調味動詞がコロケーション強度の上位 20 位から外れていることが観察される。つまり、日本語調味動詞の場合と同じ手順では、“盐”

“酱油”“番茄酱”と強く共起する中国語調味動詞を網羅的に抽出することはできない。従って、コロケーション強度が上位 20 位ではない動詞についてもウェブ調査¹⁰⁾を行い、検索エンジン Google で用例数が 30 例以上観察されたものを一般的に使われている調味動詞として認め、調味動詞のリストに補充した。

また、3.1.2 節で述べたように、粘性の調味料と強く共起する中国語動詞をより網羅的に抽出するために、“番茄酱”的ほかに、BCC コーパスで“辣椒酱”と“豆瓣酱”的共起動詞も収集した。これらの語のうち、“番茄酱”的抽出結果にない動詞についてもウェブ調査を行い¹¹⁾、Google で用例数が 30 例以上観察されたものを調味動詞のリストに補充した。この手順によって抽出された調味動詞¹²⁾を次の表 6 に示す。

表 6 中國語の調味動詞の抽出手順

調味料		コロケーションの強度による抽出	ウェブ調査による抽出
盐		撒、放、加、调入	拌、抹、洒、下
酱油		拌、倒、放、加、调入、蘸、沾	滴、淋
胡椒		放、加、撒、酒	
白糖		拌、掺、倒入、放、加、沾、撒、涂、调入、蘸	裹
酱类 调料 ¹³⁾	番茄酱	倒入、放、浇上、沾、加、蘸	挤、淋、抹、涂
	辣椒酱		裹、夹
	豆瓣酱		拌、下

上の手順により、今回の調査で抽出された中国語の調味動詞計 20 語を表 7 に示す。

表 7 中國語の調味動詞（動詞別）

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
動詞	放	加	拌	撒	调入	蘸	沾	洒	抹	下
盐	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
酱油	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
胡椒	○	○	×	○	×	×	×	○	×	×
白糖	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
酱类调料	○	○	○	×	×	○	○	×	○	○
番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
動詞	淋	裹	涂	倒入	滴	倒	掺	挤	夹	浇上
盐	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
酱油	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×
胡椒	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
白糖	×	○	○	○	×	×	○	×	×	×
酱类调料	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○

上の表 5 と表 7 から日本語と中国語において、同じ調味料と強く共起する調味動詞は全てが同義で一対一の対応関係にあるものではないことが観察される。例えば塩と強く共起する日本語動詞「刷り込む」には対応する中国語調味動詞が見つからなかった。“盐”と強く共起することにより、「刷り込む」と意味が最も近いと判断される中国語動詞“涂”は次の表 8 に示すような意味の違いがあると考えられる。

表 8 「刷り込む」と“涂”“抹”的意味の違い

動詞	移動の起点	手段	移動後の状態
「刷り込む」	対象物の表面	擦る、すりつぶす	染み込ませる。対象物の表面と内部へ拡散していく
“涂”	対象物の表面	塗る、擦る	対象物の表面で拡散していく

このような調味動詞の意味についての日中対照、及び実際の使用における対訳可能性についての検討は今後の課題としたい。

3. 調味動詞と調味料のコロケーション

3.1 コロケーション強度による調味動詞の分類

2 節では、代表的な調味料を調査対象として、日本語と中国語でこれらの調味料と強く共起する調味動詞を抽出した。しかし、すべての調味動詞が五つ全ての調味料のいずれとも強く共起するわけではなく、異なる調味料それが異なる調味動詞と強く共起するわけでもない。調味動詞は強く共起する調味料の違いによって次の表 9 と表 10 に示すように分類することができる。

表 9 日本語の調味動詞（調味料別）

分類	動詞	
五つ全ての調味料と強く共起する動詞		交ぜる、加える、入れる、掛ける
四つの調味料と強く共起する動詞	×砂糖	付ける
	×味噌	振る、混ぜ合わせる
三つの調味料と強く共起する動詞	×塩・胡椒	合わせる
	×胡椒・醤油	和える
	×醤油・味噌	塗す
二つの調味料と強く共起する動詞	○塩・砂糖	溶かす
	○塩・胡椒	振りかける、刷り込む
	○塩・醤油	浸ける
	○塩・胡椒	置く、為る
一つの調味料のみと強く共起する動詞	○塩	揉む
	○胡椒	擦り下ろす、挽く、乗せる
	○味噌	溶き入れる、塗る
	○醤油	垂らす、回し掛ける、絡める、落とす
	○砂糖	振るう

表 10 中国語の調味動詞（調味料別）

分類	動詞	
五つ全ての調味料と強く共起する動詞	放、加	
四つの調味料と強く共起する動詞	×胡椒	拌
三つの調味料と強く共起する動詞	×盐・胡椒	蘸、沾
	×酱油・酱类调料	撒
	×胡椒・酱类调料	调入
二つの調味料と強く共起する動詞	○盐・胡椒	洒
	○盐・酱类调料	抹、下
	○酱油・酱类调料	淋
	○白糖・酱类调料	裹、涂、倒入
一つの調味料のみと強く共起する動詞	○酱油	滴、倒（倒入）
	○白糖	掺
	○酱类调料	挤、夹、浇上

ある調味料と強く共起することは、つまり実際の使用でその調味料を対象語として取りやすいということである。言い換えると、表 9 と表 10 から、それぞれの調味動詞は、対象語として取りやすい調味料には違いがあることが明らかになった。

3.2 コロケーション強度の違いの要因

以下では、フレーム意味論の視点からそれぞれの調味動詞の対象語として取りやすい調味料の違いに影響を与える要因について述べる。

上記の表 9 で示すように、調味動詞「振る」は「味噌」のみと共にしにくくという著しい特徴を示している。

調味料「味噌」が喚起する意味フレームでは、中心的要素として味噌の定義、周辺的な要素として味噌の原材料と製法、味噌の色・味・物理的性質、味噌の役割などが存在すると考えられる¹⁴⁾。また、調味場面での動詞「振る」が喚起する意味フレーム¹⁵⁾には中心的要素として調味料を添加する際の特定の人間の振る舞い、周辺的要素として調味場面に限定された参与者の料理人、調味料及び食材、さらに移動物である調味料の使役移動事象などの存在が考えられる¹⁶⁾。

「振る」と「味噌」の意味フレームを次の表 11 に示す。表 11 の両者の間に塗りつぶしで表示される部分においてフレーム要素の不整合が観察される。つまり、「振る」の具体的な手段と「味噌」の物理的性質が矛盾しており、一般的に言うと、「上下・左右・前後に何度も往復させるように手を動かす」という手段では、「密度の高い粘状のもの」の一部を「プラスチックケースの容器」から出すことはほぼ不可能である。このフレーム要素の不整合によって「味噌」を使った調味プロセスにおいて「振る」が意味する動作の使用頻度が低く、言語表現から見れば動詞「振る」と名詞「味噌」が共起しにくうことになる。

表 11 「振る」と「味噌」のフレーム要素の不整合

日本料理の調味料「味噌」の意味フレーム	調味場面での動詞「振る」の意味フレーム
<p>中心的要素： 蒸した大豆に食塩と麹こうじを加え、大豆タンパク質を分解させて作った発酵調味料。</p>	<p>中心事象： 手を動かして握った調味料を食材に投げる。</p>
<p>周辺的要素： <u>材料</u>：大豆、食塩、麹こうじ <u>製法</u>：「米味噌」「麦味噌」「豆味噌」 <u>様態</u>： 色：茶色のうち、「赤」「淡色」「白」の三つに種類が分けられる。 味：塩味、甘味、旨味、酸味、苦味、渋味など。 物理的性質：密度の高い粘状のもの。 <u>役割</u>：臭みをとり、旨味や風味を増すなど。 <u>属性</u>： 調味料：日本の伝統的調味料。伝統料理への応用が多い。 商品：スーパーなどでプラスチックケースの容器で販売されることが多い。 ...¹⁷⁾ </p>	<p>参与者： <u>動作主</u>：調理をする人間 <u>移動物</u>：容器に入っている調味料 <u>着点（調味対象）</u>：食材の表面・食材を入れる容器の内部</p> <p>関連事象： <u>目的</u>：調味料を（容器から出して）食材に接触させる。 <u>手段</u>：調味料または調味料の入った容器を持って上下・左右・前後に何度も往復させるように手を動かす <u>調味料の移動の起点</u>：食材より一定の距離が想定される <u>調味料の移動経路</u>：下への経路 ...</p>

また、前掲の表 10 が示すように、中国語の場合は、動詞“拌（かき混ぜる）”は“胡椒”のみと共に起しにくいという著しい特徴を示している。動詞“拌”と“胡椒”的フレームは次の表 12 のように示すことができる。

表 12 “拌”と“胡椒”的フレーム要素の不整合

中国料理の調味料“胡椒”的意味フレーム	調味場面での動詞“拌”的意味フレーム
<p>中心的要素： コショウ科コショウ属のつる性植物の果実を乾燥加工して製造される調味料</p>	<p>中心事象： 調味料を食材に加えて混合させる</p>
<p>周辺的要素： <u>材料</u>：コショウの果実 <u>製法</u>：「黒胡椒」「白胡椒」「青胡椒」「赤胡椒」 <u>様態</u>： 色：黒、白、青、赤 味：刺激的な辛み、刺激的な木の香り 物理的性質：固体（粒または粉末） <u>役割</u>：香辛料として肉や魚の臭みを抑える <u>属性</u>： 調味料：伝統料理では基本的に下味をつけるために使われるが、現代料理では仕上げの時にも使われるようになっている。 商品：スーパーなどで瓶やボトルなどの容器で販売されることが多い ... </p>	<p>参与者： <u>動作主</u>：調理をする人間 <u>移動物</u>：ある程度の量を持つ調味料 <u>着点（調味対象）</u>：ある程度の量を持つ、細かく分割できるような食材</p> <p>関連事象： <u>手段</u>：調味料を容器に加え、箸や混ぜる棒などの道具を食材と調味料の混合物に入れてぐるぐる回す。 <u>目的（移動後の状態）</u>：調味料を食材と空間上均一に混合する。 ...</p>

表 12 からわかるように、「拌」の意味フレームには、調味料の移動後の状態として「食材と空間上均一に混合する」ことが要求される。そのため、移動物である調味料には食材と均一に混合できるように、ある程度の量の使用が必要である。それに対して「胡椒」の意味フレームには、胡椒の「味」が「刺激的な辛み、刺激的な木の香り」が、中国料理では「香辛料として肉や魚の臭みを抑える」ために使用されるのが一般的であることが含まれている。そのため、刺激的な味と香りを持つ「胡椒」をあえて、ある程度の量を食材と混ぜ合わせると出来上がった料理の味がおかしくなりやすく、上述したいくつかの周辺的要素（表 11 で塗りつぶしで表示されている部分）が不整合であると言える。従って、実際の中国料理の使用では調味料「胡椒」の使い方としての動詞「拌」は、言語表現から見れば名詞「胡椒」と共起しにくいことになる。

以上、取り上げた日本語と中国語の例はどれも特定の調味料のみと共に起しにくい動詞の例であるが、これを踏まえてほかのタイプの動詞も同じく意味フレームの視点で分析できることと考えられる。具体的な記述は紙幅の都合上割愛する。

おわりに

本稿は、料理の味を調整するために調味料に働きかけて食材や容器へ移動させることを表す動詞を「調味動詞」とし、日本語と中国語で一般的に使われている調味動詞を抽出した。また、強く共起する調味料、つまり対象語として取りやすい調味料によってこれらの調味動詞を分類した。その上で、フレーム意味論の視点から調味動詞それぞれが対象語として取りやすい調味料に違いがあることの原因について論じた。抽出された日本語調味動詞と中国語調味動詞の意味対応及び対訳可能性、さらに実際の使用におけるそれぞれの特徴についての検討は今後の課題としたい。

注

- 1) 例えば「揚げ物にしょうゆを付けて食べる」のように、調理のプロセスに限らず、飲食物を口に入る前に味を調整するための「調味料の添加」動作を表す動詞全てを対象とする。また、本稿が扱う「調味料」の定義は『大辞林（第四版）』による語釈「飲食物の味をととのえ、よい味にするための材料。塩・砂糖・糖・醤油・酢など。」に従う。ただし、①香味野菜（例えば、唐辛子、パセリ）②味の調整以外の目的で用いられるもの（例えば、油）③それ自身が食材でもあるもの（例えば、昆布）は対象外とする。
- 2) 國際交流基金が公開している、日本語教育のための Can-do のデータベース「みんなの Can-do サイト」で「料理」をキーワードに Can-do を検索すると、30 の Can-do が見つかる。
- 3) 紙幅の都合上、具体的な対応リスト及び揚げ物ライン・煮物ラインで見られる日中加熱調理動詞の特徴は孫（1992、1993、1994）の本論を参照されたい。
- 4) 野中（2017）は、調味動詞が従来一つのグループとして扱われるがなかつた理由を、「煮

る」などの加熱調理動詞は調理に関する行為のみを表すものであるのに対して、「塩を振る／サイコロを振る」のように調味動詞は多義語であり、「調味料の添加」という動作は複数の意味のうちの一つでしかないため、語彙意味論では同じ動詞クラスに分類されないことにあると指摘している。また、語彙意味論の観点ではなく用法基盤モデルの観点から見れば、調味動詞は共起語（つまり、「塩」などの調味料）や使用場面（つまり、加熱調理場面）に依拠した用法上の分類をなしているとも述べている。本研究もこの点において野中（2017）の見解に従う。

- 5) 「BCC コーパス」のジャンル“多領域”“文学”“报刊”“对话”“篇章检索”“古汉语”的うち、各調味料の頻度の調査結果から“多領域”が日常的な調理場面を最も多く含むと推測し、検索範囲にした。
- 6) “冰糖”的頻度は“白糖”より高いが、使用例“蒜头加冰糖巧治感冒（ニンニクに氷砂糖を入れたものは風邪の治療に効く）”のように、一部の使用例では“冰糖”は調味料というより漢方薬として使われている。また、調理場面でも同じ原材料のため使い方は“白糖”と類似している。従って、調味動詞をより網羅的に抽出することを目的とする本研究では“冰糖”を調査対象としないこととした。
- 7) 『調味料に関するアンケート調査』シリーズによれば「砂糖」が日本で最も一般的に使用される甘味料であり、この「砂糖」は白砂糖に厳密に限定されているわけではない。一方、BCC コーパスの頻度から見れば、中国では甘味料としては限定された“白糖”が最も一般的に使用されている。しかし砂糖類である限り、同じ粉状甘味料であるため、使用方法や添加する際に動作主が行う具体的動作において異なる動詞を使用するほどの違いはないと考えられる。従って、意味のずれがあっても“白糖”と「砂糖」で対応関係にある日中調味動詞を抽出できると考えられ、“白糖”は調査対象として「砂糖」に対応すると認めた。
- 8) 中国の伝統的な調味料であると考えられるものを「BCC コーパス」での使用頻度の高い順で並べるとその上位は「辣椒酱（558）、芝麻酱（343）、豆瓣酱（286）、甜面酱（138）」の順になるが、“芝麻酱（ゴマソース）”は主に中国の北の地域で使用されており、使用範囲は限定されている。そのため、“辣椒酱”と“豆瓣酱”を対象とした。
- 9) 野中（2017）では、「味を調える」のような「味」全体を対象とする動詞も調味動詞としているが、本研究は調味料に対する直接の働きかけを意味するもののみを扱う。
- 10) ウェブ調査の手順として、検索エンジン Google でキーワード「動詞調味料」（例えば“挤番茄酱”）で検索を行い、検索結果のうち該当する箇所が調味場面での調味動詞としての使用に当たるかどうかを文脈に合わせて判断した。
- 11) “辣椒酱”と“豆瓣酱”は「BCC コーパス」での頻度は“番茄酱”よりも低く、コーパスデータを利用したコロケーション強度の計算結果は信頼性が低いと考えられる。そのため、この2語の場合コロケーションの強度の計算をせず、ウェブ調査のみで動詞の使用現状を観察することにした。

- 12) 中国語では動詞単独の使用ではなく、“加入”“撒上”のような「動詞+補語」の組み合わせの使用がしばしば見られる。本稿では、一つの調味料において、動詞単独での使用も調味動詞として認定されている場合、「動詞+補語」の組み合わせが該当する調味料とのコロケーションの強度の上位 20 位以内にあっても、調味動詞の使い方の一種であるとみなし、元の動詞と異なる調味動詞として扱わない。例えば、調味料“白糖”と共に起するもののうち、“加”も“加入”も“白糖”とのコロケーションの強度の上位 20 位以内にあるが、単純動詞“加”のみを調味料“白糖”的調味動詞として扱う。
- 13) “番茄酱”“辣椒酱”“豆瓣酱”的粘性の調味料グループを中国語で“酱类调料”で表記する。
- 14) 名詞のフレーム要素を記述する際に、Pustejovsky (1995) のクオリア構造(特質構造)の項目「構成役割(what x is made of)」「形式役割(what x is)」「目的役割(function of x)」「動作主役割(how x came into being)」を参考にした。
- 15) フレーム意味論では、異なる背景状況であれば、同じ語でも異なる意味フレームを喚起する可能性があるとされている(Goldberg, 2010)。2.2.1 節で述べた「塩を振る/サイコロを振る」など、同じ動詞の調味場面と非調味場面における意味の違いがこの点に当たる。そのため、ここで記述されているのは調味場面に限定された動詞「振る」の意味フレームである。
- 16) 動詞のフレーム要素を記述する際に、陳 (2015:63) における「動詞のフレーム要素」、及び田中・松本 (1997:129) における「移動の諸要素」を参考にした。
- 17) 表 11、表 12 における「…」は、表に記述しきれない他のフレーム要素の存在を意味する。

参考文献

- Hunston, S. (2002) *Corpora in applied linguistics*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. and Colin Baker (2010) “A frames approach to semantic analysis,” In: B. Heine and H. Narrog ed., *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, Oxford: Oxford University Press, pp. 313–340.
- Fillmore, Charles J. (1977) “Topics in Lexical Semantics,” In: R. Cole ed., *Current Issues in Linguistic Theory*, Bloomington: Indiana University Press, pp. 76–138.
- Fillmore, Charles J. (1982) “Frame semantics,” In: Linguistics Society of Korea ed., *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin, pp. 111–137.
- Goldberg, Adele E. (2010) “Verbs, constructions and semantic frames,” In: M. Rappaport Hovav, E. Doron, and I. Sichel ed., *Syntax, Lexical Semantics and Event Structure*, Oxford: Oxford University Press, pp. 39–58.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 太田泰弘 (1984) 「調理のことば」『調理科学』17(4)、211–220 頁。
- 孫国震 (1992) 「中日両語の料理動詞の対応に関する一考察--焼き物ラインを中心に」『和光大学人文学部紀要』27、159–170 頁。

- 孫国震（1993）「中日両語の料理動詞の対応に関する一考察--揚げ物ラインを中心に」『和光大学人文学部紀要』28、121-133頁。
- 孫国震（1994）「中日両語の料理動詞の対応に関する一考察--煮物ラインを中心に」『和光大学人文学部紀要』29、247-264頁。
- 田中茂範・松本曜（1997）『空間と移動の表現』研究社。
- 玉村豊男（1980）『料理の四面体』鎌倉書房。
- 陳奕廷（2015）「日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズム—中国語との比較対照と合わせて—」甲第6363号、神戸大学大学院人文学研究科社会動態専攻、博士論文。
- 野中大輔（2017）「調味料をかけることを表す日本語の動詞と場所格交替—現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて」『東京大学言語学論集』38、177-195頁。
- マイボイスコム株式会社（2022）「調味料に関するアンケート調査」https://myel.myvoice.jp/products/detail.php?product_id=28205〈2024年3月15日閲覧〉
- 朱太治・双福（2011）《调料使用大全》农村读物出版社。

参考資料

- 国際交流基金日本語国際センター「みんなのCAN-DOサイト」(<https://www.jfstandard.jp/f.go.jp/cando/top/ja/render.do>)
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』(<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>)
- 北京语言大学『BCC 现代汉语语料库(BCC)』(<http://bcc.blcu.edu.cn/>)

A Contrastive Study of Verbs Expressing 'Addition of Seasoning' in Japanese and Chinese

WANG, Linxuan

Abstract

This paper aims to clarify which verbs are used to describe the procedure of "adding seasoning" in Japanese and Chinese cuisines.

Initially, representative seasonings from Japan and China were selected for investigation. Using Japanese and Chinese corpora, verbs highly collocated with these seasonings were identified. Subsequently, verbs meaning "to apply seasoning to ingredients or containers" were extracted as the study's focus, termed "seasoning verbs". The study identified 27 Japanese verbs such as "ireru", "furu", and "karameru" and 20 Chinese verbs such as "sa", "lin", and "ban" as commonly used seasoning verbs.

Furthermore, these seasoning verbs were classified based on the type of seasonings they

typically accompany. From the perspective of frame semantics, the study discusses how the selection of seasoning as a direct object correlates with the compatibility or incompatibility of frame elements between the seasoning verb and the specific seasoning involved.

Keywords : seasoning verbs, BCCWJ, collocation, Japanese/Chinese contrastive analysis

夏目漱石文学におけるニーチェ哲学の受容 —『虞美人草』を例にして—

崔 雪梅（江西農業大学）

要旨

『虞美人草』は、一九〇七年夏目漱石が東京朝日新聞に転職し、職業作家として執筆した第一作である。作品における藤尾を中心として展開する悲劇の物語の構造と女性像は、ニーチェの『悲劇の誕生』に述べたディオニュソス的なものとツアラトウストラの言説と重なる。漱石文庫蔵書の『Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None (ツアラトウストラはかく語りき)』(London:T.Fisher Unwin、一八九九)に漱石による書き込みは六七ヵ所がある。注意すべきところは、「Of Little Women Old and Young (老いた女と若い女)」における女性の本質をめぐるツアラトウストラの言説と漱石による書き込みである。これらは『虞美人草』の女性像の構築と緊密に関わっている。『悲劇の誕生』という本は漱石文庫蔵書に見られないが、小説におけるニーチェ哲学に関する言及や、筆記ノート「Art, Religion, Intellect, Moral ノ関係」の部分に記した「Drama ハ最初 Dionysus, the god of wine, ノ honour ノ為ノ religious service ナリ」というような内容から漱石がニーチェに関して熟知していることが推測できる。

本稿では、漱石が読んだ一八九九版の『ツアラトウストラ』と岩波書店より出版した一九九六版『悲劇の誕生』におけるニーチェの言説を手掛かりとしながら、『虞美人草』の女性像の構築と悲劇の構造とを具体的に明らかにし、新たな解釈を提示することを試みた。

キーワード： 虞美人草、ツアラトウストラ、悲劇の誕生、ディオニュソス的なもの

はじめに

『虞美人草』は、一九〇七年夏目漱石が東京朝日新聞に転職し、職業作家として執筆した第一作である。作品における藤尾を中心として展開する悲劇の物語の構造と女性像は、ニーチェの『悲劇の誕生』に述べたディオニュソス的なものとツアラトウストラの言説と重なる。漱石文庫蔵書の『Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None (ツアラトウストラはかく語りき)』(London:T.Fisher Unwin、一八九九)に漱石による書き込みは六七ヵ所がある。注意すべきところは、「Of Little Women Old and Young (老いた女と若い女)」における女性の本質をめぐるツアラトウストラの言説と漱石による書き込みである。

これらは『虞美人草』の女性像の構築につながる内容と考えられる。

ニーチェの哲学においてディオニュソスとツアラトゥストラは重要な存在である。前者は神話上の神で、後者は宗教上の預言者で、ニーチェの哲学にとって極めて重要な象徴的な役割を果たしている。ニーチェはこの二人についてしばしば語り、それを通じて自らの思想を表現し、一八七二年『悲劇の誕生』、一八八四年『ツアラトゥストラはかく語りき』（以下『ツアラトゥストラ』と称する）という二つの名作を発表した。漱石がニーチェの思想に触れたのは、おおよそ一九〇〇年頃のこと、イギリス留学時代と考えられる。日本国内におけるニーチェの受容もちょうどこの頃である。

本稿では、漱石が読んだ一八九九版の『ツアラトゥストラ』と岩波書店より出版した一九九六版『悲劇の誕生』におけるニーチェの言説を手掛かりとしながら、『虞美人草』の女性像の構築と悲劇の構造とを具体的に明らかにすることによって、新たな解釈を提示することを試みたい。

1. 漱石とニーチェ

随筆『点頭録』は、一九一六年一月一日から二一日まで九回にわたって『朝日新聞』に連載され、漱石の健康の悪化により中断された。「トライチケ」の部分では、イギリスにおけるニーチェブームについて触れている。（文中の傍線は筆者による。他も同じ。）

最初英吉利の雑誌にはニーチェといふ名前が頻りに見えた。ニーチェは今度の事件が起る十年も前、既に英語に翻訳されてゐる。英吉利の思想界にあって別に新らしい名前でもない。然し彼等は其名前に特別な新らしい意味を着けた。さうして彼の思想を此大戦争の影響者である如くに言ひ出した。是は誰の眼にも映る程繰り返された¹⁾。

傍線の部分から、一九〇六年頃のイギリス思想界ではニーチェの名前がすでに普遍的に知られ、その哲学も広範囲的に熟読されていることが分かる。こうした認識は、一九〇〇年から一九〇三年までイギリス滞在中の漱石がニーチェ思想の影響力を肌身で感じたことによると考えられる。欧米で注目され始めた時期とほぼ重なり、一八九〇年代中頃ニーチェの哲学が日本に紹介された。高山樗牛が一九〇一年八月雑誌『太陽』に発表した「美的生活を論ず」はいわゆる美的生活論争の引き金となり、ニーチェをめぐる二年あまり続く論争に発展した。当時、「本能」を強調する高山樗牛の「幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば、本能の満足、即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是也。人性本然の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ²⁾。」という論説は、登張竹風の解説とともに、ニーチェの個人主義思想と強固に結びつきながら理解されるようになった。

また、『哲学雑誌』『太陽』『帝国文学』『早稲田學報』など当時の主力雑誌ではニーチェ

思想をめぐる論説を発表し、『読売新聞』『中央公論』『新声』『文庫』『饒舌』などの機関紙ではニーチェを話題として、しばしば取り上げた。したがって、明治三〇年代前後日本知識人のイデオロギー構造の考察において、ニーチェ思想の日本への移入は無視しえない存在となる。

明治期におけるニーチェ哲学の解釈について、西尾幹二は『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』（白水社、一九八二）において、「明治時代のニーチェの理解には限界があった」と述べ、当時の「日本では多くの者が作品を読まずしてニーチェを論じた」と指摘する³⁾。高山樗牛のニーチェ観について、湯浅弘は「日本におけるニーチェ受容史瞥見（二）ニーチェをめぐる明治期の言説（一）一」（『川村学園女子大学研究紀要』一八巻一号、二〇〇七）という一文で、「その主張が本能の満足を人生の幸福と見る当時としては過激な個人主義の主張である」と指摘し、美的生活論争をめぐる言説に関して「一顧だにする必要のない無用の言説群」であると述べる⁴⁾。

ほぼ同じ頃、漱石は『吾輩は猫である』で、美的生活論争及びニーチェ哲学に関する見解を苦沙弥先生、迷亭君、独仙君の三者間の対話を通して言い表した。

私の考では世の中に何が尊いと云つて愛と美ほど尊いものはないと思ひます。吾々を慰藉し、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります⁵⁾。

傍線を引いた「愛と美ほど尊いものはない」という東風君のセリフは、「美的生活を論ず」の「戀愛は美的生活の最も美はしきもの一乎」という高山樗牛の言説を踏まえて表現したと考えられる。登場人物間の対話の内容が美的生活論争からニーチェの哲学へ展開したところで、漱石は独仙君の口を借りて、高山樗牛と異なるニーチェ観を言い表した。

ニーチェが超人なんか担ぎ出すのも全く此窮屈のやり所がなくつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。一寸見るとあれがあの男の理想のように見えるが、ありや理想ぢやない、不平さ。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多に寝返りも打てないから、大将少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云ふより寧ろ氣の毒になる。あの声は勇猛精進の声ぢやない、どうしても怨恨痛憤の音だ。（中略）不平だから超人杯を書物の上丈で振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。夫だから西洋の文明杯は一寸いゝやうでもつまり駄目なものさ。之に反して東洋ぢや昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ。見給へ個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなつた時、王者の民蕩々たりと云ふ句の価値を始めて發

見するから。無為にして化すと云ふ語の馬鹿に出来ない事を悟るから。

ここで綴られたニーチェの超人というのが不平の声であり、「怨恨痛憤の音」であるという考え方は、『思ひ出す事など』で『自我の主張』の裏には、首を縊つたり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶が含まれている。ニーチェは弱い男であつた。多病な人であつた。また孤独な書生であつた。そうしてザラツストラは斯くの如く叫んだのである⁶⁾。」という文脈と一貫性をもっている。

2. 『ツアラトウストラ』と『虞美人草』中の女性像

漱石文庫に蔵書した『Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None (ツアラトウストラはかく語りき)』(London:T.Fisher Unwin、一八九九)に漱石による書き込みは六七ヵ所がある。いずれも、作品を精読して書いたメモである。とくに、注意すべきところは、「Of Little Women Old and Young (老いた女と若い女)」における女性の本質をめぐるツアラトウストラの言説と漱石による書き込みである。この部分では漱石による書き込みが四ヵ所ある。ここでツアラトウストラを通して述べた女性の本質は、『虞美人草』に登場する女性たちの人物像と相通じている。

ニーチェの言説に肯定する意味を表わす書き込みが見られるこの部分では、ツアラトウストラは一人の年老いた女性に出会い、女性の本質について次のように語る。

And I assenting thus spake unto the old little woman : "Everything in woman is a riddle, and everything

in woman hath one answer : its name is child-bearing." ⁷⁾

(そこで、わたしは老婆の望みにしたがってこう語った。
女における一切は謎である。しかも女における一切は、ただ一つの答えで解ける。答えはずなわち妊娠である⁸⁾。)

上記の「Everything in woman is a riddle (女における一切は謎である)」については、漱石は書き込みをしていないが、杉田弘子が『漱石の「猫」とニーチェ』(白水社、二〇一〇)に指摘したように、漱石がニーチェの女性観に対する共感を表わし、強い興味をそそられた内容として重要な意味がある⁹⁾。「女における一切は謎である」という叙述は、『虞美人草』に登場する藤原の母の人物像に通じている。現段階では、藤尾の母という女性像が「女における一切は謎である」という言説に踏まえて創作されているかどうかは明言できないが、夏目漱石とニーチェの関係性から文学研究における解釈的アプローチの新たな可能性が与えられると考える。『虞美人草』では、次のように書かれている。

欽吾の財産を欽吾の方から無理に藤尾に譲るのを、厭々ながら受取つた顔付きに、文明の手前を繕はねばならぬ。そこで謎が解ける。呉れると云ふのを、呉れたくない意味と解いて、貰ふ料簡で貰はないと主張するのが謎の女である。六畳敷の人生観は頗る複雑である。

甲野と藤尾の母は、趣味からものの考え方へ至るまで通じるところがほとんどない親子である。甲野にとって母の自分の財産を奪いたいが、「厭々ながら受取つた顔付きに、文明の手前を繕はねばならぬ」といった行為は、謎のように理解しかねることである。「謎の女」である母は、甲野が財産をあきらめると言つても、本当にくれると信じようとしている、息子の甲野の心境を解しえない人である。

このような人物設定に基づいて、「疑へば親さへ謎である。兄弟さへ謎である。妻も子も、かく觀ずる自分さへも謎である」という甲野の思考の流れが日記の中に書き込む設定につながる¹⁰⁾。そして、謎を解くための「凡ての疑は身を捨てゝ始めて解決が出来る。只如何身を捨てるかゞ問題である」という内容は、物語のプロットが悲劇の結末へ展開していくことを暗示している。すなわち、作品の結末に描かれた藤尾の死、この死を通して「謎の女」が謎めいた行為をあきらめ、甲野に許しを請う——悲劇の構造の開示へ展開していく。このようなプロットの設定は、ニーチェの『悲劇の誕生』における悲劇的なものの構造と同工異曲である。

ニーチェは悲劇的な作品のあり方について、美学的な聴衆の経験を手掛かりにして、主人公の運命との戦い、道徳的世界秩序の勝利、悲劇による激情からの解放などを悲劇の精髓として特徴づけていると述べる¹¹⁾。同工異曲に、漱石の『虞美人草』は、甲野が「親の謎」を解くために家を捨てて出家することを決めるが、宗近に阻止され、「徳義心が欠乏した女」の藤尾が自殺するという勸善懲惡のプロットへ展開する悲劇の構造をもっている。

漱石が読んだ一八九九版『ツアラトゥストラ』の「老いた女と若い女」では、また次のような内容が書かれている。

Let man fear woman when she loveth : then she sacrificeth anything, and nothing else hath value for her.

Let man fear woman when she hateth : for in the heart of their heart, man is only evil, but woman is base¹²⁾.

(女が愛するときには、男はその女を恐れるがいい。愛するとき、女はあらゆる犠牲をささげる。そしてほかのいっさいのことは、その女にとって価値を失う。

女が憎むときは、男はその女を恐れるがいい。なぜなら、魂の底において、男は「惡意の者」であるにとどまるが、女は劣等であるのだから¹³⁾。)

漱石文庫蔵書『ツアラトゥストラ』では、漱石は上記の「女が愛するとき」と「女が憎むとき」の部分に、それぞれ「true」「true too」と書き込んでいる。『虞美人草』と併せてみれば、小野を愛する藤尾が道徳に反するにもかかわらず小野と事実上の関係を結ぶために大森へ行く設定は、ツアラトゥストラの「女が愛するとき」と通じている。また、藤尾が愛人の裏切を知り、憎しみの果てに毒を飲んでしまう設定は、ツアラトゥストラの「女が憎むとき」と通じている。ほかにも、小説の前半に漱石が藤尾の性格を強調するために書き入れたクレオパトラや清姫のような人物像にも、ニーチェの述べる女性の本質と相通じるところがある。

『ツアラトゥストラ』におけるニーチェの女性観と『虞美人草』における女性像に見られる共通性は偶然の一一致ではなく、必然の成り行きであると考える。これは、漱石が「老いた女と若い女」という部分における書き込みから確認できる。漱石は「老いた女と若い女」の「And woman must obey and find a depth for her surface. Surface is woman's mood, a foam driven to and fro over a shallow water. (まことに、女は従うことによって、おのれの表皮のほかに一つの深みを獲得せねばならぬ。女の心情は表皮であり、動きやすく、騒ぎやすい、浅い水の表である。)」という部分に、共感を得ている。この部分について、漱石は「This is oriental. Strange to find such an idea in the writings of an Europan. (これは東洋的です。ヨーロッパ人の著作にそのような考え方を見出すのは奇妙だ。)」と感想を書き込んでいる¹⁴⁾。このような認識は、藤尾運命の軌跡をクレオパトラと清姫と結び付ける創作の営みとつながる。

漱石が一九〇七年七月一六日高浜虚子宛の書簡に記した「早く女を殺して仕舞たい」「是インスピレーションの言なり」、一九〇七年七月一九日小宮豊隆宛の書簡に記した「僕は此セオリーを説明する為めに全篇をかいてゐるのである」といった語句の背後には、ニーチェの悲劇の構造にふさわしい女性像を構築する試みがうかがえる。

平岡敏夫は「『虞美人草』論—〈自我〉と〈虚構〉をめぐって—」（『日本文学』一九八六・三五の一〇）において、漱石が小野・藤尾の関係を「原則を外れた恋」「精神のない皮相な『文明』の恋」¹⁵⁾として意識的に描いたと述べるが、『虞美人草』におけるプロットの展開や人物像の設定については一つの角度から完全に捉えきれないと考える。これは創作活動と時代思潮との連動、複層的な関わりから確認すべきである。

3. 『虞美人草』と『悲劇の誕生』——悲劇の構造

悲劇の構造で書かれた『虞美人草』には、三つの悲劇の物語が仕込まれている。本章では、この三つの物語について詳しく分析しながら、『虞美人草』の構造とニーチェの『悲劇の誕生』との関連性を明らかにする。

平川祐弘が「クレオパトラと藤尾」（『夏目漱石 非西洋の苦闘』、二〇一七）で「藤尾そ

の人がクレオパトラなのである¹⁶⁾」と述べたように、小説の中では「クレオパトラ」が単に藤尾と小野の読書の対象のみならず、重なる運命を予示する機能を働く設定でもある。そこで、『虞美人草』の始まりの部分では、甲野と宗助が京都の叡山を登りながら対話をを行うシーンが描かれたのである。「女は人を馬鹿にする」という話題から展開する地の文では、「死は万事の終である。又万事の始めである」という小説の悲劇の基調を予告している。ここで言う「万事の終」とは作品の終幕に描かれた藤尾の死を意味し、「万事の始め」とは藤尾、小野、小夜子三者間の愛憎と葛藤とをめぐる悲恋の物語の開幕を暗示している。これはまた小説の最後、「悲劇はついに来た」「悲劇の偉大なるを悟る」と甲野の日記に書かれた内容と呼応している。拙論『『虞美人草』における漢詩とその役割について』(『東アジア日本学研究』八号、二〇二二・九)で述べたように、小説のプロットの展開において甲野欽吾の「日記」は全知なる存在、「預言」のような存在として表現され、物語の展開を予示し、登場人物の性格と運命とを暗示する役割を果たしている¹⁷⁾。小説の末尾につける「悲劇はついに来た」「悲劇の偉大なるを悟る」という文句は、『虞美人草』は悲劇の物語の完成を強調的に表している。

飛ヶ谷美穂子は「喜劇と悲劇と:『リチャード・フェヴァレルの試練』と『虞美人草』」(『藝文研究』五二巻、一九八八)において、両作品における情景描写の異同を分析し、『虞美人草』が「メレディスへの反響のように悲劇ということが繰り返され」、喜劇の悲劇化を試みたと述べた¹⁸⁾。しかし、ここでは飛ヶ谷美穂子がメレディスの影響を論じたものの、描写という外面性だけが論じられ、悲劇という内面的な構造が看過されている。

一九〇七年七月一六日、高浜虚子宛の書簡の末尾には「虞美人草はいやになつた。早く女を殺して仕舞たい。熱くてうるさくつて馬鹿氣てゐる。是インスピレーションの言なり¹⁹⁾」と書いてある。ここで言う「インスピレーション」の原点は、一九〇七年七月一九日、小宮豊隆宛の書簡から読み取れる。前編の書簡と同じく、漱石は藤尾という人物の設定や、創作の構想について記した。

虞美人草は毎日書いてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。うま殺せなければ助けてやる。然し助かれば猶々藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲学をつける。此哲学は一つのセオリーである。僕は此セオリーを説明する為めに全篇をかいてゐるのである。だから決してあんな女をいゝと思つちゃいけない。小夜子といふ女の方がいくら可憐だか分りやしない。——虞美人草は是で御仕舞²⁰⁾。

傍線を引いた「あいつを仕舞に殺す」は、藤尾の悲劇の運命に関する予告で、「最後に哲学をつける」は、小説の最終回に掲げる悲劇論を指している。ここで漱石の言う「此哲学

は一つのセオリー」とインスピレーションは、ニーチェの『悲劇の誕生』に論じる古代ギリシャ悲劇の精神の文脈に繋がっている。

ニーチェは自らの哲学を「悲劇哲学」であると主張し、自分自身を「最初の悲劇学者」と称している。悲劇哲学の基本概念はニーチェの処女作『悲劇の誕生』から始まる。『悲劇の誕生』は、古代ギリシアの芸術世界を対象とし、ギリシアの芸術家と自然との関係、および「自然の模倣」について解釈を行った²¹⁾。ニーチェは、ギリシア芸術では「根源的一者」が二つの相反する本能的衝動に分割され、しばしば闘争状態にあり、共存しながらも分離することを繰り返していると述べる。

すなわち、その一つは夢の形象世界であり、他は陶酔的現実であった。夢の世界の完全さは、個人の知的高さや芸術的教養とはなんの関係もない。また陶酔的現実も個人には目もくれないのであって、むしろ個体を無きものにして、神秘的な合一感によってこれを救済しようとするのである。自然のこのような芸術的状態にくらべては、どんな芸術家もみな「模倣者」だ。しかもアポロ的な夢の芸術家であるか、ディオニュソス的な陶酔の芸術家であるか、あるいは最後に——たとえばギリシア悲劇におけるように——陶酔の芸術家であると同時に夢の芸術家であるかのどちらかである²²⁾。

ニーチェの思想に一貫性ともいべきものは、ギリシア悲劇的なものとディオニュソス的なものである。そして、アポロとディオニュソスはギリシアの二大芸術神であると考え、前者は夢の形象世界を象徴し、後者は陶酔的現実を象徴していると考えている。悲劇の誕生は、このような二つの衝動が対立し、結合することによって産み出されると言う。『虞美人草』の悲劇の構造は、いわばアポロ的なものとディオニュソス的なものの衝突によって生まれたのである。

小夜子は過去の女である。小夜子の抱けるは過去の夢である。過去の女に抱かれたる過去の夢は、現実と二重の闇を隔てゝ逢ふ瀬はない。（中略）自分の世界が二つに割れて、割れた世界が各自に働き出すと苦しい矛盾が起る。多くの小説はこの矛盾を得意に描く。小夜子の世界は新橋の停車場へぶつかつた時、劈痕が入つた。あとは割れるばかりである。小説はこれから始まる。これから小説を始める人の生活ほど氣の毒なものはない²³⁾。

小夜子は結婚という夢を抱えながら東京に向かう。ところが、この夢の世界は列車が新橋の停車場へ到着するとともに滅びてしまう。それは、小夜子が東京で美貌と財産を持つ藤尾と結婚しようと目論んでいる小野の裏切りという現実と対面しなければならないためである。そこで、漱石はここで「小説はこれから始まる」と書く。つまり、すべての役者

が同じ舞台に揃い、悲劇の幕が上がるということを告げている。

漱石が『虞美人草』に仕込んだ二つ目の悲劇は、クレオパトラの悲劇である。クレオパトラ（正式名称はクレオパトラ七世）は、エジプト・プトレマイオス朝の最後のファラオで、世界三大美女の一人で有名な女性である。生涯カエサル（Caesar）、アントニウス（Antonius）というローマ帝国の二人の英雄と結婚した。しかし、アントニウスには既にローマ人の妻がいて、今で言う重婚の罪を犯した。このようなアントニウスとクレオパトラの行為に対して、ローマ人の反感をも募らせ、後の二人の悲劇に繋がっていく。酒井英行が「『虞美人草』論：小野と小夜子」（『日本文学』三二巻九号、一九八三）で述べているように、藤尾はクレオパトラのイメージで描かれている²⁴⁾。小説のクライマックスで小野が小夜子のことを「私の未来の妻」と紹介する時、藤尾の「破裂した血管の血は真白に吸収され、侮蔑の色のみが深刻に残った」表情や、「歎私的里性の笑」は、アントニウスの結婚の知らせで、恋に嫉妬して狂乱するクレオパトラのイメージと重なる。また、すべてを失い、死に向かう時の「我的女は虚栄の毒を仰いで斃れた」という設定は、クレオパトラの毒を飲んで自殺する設定と重なる²⁵⁾。

小説では、藤尾と小野との対話がクレオパトラとアントニウスから安珍・清姫の物語へ展開していく。『虞美人草』に仕込まれた三つ目の悲劇は、つまり、安珍・清姫伝説である。これは、主人公間の悲恋と情念をテーマとした、道成寺ゆかりの伝説である。真砂庄司の娘・清姫は奥州から熊野詣に来た修行僧・安珍に思いを寄せるが、男の裏切りに恋心が憎しみに豹変し、安珍を焼殺してしまう。

小野は自らを安珍に喩え、「私は安珍の様に逃げやしません」と藤尾に告白し、藤尾はまた自らを清姫になぞらえて、「私は清姫の様に追つ懸けますよ」と答える。皮肉なことに、小説の終わりでは、小野は安珍のように逃げ出し、藤尾は裏切りの苦しみに耐えきれず清姫のように自殺してしまう。

このように、『虞美人草』における愛の争いの描写には、アポロ的なものとディオニュソス的なものが繰り広げられ、悲劇の美学を鮮やかに表現している。『虞美人草』の悲劇の構造は、いわばアポロ的なものとディオニュソス的なものの衝突によって生まれたと言える。

おわりに

以上の通り、『虞美人草』における悲劇の構造と女性像の構築は、ニーチェ哲学と緊密に関わっている。『悲劇の誕生』という本は漱石文庫蔵書に見られないが、筆記ノート「Art, Religion, Intellect, Moral ノ関係」の部分に記した「Drama ハ最初 Dionysus, the god of wine, ノ honour ノ為ノ religious service ナリ（ドラマの始まりはディオニュソスである、酒神、名誉のための宗教的な儀式なり。）」という内容からは漱石がニーチェのディオニュソスに関して熟知していることが垣間見える。

また、小宮豊隆宛の書簡の文末では、「悪縁で英語を習ひ出したが是から可成英語を僥約して独乙と仏語にしたいと思ふ。先づ独乙を君に教はりたい。夏休み以後は少しやつてくれ玉へ。」という内容が書かれている。フランス語よりドイツ語を優先的に習得しようとする理由に関しては、当時漱石が読んだ『ツアラトウストラ』は、一八九九年ロンドン T. Fisher Unwin より出版した英語版で、恐らく漱石が原語でニーチェの本を読もうとするのではないかと考えられる。

ニーチェ哲学の受容を視座とするさらなる考察については別稿に譲るが、漱石の重層的な作品の構造を分析することにおいて、ニーチェの哲学からの探求は欠かすことのできないことは確かである。

【付記】本稿は、「江西省社会科学“十四五”（2021年）基金項目」の研究プロジェクト「夏目漱石漢詩における陶淵明詩歌の受容に関する研究」（研究代表者崔雪梅、基盤研究（A）21WX26）の成果の一部である。

注

- 1) 夏目漱石（1995）『漱石全集』16巻、岩波書店、639頁による。
 - 2) 高山樗牛（1977）『近代文学全集』40巻、筑摩書房、80頁による。
 - 3) 高松敏男、西尾幹二（1982）『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』白水社、518頁による。
 - 4) 湯浅弘（2007）「日本におけるニーチェ受容史瞥見（2）—ニーチェをめぐる明治期の言説（1）—」『川村学園女子大学研究紀要』18（1）、42頁による。
 - 5) 夏目漱石（1993）『漱石全集』1巻、549頁による。
 - 6) 夏目漱石（1994）『漱石全集』12巻、岩波書店、424頁による。
 - 7) Nietzsche(F.) : Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None(1899)、89頁による。
 - 8) 日本語訳は、手塚富雄訳（2023）『ツアラトウストラ』中公文庫、141頁による。
 - 9) 杉田弘子（2010）『漱石の「猫」とニーチェ』白水社、90—95頁による。
 - 10) 拙論「『虞美人草』における漢詩とその役割について」に述べているように、甲野の「日記」は全知なる存在、預言のような存在という役割を果たす。
 - 11) 秋山英夫訳、ニーチェ著（1996）『悲劇の誕生』、岩波書店、204—205頁による。
 - 12) Nietzsche(F.) : Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None(1899)、90頁による。
- 漱石の蔵書では、「let man fear woman when she loveth:then she sacrificeth anything , and nothing else hath value for her」という部分の余白に、漱石は「true」という感想が書き込まれている。そして、「let man fear woman when she hateth:for in the heart of their heart, man is only evil, but woman is base.」という部分の余白に、漱石は「true too」という感想が書き込まれている。

- 13) 日本語訳は、手塚富雄訳（2023）『ツアラトゥストラ』中公文庫、143頁による。
- 14) 英語原文は、Nietzsche(F.)：Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None(1899)、90頁による。日本語訳は、手塚富雄訳（2023）『ツアラトゥストラ』中公文庫、143頁による。
- 15) 平岡敏夫（1986）「『虞美人草』論—〈自我〉と〈虚構〉をめぐって—」『日本文学』35(10)、5頁による。
- 16) 平川祐弘（2017）『夏目漱石 非西洋の苦闘』、勉誠出版、317頁による
- 17) 注10と同じ。
- 18) 飛ヶ谷美穂子（1988）「喜劇と悲劇と：『リチャード・フェヴァーレルの試練』と『虞美人草』」、『藝文研究』52卷、200頁による。
- 19) 夏目漱石（1996）『漱石全集』23卷、岩波書店、879-880頁による。
- 20) 夏目漱石（1996）『漱石全集』23卷、岩波書店、883-884頁による。
- 21) 『悲劇の誕生』における秋山英夫の訳注によれば、「自然の模倣」はアリストテレスの美学の根本概念であるが、ニーチェはこれを自然という芸術家の創造活動の模倣と取っている。
- 22) 秋山英夫訳、ニーチェ著（1996）『悲劇の誕生』、岩波文庫、37頁による。
- 23) 夏目漱石（1994）『漱石全集』4卷、岩波書店、150-151頁による。
- 24) クレオパトラ（正式名称はクレオパトラ7世）は、エジプト・プトレマイオス朝の最後のファラオで、世界三大美女の一人で有名な女性である。生涯カエサル(Caesar)、アントニウス(Antonius)というローマ帝国の2人の英雄と結婚した。しかし、アントニウスには既にローマ人の妻がいて、今で言う重婚の罪を犯した。このようなアントニウスとクレオパトラの行為に対して、ローマ人の反感をも募らせ、後の2人の悲劇に繋がっていく。
- 25) 水崎野里子は「夏目漱石『虞美人草』の問題点—漱石とシェイクスピア」（江戸川女子短期大学紀要、2000）において、シェイクスピアの戯曲『アントニーとクレオパトラ』をモチーフにしていると指摘した。

参考文献

- 高山樗牛（1977）『近代文学全集』40卷、筑摩書房。
- 高松敏男、西尾幹二（1982）『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』白水社。
- Nietzsche(F.) (1899)『Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None』London:T.Fisher Unwin.
- 夏目漱石（1994）『漱石全集』岩波書店。
- ニーチェ著（1996）『悲劇の誕生』（秋山英夫訳、原著は1872年発行）岩波書店。
- 平川祐弘（2017）『夏目漱石 非西洋の苦闘』、勉誠出版。
- 杉田弘子（2010）『漱石の「猫」とニーチェ』、白水社。
- ニーチェ著（2023）『ツアラトゥストラ』（手塚富雄訳、原著は1884年発行）中公文庫。
- 酒井英行（1983）「『虞美人草』論：小野と小夜子」『日本文学』32(9)、40-52頁。

- 平岡敏夫（1986）「『虞美人草』論—〈自我〉と〈虚構〉をめぐって—」『日本文学』35(10)、1-11頁。
- 飛ヶ谷美穂子（1988）「喜劇と悲劇と：『リチャード・フェヴァレルの試練』と『虞美人草』」、『藝文研究』52、185-204頁。
- 水崎野里子（2000）「夏目漱石『虞美人草』の問題点—漱石とシェイクスピア」『江戸川女子短期大学紀要』15、118-111頁。
- 湯浅弘（2007）「日本におけるニーチェ受容史瞥見（2）—ニーチェをめぐる明治期の言説（1）—」『川村学園女子大学研究紀要』18 (1)、39-45頁。

Natsume Soseki's Literary Reception of Nietzsche's Philosophy Taking *Gubijinso* as an Example

CUI, Xuemei

Abstract

Gubijinso is the first novel written by Natsume Soseki in 1907, when he moved to the *Tokyo Asahi Shimbun* and worked as a professional writer. The structure of the tragic story surrounding the heroine Fujio and the image of women in the work overlap with the Dionysian elements described by Nietzsche in *The Birth of Tragedy* and in *Thus Spake Zarathustra*. Soseki's collection, *Thus Spake Zarathustra. A Book for All and None* (London: T. Fisher Unwin, 1899), contains 67 of Soseki's annotations. What is notable are Chalastra's remarks on the nature of women and Soseki's annotations in *Of Little Women Old and Young*. They are closely related to the construction of the image of women in *Gubijinso*. Although the Soseki collection does not have the book *The Birth of Tragedy*, the philosophy of Nietzsche mentioned in the novel, as well as the content of Drama ノ最初 Dionysus, the god of wine, ノ honour ノ為 ノ religious service ナリ in the notebook *Art, Religion, Intellect, Moral* ノ關係, it allows one to speculate on Soseki's familiarity with Nietzsche's ideas.

This paper attempts to elucidate specifically the construction of the female figure and the structure of tragedy in *Gubijinso* and to propose a new interpretation, using as clues Nietzsche's remarks in the 1899 edition of *Zarathustra*, read by Soseki, and the 1996 Iwanami edition of *The Birth of Tragedy*, and offer a new interpretation.

Keywords : *Gubijinso*, Zarathustra, *The Birth of Tragedy*, Dionysian

合気道研究における社会学的アプローチの意義とはなにか？ —ヴェーバー的モダニティ論の批判的超克を目指して—

村下 憲一（立命館大学大学院生）

要旨

本稿は、合気道研究における「近代化」の取り扱いを社会学的に再考するものである。はじめに、武道研究と近代スポーツ研究における「近代化指標」を取りあげ、批判的に検討した。つぎに、これらの指標が、潜在的に、いわゆる教科書的な「ヴェーバー的モダニティ論」に依拠していることを描き出した。そのうえで、「ヴェーバー的モダニティ論」に内在的な方法論的課題や、それを武道研究に応用するうえでの課題を検討した。最後に、これらの課題の超克の契機を、ヴェーバーの方法論とエリヤスの方法論の接続可能性を見出した。

キーワード： ヴェーバー的モダニティ論、近代化指標、文明化の過程、アレン・グットマン

はじめに

本稿は、合気道（日本武道）研究において、社会学内外からしばしば援用されてきた社会学的アプローチを批判的に検討し、その意義を再考するものである。とくに本稿では、いわゆる「教科書的に」参照される「ヴェーバー的モダニティ論（社会学者マックス・ヴェーバー（Max Weber）に基づく「近代化論」）」に基づく方法論の意義と限界性を再考し、日本武道研究や日本文化論における社会学的アプローチのより豊かな可能性を提起したい。ここでのヴェーバー的モダニティ論とは、（ヴェーバー自身は「合理化」を多義的に扱っているが、そのなかでも）「経済的/計算合理性（価値合理性から形式合理性への移行）」を主たる参照枠とする議論を指す。

そこで、第一章では、『武道の誕生』（井上俊、2004年）の「柔道の近代化指標」を確認し、第二章では、その応用事例として、合気道研究における取り扱いを確認する。その後、第三章では、「ヴェーバー的モダニティ論」の分析フレームとして、直接的に参照されるアレン・グットマン（Allen Guttman）『儀礼から記録へ（原題：*From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*）』の方法論的意義と武道への応用における陥穽を検討する。最後に、「ヴェーバー的モダニティ論」が前提とする発展史観自体のもつ限界性を提起し、そ

の課題の超克に向けて、ノルベルト・エリ亞ス (Norbert Elias) の方法論の意義を再考したい。

1. 井上俊『武道の誕生』のインパクト

日本武道研究として著名な論考は、数多く存在するが、とくに社会学的アプローチが援用された名著として名高いのは、『武道の誕生』（2004）である。著者の井上俊は、文化社会学を専門としており、日本社会学会の理事や日本スポーツ社会学会の会長として、日本の社会学を牽引してきた社会学者である。その井上の著書（井上, 2004）は、講道館柔道とその創始者である嘉納治五郎の歴史を中心に整理された、いわゆる歴史社会学、文化社会学的な書籍である。

同著のインパクトは、「明治中期以降に武術や武芸が「近代化」される過程で形成された近代文化である」（井上, 2004: 189）ことを描き出したことがある。社会学でいう「近代化」とは、単純な「西欧化」ではない。井上（2004）は、エリック・ホブズボウム (Eric Hobsbawm) らの『創られた伝統（原題: *The Invention of Tradition*）』などが描く「近代」という時代的な変化という参照枠を、批判的に継承し、それを日本の文脈のなかで描き出した。井上（2004）の描く「近代化」とは、「旧来の武術・武芸を新しい文明開花の社会に適応させ」（上掲: 7）ようとする社会的な変化であり、前近代との「連續性」と「非連續性」の双方を含んでいる。

ところで、井上（2004）のインパクトとして、嘉納の試みた「柔道の近代化」を9要素の指標として、整理したことが取りあげられる傾向にある。その内容を要約し、以下の9指標として整理したものが以下である（上掲: 9-10）。

1. 柔術各流の型の比較検討、再分類および理論的体系化
2. 段位級位制度の導入
3. 柔道乱取競技に関する競技規定・審判規定の確立
4. 講道館の財団法人化
5. 柔道修行における教育的価値の強調
6. 認知度を高めるための各種言論活動
7. 国際化構想と積極的な海外普及活動
8. 女性参加の認可および女子部の設立
9. 乱取競技を活用した「見るスポーツ化」

またこの指標に関連する分析として、Sato（2013）がある。Sato（2013）が、講道館柔道の特徴、つまり他の柔術各流との差異を、近代スポーツと共に通する「技術の理論化」、「競技規則の確立」、「意図的な海外普及」という三点に見出していることは、井上の分

析視角と重なる (Sato, 2013: 303)。

さて、井上の近代化指標自体は重要であるが、これを井上 (2004) の最大の功績として理解することは、正確な理解ではない。なぜなら、井上 (2004) がこの指標に示された要素から再描画/再構成しようとする柔道の近代化過程は、単純ではないからだ。井上 (2004) の最大の功績は、(近代日本という社会的な文脈のなかで、近代スポーツとの関係性を踏まえて描き出される) ホブズボウム的な「連続性」だけでなく、「非連続性」を同時並行的に取りあげ、それを歴史社会学的に描画したことである。

それでは、井上 (2004) 自身の歴史社会学的描画とは、いかなるものであったのか。それは「(近代に) 創られた伝統という発明」に依拠して描かれる。

嘉納の言説に最も典型的にあらわれているとはいっても、新しい時代への適合性 (伝統との非連続性) と古い伝統とのつながり (連続性) とをともに主張しうるという、この二重の性質は、柔道にかぎらず剣道や弓道も含めた武道一般に見られるものであり、そのことによって武道は、近代社会にふさわしいマーシャル・アーツであると同時に、近代化にともなう社会の変動のなかでなおかつ変わらない日本人の民族的・文化的アイデンティティを象徴する活動となることができた。この意味で、武道は「近代の発明」であると同時に、エリック・ホブズボウムらのいう「伝統の発明」の一形態でもあろう (井上, 2004: 118-119)。

ホブズボウムらのいう「伝統」とは、「近代」という社会的・時代的な構造変動の転換点において、過去ー現在を結合させ、不安定な社会のなかで、自らの安定的な拠り所としての意味を持ち、新しい時代に適応するうえでの避難所として、人びとに宥和的に受け入れられる。しかし同時に、「伝統」は、近代化の追い風として作用しうるという二重性を抱えている。井上 (2004) は、武道と結びつけられた/結びついた「伝統」というイメージが果たした役割と近代化の進展について、以下のように述べる。

IOC や日本体育協会にかぎらず、人を組織し物事を動かしていくうえで、武道を彩る「伝統」のイメージは、しばしば暗黙のうちに嘉納の身元を保証し、近代化の方向に沿った彼のさまざまな企図や活動を正当化し、それらに対する幅広い支援を取り付けるのに役立った。「伝統の発明」が近代化の促進に結びつく一つの形がここに見られる (上掲: 128)。

井上 (2004) における嘉納および柔道の歴史像は、社会学的見地に則れば、こうした近代化過程における「伝統」の二重性を描き出したものとして、理解されるべきである。しかし、こうした歴史像から、先の近代化指標のみを切り取ったならば、そこに含まれてい

たはずの複雑な両義的性格を無視し、「単線的な」近代化指標として、用いられるという危険性を抱えることになる。

次章では、合気道研究における「近代化指標」の影響力と課題を確認したい。

2. 合気道研究における近代化指標の影響力と課題

岩切朋彦（2009）や工藤龍太（2020）は、井上（2004）の9指標を踏襲して、合気道を分析する。たしかに「合気道の近代化」を扱ううえで、井上（2004）の9指標が援用され、歴史学的に検証される必要があること、また9指標が、モデルケースとされる柔道と他の武道との異同を解明する有力な分析指標となりうること、この二点については著者も同意する。しかし、合気道研究にとって、この近代化指標を取り込むことには、いかなる意義があるのか。以下では、両者における井上（2004）の9指標の取り扱いを事例として、検討を進める。

岩切（2009）は、井上の近代化指標のうち、とくに①柔術技法の理論的体系化、③柔道乱取競技法の確立、⑤柔道修行における教育的価値の強調の3要素を、近代的要素として重視する立場をとる（岩切, 2009: 112）。

しかし、岩切（2009）は、井上（2004）の問題を「武道誕生の発端を柔道のみに還元してしまった所にある」（上掲: 112）と述べ、「他の武道は、単に柔道の方法論を模倣したものであると位置づけられてしまった」（上掲同頁）ことを課題とする。かりに、井上（2004）が「柔道への還元」として描いたのであれば、「柔道→剣道」という一方的な影響関係ではなく、双方向的な影響関係であることを指摘する岩切（2009）の批判は妥当である（上掲: 112-113）。

ここで強調しておきたいが、井上（2004）は、「武術・武芸から武道の転換において、柔道が先導的な役割を果たした」（井上, 2004: 189）とは述べているものの、岩切が主張するような、他の武道を柔道に一方的に還元するような歴史的描画は行っていない。おそらく、岩切は「武道の誕生」というタイトルで、柔道の種目論的な歴史が展開されたことから、そうした批判を展開したのだろう。

だが、「近代化」という社会学的な過程は、まさにその同時代的な社会的変化を、歴史的に描き出す参照枠である。井上（2004）はそれを適切に認識しており、ゆえに西欧的な近代を代表しうる近代スポーツと、日本的な近代を代表しうる柔道の関係性を論じたのである。さらにいえば、「武道」と称される各種目は、程度の差はあるが、多くの場合、社会構造上の変化に沿うような、同時代的な変容を確認できる。その先導的な役割を果たしたとされる柔道に強力に焦点化する井上（2004）の試みは、「柔道への還元」として捉えるべきではなく、あくまで「西欧的近代（スポーツ）をモデルとして取り込むなかで模索された日本的近代（武道）」のモデルケースとして、捉えるべきである。

また岩切（2009）は、合気道の近代を「戦後」に据える点で、柔道との差別化を図って

いる。しかし、日本社会の近代化は戦前から進んでおり、その意味で、近代に生きる人間が構成する合気道が、近代の始点を「戦後」（戦後まで前近代に取り残されていた）とみなす岩切（2009）の解釈には、相当な矛盾が生じる。かりに岩切（2009）が、井上（2004）を批判的に摂取するのであれば、合気道の近代化過程のなかで、柔道的な近代化過程との異同を、その力学のなかで問うべきである。すなわち、（近代スポーツや柔道のそれに包摂されない）合気道独自の近代化過程があるとみなすのであれば、その固有の力学とはなにか、そしてそれは真に合気道に固有のものか、ということを問う必要がある。おそらく、その固有性なるものが、岩切（2009）が本来捉えるべき合気道の近代性（伝統の発明）である。岩切（2009）が捉えた「戦後の」近代化は、合気道史において重要であることには同意するが、それは井上（2004）の捉えた社会学的な近代性と類似していたとしても、決してそこに還元されるべきではない。

近代化のなかで生成された文化である以上、「合気道の近代とはいつか？」という問いは、社会学的にみれば不毛である。合気道に近代化の始点は存在しない。なぜなら、合気道の始原時点より、社会構造的な近代化の力学のもとで、それは社会構造の変動と同時並行的に生成されていった。その意味で、合気道は常に近代化し続けてきたのである。

そうではあるが、「合気道が近代化、すなわち社会的分化のなかで、戦後に独自の発展をなしたのか？」ということは、検証可能である。本来、岩切（2009）の問いは、この問いを描き出すことにあり、事実として、岩切自身の方法論（文化ポリティクス）の焦点はここに置かれている。つまり、社会学的な近代化指標を応用するという意味で、（ある種、要素還元主義的な）近代化論を起点とする岩切（2009）の分析は、方法論的な問題意識と、実際の分析に矛盾が生じている、といえよう。

つぎに、工藤（2020）の検討に移りたい。工藤（2020）は、「柔道の近代化指標との比較」において、井上（2004）および岩切（2009）を踏襲した分析を試みている。工藤（2020）は、1930年ごろにおける近代化の達成状況を以下のように評価する（工藤, 2020: 201-202; 著者が改変して引用）¹⁾。

1. 体系的指導法は未確立であった
2. 段位級位制度は導入されていない（1940年に採用された）
3. 植芝盛平の宗教観（大本）の影響から、乱取競技法を志向しなかった
4. 組織化していない（財団法人化したのは1940年であった）
5. 一般普及の意識は希薄であった
6. 一般普及の意識は希薄であった
7. 一般普及の意識は希薄であった
8. 女性層への組織的な普及は展開されていなかった
9. 乱取競技法を採用しなかったため、達成されていない

工藤（2020）は、井上（2004）を忠実に踏襲し、その指標を合気道に援用した事例である。この援用は、工藤（2020）の本旨ではなく、それ以上の分析はなされていない。工藤（2020）は、歴史学的研究手法のなかに、この社会学的指標を組み込んでいる。日本武道が近代的特質を備えるためには、(Guttmann (1978) の指標同様に、そのすべてが、近代以前に存在しなかつたわけではないことには、留意すべきであるが) たしかに井上（2004）の着目した 9 指標が、その近代化にあたって要求されることが多い。その意味で、工藤（2020）の忠実な分析自体は妥当である。だが、この近代化指標に依拠することのはず、あるいはこの指標の到達度（評価）に問題がなくとも、社会学的な近代化指標のみが切り取られ、それが独り歩きすることは問題化されるべきである。すなわち、この指標を参照することの意味 자체が問われるのである。

これは岩切（2009）および工藤（2020）の参考枠となった井上（2004）の 9 指標、さらにいえば、その着想にあたって、触発されたであろうスポーツ社会学の古典的名著『儀礼から記録へ』における「現代スポーツ 7 つの指標」の検討が要求されることを意味する。

3. アレン・グットマン『儀礼から記録へ』の方法論的意義と陥穿

井上（2004）は、9 指標を提示するにあたって、Guttmann (1978) を下地にしたとは明言していない。それは同著の「主要参考文献」にグットマンの著作が収録されてないことからも傍証できる。しかし、井上がスポーツ社会学の古典である同著を意識せずに、柔道の近代化過程を描き出したとは考えにくい。なぜなら、以下に示す通り、グットマンの 7 つの指標は、井上のそれと非常に類似性を持つからだ。

そこで、本章では Guttmann (1978) を確認し、そこに示される近代化論が、いわゆるヴェーバー的モダニティ論であることを示すことに注力する。この作業は、井上（2004）がグットマン以上にホブズボームらに親和的であること（第一章ではそれを焦点化した）を考えると、違和感を持たれるかもしれない。しかし、後続の研究群が、井上（2004）の近代化指標に強力に焦点化し、参照している現状において、井上（2004）の指標が前提とするであろう Guttmann (1978) を参照することは、不可避的である。

さて、Guttmann (1978) には、非常に著名な「現代スポーツ 7 つの指標」が掲載されている。それは①世俗化、②競争の機会と条件の平等化、③役割の専門化、④合理化、⑤官僚的組織化、⑥数量化、⑦記録万能主義（the quest for records；原文を忠実に訳するならば、記録の探究）という相互に関連する 7 つの特質である(Guttmann, 1978: 16=1981: 32)。

①世俗化とは、原始社会におけるスポーツの原始形態とされるものが、宗教的儀式や式典に組み込まれたものであり、その意味で聖なるものであった。しかし、現代スポーツは一部の例外を除いて、その宗教的因素の多くを払拭した。その結果、「俗と聖の結合はすでに破壊され、スポーツと超絶的な世界との絆は断ち切られ」（上掲: 26=48）、世俗化したの

である。

②競争の機会と条件の平等化とは、「(1)理論上、誰もが競争の機会を持つべきであること、(2)競争の条件は、すべての参加者に平等であるべきこと」(上掲: 26=49)と述べられているように、「(原理的、権利的な)平等性を指している。これは、「競技者自身の技量や能力」に基づく近代スポーツが前提とする実績主義との関係で重要である。近代スポーツは、原理的には、その参与においては不平等な社会的属性を持ち込まず、(勝敗・優劣を競うことによる必然的な帰結として現れる)「結果の不平等性」のみを生成しようとする(ただし、グットマン自身が言及しているように、概念モデルと現実は、今まで乖離している)。

③役割の専門化とは、「プロ化」と不可避的であり、「現代特有の業績第一主義から生じる」(上掲: 39=71)。著しい業績を獲得しようとする場合、特定の分野に専門特化し、それに専心し、それ以外の分野を他者に委ねる必要が生じる。そのためには、選手の専念するスポーツ種目における細分化のみならず、その周辺の支援者たちの役割の専門化が要求される。

④合理化とは、「現代のゲームは、マックス・ヴェーバーのいう“合目的性”すなわち、手段と目的との間には論理的な関係があるという意味」(上掲: 40=72)である、という。Guttmann (1978) は、これにつづけて「最も重要なことは、参加者が、遊びやすさが慣習の惰性に勝ると判断したときにはいつでも、新しいルールが開発され古いルールが捨てられる」(上掲同頁)と述べている。現代スポーツにおける諸規則は、もはや「目的に対する手段」に過ぎず、統括団体あるいは参加者の意向に沿って、常に合理的に改定される。

⑤官僚的組織化とは、現代スポーツにおける諸規則を決定し、その管理・運用を司る統治主体として、「官僚組織」として統括団体が生成されることを指す。ヴェーバー的な「近代官僚制度」を基盤とする統括団体は、その重要な役割として「ルールと規約が普遍的であることを見張ること」、そして「一般に地区大会から全国大会、そして世界大会へと発展する競技会のネットワークを促進すること」にくわえ、「記録²⁾の公認」(上掲: 47=82)を担っている。

⑥数量化とは、近代的時間(時計; 時間・分・秒)、近代的な測量(距離; km, m, cm; 重量; kg)によって、さらには、「段階的な尺度と審判団とを定め、そして彼らの主観的な評価の(最高点と最低点を除いた)算術平均を取る」(上掲: 51=88)ことによって、「すべてを数量化し計測可能となるものに変化させるという、ほとんど不可避的な傾向によって特徴付けられている」(上掲: 47=83)。統括団体の公認する「公的大会」、「公的記録」において、武道における儀礼的要素、舞踊などの美的要素を含め、あらゆる要素が、評価の対象となる際、数量的に計測されるのである。

⑦記録万能主義とは、「途方もなく高度な成績への刺激」であり、「理性的に処理した狂気の一形態」(上掲: 52=90)である「記録」が、(進歩史観に典型的に現れるような)人間の「直線的」な進歩へと突き進むことを証明するかのように、追及されることを指す。現

代的な意味での「数量化された記録」という概念は、「特定の競技場に集まった人たちの間ばかりでなく、彼らと時間と場所の隔たった人々との間でも競争を可能にするという驚異的な抽象的概念」（上掲：51-52=90）である。それゆえ、「記録」は、過去－現在－未来を接続し、過去からの発展を目指す「新記録」の樹立へと人びとを憧憬させる。これこそが、近代スポーツの「目的」となりうる。

それでは、Guttman (1978) は、なぜヴェーバー的モダニティ論に依拠したのだろうか。Guttman (1978) は、以下の二つの利点を挙げる。

ヴェーバー主義的モデルの一つの大きな利点は、小宇宙（現代スポーツ）のなかに大宇宙（現代社会）の諸特質——世俗主義、平等化、専門化、合理化、官僚組織、数量化——を見出せることだ。これら六つの特質と、他の社会秩序よりもスポーツにおいて著しい記録の追求は、それぞれ独立しながらも組織的には互いに関連した典型的な要素なのである…（中略）…ヴェーバー主義的解釈のもう一つの利点は、マルクス主義お定まりの経済決定論に陥らないことだ。この場合、経済決定論の欠点は、産業化の要素ですべてを説明することはできないということである（上掲：80-81=134-135）。

グットマンは、第一に、ヴェーバー的なアプローチを採択すること（同時にパーソンズ的な構造＝機能主義の影響がうかがえるが）によって、ミクローマクロの構造的な関係性を克明に描き出した。第二に、いわゆるかつてのマルクス主義的アプローチに象徴される経済決定論に基づく一元的な解釈を超克しようとした。とくに重要であるのは、グットマンが、経済決定論的なマルクス主義的アプローチを痛烈に批判し、その超克の契機をヴェーバー的なアプローチに見出している点である。

ここで指摘しておきたいのは、同時期のマルクス主義的アプローチには、すでに一元的な経済決定論や階級還元論を超克しようとする志向性が現れていることである。この意味で、グットマンの学説史的な認識には、当時の最新の動向が反映されていないという点で、疑問が付される。さらにいえば、旧来のマルクス主義的アプローチに対する他の理論潮流からの批判的超克は、何もヴェーバー的なアプローチに限定されたものではない。とくに1980年代以降は、こうしたパラダイムシフトが急速に進展することになる。なかでも、エリアス学派は、マルクス主義的な階級決定論を補完しうる方法論を展開すると同時に、グットマンが比較的親和的な立場をとるタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) の「システム理論」の台頭によって、一大潮流となった「構造＝機能主義」を徹底的に批判している。

ただし、これらはヴェーバー的なアプローチの意義を強調しようとするグットマンの方論自体の意義や先駆性を損なうものではない。だが、このヴェーバー的なアプローチの

武道研究への応用可能性や、ヴェーバー的モダニティ論における発展史観に関わる問題は、今日の日本武道研究においては、検討すべき課題である。

第一に、井上（2004）の9指標は、Guttman（1978）の7指標と完全に合致しているわけではないが、同様の変化の傾向性を捉えようとしている。それにもかかわらず、あえて井上（2004）が7指標に言及しなかったのはなぜか。

グットマンの7指標は「記録の追求」という近代化の力学を明確化するものであった。それは「より速く、より高く、より強く（*Citius, Altius, Fortius*）」という近代五輪の有名な標語に象徴される、不可逆的な「進歩（*progress*）」という近代的価値観の全体的な志向性である。しかし、講道館柔道は、この標語、志向性を明示的に継承したわけではない。

おそらく、井上（2004）は、この異同に敏感であった。柔道の近代化とは、いわゆる「術から道へ」の転換であり、それは柔道の場合、「精力善用自他共栄」という標語（柔道修行における教育的価値の強調）に現れる。これは、グットマンの忠実な模倣からは、引き出せず、独自の指標が要求される。井上（2004）は、このことに敏感であり、またこうした安易な指標に還元しない歴史的描画を試みた、と解釈しうる。

しかし、そうした周到さが垣間見える一方で、井上（2004）は、同著の「導入部」の末尾で、9指標を提示するにとどまっており、グットマンのように、この中心的な力学を明示していない。この説明不足によって、9指標は等質的に取り扱われる可能性を残存させた。結果として、井上（2004）が抽出した柔道の近代化の力学自体は、武道研究者の共通認識と合致しており、比較的適切に読み取られているが、（とくに社会学になじみのない研究者ほど）Guttman（1978）との異同を見落とされる可能性を生成した。

岩切（2009）と工藤（2020）は、歴史学・人類学的アプローチを採択しており、社会学者ではない。それゆえ、両者が、井上（2004）から Guttman（1978）（および、ヴェーバー的モダニティ論）を読み取ること、その異同を識別することには、無頓着であった可能性は大いにありうる。しかし、かりに合気道の近代化をこうしたヴェーバー的モダニティ論の俎上では引き出しきれない可能性があるものとして見なす立場をとるのであれば、安易に近代化指標を参照することで、方法論と実際の分析の間に埋め難い矛盾が生じることになる。

第二に、ヴェーバー的モダニティ論とはいかなる発展史観で構成されるのか。また、その方法論的課題とはなにか。次章ではこれらに議論を移したい。

4. ヴェーバー的モダニティ論における発展史観と方法論的課題

本章の目的は、ヴェーバーにおけるモダニティ論を論じることではない。ここでは、通俗的な Guttman（1978）理解において、彼が依拠したと理解される、いわゆる「ヴェーバー的モダニティ論」に内在的な発展史観と結合した方法論的課題を明白にすることである。

ジグムント・バウマン (Zygmunt Bauman; 1987) は、「歴史を啓蒙 (*lumières*) の止むことなき前進と捉えるヴィジョン」 (Bauman, 1987: 111=1995: 159) を説明する際、ヴェーバーのホイッグ的な歴史観に言及している。Bauman (1987) によれば、それは「ヴェーバーの歴史観、近代社会観においてその頂点、最高度の緻密化に達する。彼は、歴史を進歩的合理化とみなし、近代社会を、自らの過去、とりわけ、長期にわたる非合理的行為の支配としての過去を暴露する根本的根絶として描き出す」 (上掲: 112=160) と述べる。

この引用部に適切に示されているように、近代化を「進歩的合理化」として描きだすヴェーバー的モダニティ論は、「啓蒙の止むことなき前進」という発展史観が前提となるが、これはGuttmann (1978) にどのような影響を与えたのか。Guttmann (1978) には、ヴェーバー自身に関する言及は（存在しないわけではないものの）少なく、個別の議論におけるヴェーバー解釈の論拠を特定するのは、困難である⁴⁾。しかし、「儀礼から記録へ」というタイトルが象徴する含意を踏まえるならば、グットマン（のヴェーバー解釈の「全体像」）は、「脱魔術化」として描かれる「進歩的合理化」を念頭においていた、と考えるのが妥当であろう。

通俗的な理解では、近代社会とは、近代科学に基づく「予測可能性」によって支配される社会であり、そのもとで人間は、「理性」を獲得し、「予測可能性」に基づく合理的な行為を営むようになる、というものである。これは、一般的に「主知主義的合理化 (intellektualistische Rationalisierung)」や「世界の脱魔術化 (die Entzauberung der Welt)」として理解される、ヴェーバー的モダニティ観に依拠している。

比較的参照されやすい『職業としての学問』では、以下のように述べている。

すべての事柄は、原則上、予測によって、意のままになるということ、——このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化または合理化しているということの意味である。ところで、このことは、世界の脱魔術化 (die Entzauberung der Welt) ということにほかならない (Weber, 1992: 87; =1980: 33)⁵⁾。

「主知主義的合理化」あるいはそれと同義の「世界の脱魔術化」とは、科学技術と、それにに基づく科学的かつ合理的な予測・計算が、かつての神秘的、超自然的な力に基づく、呪術、魔術、宗教的な力（祈祷など）に、置き換わることを意味する。

この「予測可能性」に基づく合理的な行為が、まさに人びとを「数量化され、記録化された競技レコード」を追求する近代スポーツへと向かわせる。たしかに、「進歩的合理化」を近代化とみなしうるヴェーバー的モダニティは、「単線的な進歩史観」を帶びているとはいえ、Guttmann (1978) の「近代スポーツにおいて、記録万能主義が、他の社会秩序にも増して、顕在化する」という見解は、方法論的にも史実的にも、妥当性のある見解である、といえよう。

しかし、こうしたヴェーバー的モダニティ論には、ヴェーバー内在的/外在的な立場から批判される課題が残されている。この課題を超克しない限り、近代化指標を参照することの意味は見出せない。

以下では、三筈利幸（2021）によるヴェーバーの『倫理』（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）解釈を導きの糸としながら、ヴェーバー内在的な批判的精緻化の糸口を、合気道研究への応用可能性として描き出してみたい。

三筈（2021）は、ヴェーバーの『倫理』が「近代化論」とは別の地平にいると見做しており、「暗黒の中世から明るい近代へという、古色蒼然たる歴史観に裏打ちされ」（三筈, 2021: 67）のような「『倫理』を宗教による資本主義生成－発展論だとする誤解」（上掲同頁）が、「キリスト教的禁欲」に関する誤解と関連していることを提起する。

これに関わって、三筈（2021）は、例の「単線的な発展史観」を「まるごと「前近代」なるものが支配する社会があり、そこに変革が起こって、まるごと「近代」の新たな社会が登場する、といったきわめて単純で単線的な「近代化」という歴史認識を持ち合わせていない」（三筈, 2021: 67）と、明白に棄却する。

三筈（2021）の『倫理』解釈に忠実に従う限りにおいては、ヴェーバー的モダニティは、「ホイッグ的ヴィジョン」として見做すことは、不適切であるだろう。ここでは、三筈（2021）の妥当性の是非を論じることが目的ではない。しかし、通俗的な「理性」あるいは「予測可能性」によって支配された「明るく、綺麗な」ヴェーバー的モダニティ論の影響は、Guttmann（1978）にも確認できるが、それは現代では、ヴェーバー内在的見地からも検討の余地があるものである。

しかし、合気道研究におけるより重要な問題は、「予測可能性」によって支配された「明るく、綺麗な」、「価値合理性から形式合理性への移行」として描かれる通説的な「ヴェーバー的アプローチ」自体の妥当性である。たしかに、Guttmann（1978）は「プレイ」の重要性それ自体は認識していた、といえる。だがそれにもかかわらず、同著の主題が「価値合理性から形式合理性への移行」という色彩を強く帯びていることで、その重要性を形骸化させたという陥穀に陥った。これこそが決定的な問題である。

スポーツにおける「プレイ」（楽しさ）とは、明らかに「価値合理性」を基準とする。この性質ゆえに、「面白さを担保できないルール」が、修正されることになる。たとえば、リオ五輪における「組まない柔道」（原沢久喜－テディ・リネール）が、多くの落胆と物議をもたらしたことは記憶に新しい。これは、まさに柔道の「価値合理性」という基準からみて、問題化されたことを意味する。

Guttmann（1978）のヴェーバー理解には、この含意が現れているものとして読解しうるが、究極的には「記録の追求」へと収斂する近代化指標を生成したことによって、この「価値合理性」という重要な参考枠が、見落とされかねない。武道に限らず、スポーツ文化においては、この参考枠こそが決定的に重要となるにもかかわらず、彼はそれを主題にした。

先行研究で「術から道へ」が重視されたことは、（その力学を体系的に論じていないが）この「価値合理性」を論拠として説明可能である。しかし、近代化指標ではこの参照枠の中心軸が、「形式合理性」へと移行され、方法論的な乖離、矛盾を引き起こすことになる。

こうした「誤読」とみなされるヴェーバー的モダニティ論に内在する方法論的な問題とは何か。それは、もうひとつのヴィジョンである「フロイト的モダニティ論」を批判的に摂取したエリ亞スの「文明化過程論」と比較することで一層明白になる。

5. フロイト的モダニティ論における発展史観と方法論的課題

Bauman (1987) は、フロイト的モダニティのヴィジョンを、「現実原則」が「快楽原則」に勝利を収めた時代、その結果として、人々が、衛生上安全で、清潔で、平穏な環境に持つある程度の安全性を、彼らの自由（と幸福）の一部と引き換えにした時代として描き出す（Bauman, 1987: 113=1995: 162）と述べる。このヴィジョンが描く取引は、苦痛を伴うような「自然な」衝動の抑圧と、人間の性向にうまく調和せず、本能と情念にとって、誤ったはけ口をもたらすにすぎない行動パターンの押し付けの産物として生じた利益（上掲同頁）をもたらした。しかし、「文明は自らへの不満を育み、諸個人を——潜在的にあれ、顕在的にあれ——社会との永遠の葛藤へと解き放つ」（上掲: 114=163）という側面を持ち合わせている。それゆえ、モダニティは、人類に「精神病と精神疾患の高い発生率」（上掲: 114=163）という対価を支払わせることになる。

そのうえで、Bauman (1987) は、このような「フロイト（引用者補足: 『文化の不安』）が成熟させたモダニティの性質から演繹してきた「本能の抑圧」が、実際のところは、特定の時間と場所、社会文化的形態に制約された歴史的過程であることを論証した」（上掲: 114=163）研究が、エリ亞スの『文明化の過程』である、と述べる。

ここで重要なのは、エリ亞スの論証、またそれに基づくモダニティの解釈が、「モダニティを合理性の時代として捉えたヴェーバーのホイッグ的ヴィジョンに対する直接的な攻撃」（114=163）として位置づけうる、という点である。エリ亞スのラディカルな解釈は、「近代社会をもたらし、その再生産を支配する諸々の権力は、〈理性〉の承認を与えられたものではなかった」（114=163）ことを示す。エリ亞スに基づくならば、ヴェーバー的モダニティ論は、「単線的な発展史観」として描かれることが問題ではない。それが「〈理性〉の承認を与えられた」ことを自明視することにある。

Bauman (1979) が「恥の感情は、明らかに社会構造に従って形成された社会的機能である、とエリ亞スは結論づける」（Bauman, 1979: 122）と述べるように、「本能の抑圧」（それは「恥」や「嫌悪感」と結びついている）は、社会的に生成されるものである。この社会=歴史的生成の産物というエリ亞スの認識は、（バウマンの認識するような）ヴェーバー的な「理性の承認」を前提とするという含意を帯びたモダニティ論とは、一線を画している。

Bauman (1979) は、「本能的な反応に課される制約、感情を隠すこと、「理性」や計算を

優先すること」などの「文明化された振る舞い」は、「特定の歴史的フィギュレーションの産物であるため、意識的な、意図的な尽力の結果ではなく、ましてや合理的な計算によるものでもない」（上掲：123）と、エリアスの文明観を説明することは、その一例である。

このように、「暗黒の中世から明るい近代」という発展史観によって構成された「理性の承認」が牽引する「綺麗な」モダニティ論は、あくまで理想化されたものに過ぎない、といえよう。

さて上述の通り、岩切（2009）および工藤（2020）における井上（2004）の近代化指標の援用に関する問題とは、「ホブズボーム」的な「近代」認識の欠落であった。その意味で、分析フレームの精緻化を目指すという意図に反して、方法論的に後退させた、とも評価しうる。一方で、井上（2004）の近代化論の方法論は、「想像の共同体」や「創られた伝統」という参照枠に限られている、という点で方法論的な精緻化が要求される。

それでは、このいわゆるヴェーバー的モダニティ論を超克しうるエリアス的なヴィジョンは、合気道研究をどのように再構成しうるのだろうか。

繰り返しになるが、根本的な課題は、「ヴェーバー的モダニティ論」⁶⁾に依拠する、あるいはそれを前提とする発展史観自体にある。「ヴェーバー的モダニティ論」の俎上において、「術から道へ」という近代的転換は、「暗黒の中世から明るい近代」という発展史観によって構成された「理性の承認」によって、描き出される。ゆえに、それは武道が「中世的な野蛮さ」を克服した「近代文化」として、暗い過去との決別を図るために、殺傷性が否定され、西欧近代的な教育観に合致する価値が強調される必要があった、という歴史觀を生成することになる。

もしこのような、一見妥当な歴史觀に基づくならば、武道の近代化は、あくまで西欧的近代社会とそのもとで生成された近代スポーツと同一の枠組みでのみ論じられることになる。これは、日本の近代化を論じたロバート・ベラー（Robert Neelly Bellah）『徳川時代の宗教』に対する日本の論者（丸山真男ら）の批判を想起させる。丸山らの批判を端的にまとめれば、日本の近代化は西欧的な近代的合理化のみでは説明されない、ということであつた。

これと同様に、「術から道へ」という特殊日本（または特殊東アジア）的転換を、西欧的な近代的合理化に還元したのであれば、重要な論点を欠落されることになる。それゆえ、「合理化へと向かう進歩を前提とする歴史觀」に裏づけられるべきではない。この点で、García（2019）によるエリアスに基づく歴史社会学的アプローチは重要である。

しかし同時に、García（2019）の描く長期的な射程からは、「術から道へ」の転換が「特定の歴史的フィギュレーションの産物」でもあることを説明できたとしても、その転換に伴って再構成された「価値合理性」自体を、方法論的に、精緻にあるいは体系的に論じきるには至っていない。

そこで、ヴェーバー内在的な方法論をエリアスの「文明化過程論」に統合し、合気道（日

本武道）研究に、より焦点化された、スポーツ社会学的方法論を再構成する必要がある。たとえば、学会報告のレヴェルではあるが、村下憲一はヴェーバーの「預言者・司祭・呪術師」という宗教社会学的モデルに、ヴェーバー内在的な可能性を見出しながら、それを「フィギュレーション」と接続することを試みている⁷⁾。

これは、日本武道に現れる「儀礼」（またそれと関連する「本能の抑圧」など）が、とくに近代以降の日本という「特定の時間と場所、社会文化的形状に制約された歴史的過程」のなかで、人びとの「意識的、意図的な努力の結果、合理的な計算」という特定の個人による偉業に還元せずに、社会生成的、あるいは心理生成的側面から、説明することにも貢献する。この方法論的機軸に基づくことで、日本武道が、西歐的な近代とも異なる、日本特有の「近代の発明」であることを、社会学的見地から描き出せるようになるだろう。

おわりに

本稿が取り扱った井上（2004）、岩切（2009）、工藤（2020）が捉えようとしたのは、近代日本という「ドメスティック」なキャンバスにおける「日本武道」の創出過程であった。これに関わって、Sato（2013）は、柔道研究の主たる関心が「日本史の文脈上で、柔道を理解することにあるため、柔道を、より広い世界的な流れのなかに位置づけるという課題は、まだ完全なものではない」（Sato, 2013: 300）と述べている。この指摘は、柔道に限らず、合気道研究の限界性⁸⁾を提起するものである。

しかし、それは「日本史」の文脈での理解が完全に達成されたことを意味しない。本稿では、この「日本史」の底流にある潜在的なモダニティ観の孕む問題を提起することに焦点化し、その超克の契機をヴェーバー内在的な方法論とエリ亞スの「文明化過程論」の接続可能性に見出すに至った。

本稿は、スポーツ社会学における「現代的古典」ともいえる、ヴェーバー的アプローチを、武道研究の俎上で批判的に超克する試みではあるが、その応用可能性は日本武道に限定されるものではない。それは茶道などの他の日本文化や宗教などにも、応用可能性であろう。

このように、ヴェーバー的モダニティ論の批判的超克を試みることは、西歐的近代と日本の近代の比較において、重要な視座を提起している。社会学的アプローチの多くは、西歐的近代を捉るために、構築された方法論に依拠している。しかし、西歐への機械的還元を回避して、それらを慎重に扱う限りにおいては、非西歐の分析においても非常に示唆に富んだ分析枠組みとして、活用できるのである。

注

- 1) 5、6、7について、工藤（2020）は「当時の植芝は積極的に一般の修行者を弟子にすることはなかったようである」（工藤, 2020: 201-202）と述べたうえで、傍証を挙げるにとどめ

ている。そのため、ここでは同様の表現を用いて記載した。

- 2) グットマンは、この直後に、それを「現代スポーツの七大特質のうち最後にして最もユニークな現代的特質であり、数量化に依っている」(Guttman, 1978: 47=1981: 82) と述べる。また、それは「数量化への衝動と、勝ち、優り、最高になりたいという欲求とを結びつけた」(上掲: 51=89) 結果として現れる概念である、という。
- 3) 山下高行 (1993) に依拠するならば、(潜在的にではあるが) Guttman (1978) の 7 指標に現れる、彼が「目的合理主義」に求めようとする論理的帰結には、議論の余地がある。この点は、スポーツ文化や日本武道の分析枠組みとして、ヴェーバー的アプローチを参照するならば、引き継ぎ機検討されるべき重要な論点である。
- 4) この点については、今後より正確な検討が進められるべきである。たとえば、彼が引用した先行研究、グットマンの他の著作、さらには国内外において蓄積されたグットマン研究、これらの検討を進めることで、より正確に理解できるようになるだろう。
- 5) 『職業としての学問』に関する誤訳は、すでに多くの問題が指摘されてきた。おそらく、現行の邦訳では、野崎敏郎による『職業としての学問（完全版）』が最も精緻であろう。ただし、ここでは通俗的な、誤解に満ちた「ヴェーバー」モデルを批判するという本旨に沿って、従来の尾高訳（現在流通している 1980 年の改訳版）より引用している。
- 6) ヴェーバーの合理化論には、いくつかの解釈が存在しており、その全てを批判するわけではない。また、グットマンの依拠するヴェーバー論は、この「モダニティ論」のみに還元できるものではない。しかし、こうした通説的な「ヴェーバー的モダニティ論」に対する理解の整理を起点として、批判的に再構成することには意義がある、と著者は認識している。
- 7) 当該報告は、村下慣一による「植芝吉祥丸の「文化ポリティクス」戦略に関する社会学的再描—戦後初期における合氣会の関係論的把握に向けて—」(日本スポーツ社会学会第 32 回大会、2023 年 3 月 16 日、至中京大学) である。同学会では、石井昌幸「近代スポーツの「精神」と価値合理性について—歴史的観点から—」(同第 33 回大会、2024 年 3 月 16 日、至日本大学) のように、歴史学的見地からグットマンを扱う研究事例も存在する。両者の立場は、いくつかの点（着目すべき概念など）で一致しているが、社会学（前者）と歴史学（後者）の志向性に起因する異同が確認できる。前者は、ヴェーバーの方法論を学説史研究の俎上で扱おうとする点で、本稿と相補的である。
- 8) ただし、これらの先行研究が、本稿の批判するモダニティ観を内含していた、とは主張していない。本稿はあくまで「近代化」指標という参照枠の確立という行為自体に（通常、必然的に）付随しうる「潜在的な」進歩史観を明示することに焦点化したにすぎない。

参考文献

Allen Guttman (1978) From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports, New York: Columbia University Press(=清水哲男（訳）(1981) スポーツと現代アメリカ. TBS ブリタニカ).

- 井上俊（2004）『武道の誕生』吉川弘文館。
- 岩切朋彦（2009）「合気道の近代とはいつだったのか—武道としての合気道の誕生」『西南学院大学国際文化研究論集』3、111-133 頁。
- 工藤龍太（2020）「嘉納治五郎は合氣武術家・植芝盛平の何を評価したのか？」（志々田文明・大保木輝雄（編）『日本武道の武術性とは何か—サピエンスを生き抜く力』青弓社）、190-231 頁。
- Sato Shohei (2013) "The Sportification of Judo: Global Convergence and Evolution" *Journal of Global History*, 8 (2), pp. 299-317.
- Max Weber (1992) "Wissenschaft als Beruf", Mommsen, W., J. und Schluchter, W. (Hrsg) Max Weber Gesamtausgabe, Bd. I /17: Wissenschaft als Beruf 1917/1919; Politik als Beruf 1919, Tübingen J.C.B. Mohr: S. 70-111 (=尾高邦雄（訳）(1980)『職業としての学問』岩波書店。
- 三筈利幸（2021）「マックス・ヴェーバーと「近代文化」—『倫理』論文は何を問うのか(7)」『立命館産業社会論集』, 56(4)、65-84 頁。
- Raúl Sánchez García (2019) *The Historical Sociology of Japanese Martial Arts*, New York: Routledge.
- 山下高行（1993）「スポーツ論小考—ポストモダンの時代認識の中で」水田勝博教授退職記念論集編集委員会（編）『スポーツ科学と人間—水田勝博教授退職記念論集』立命館大学経済学会、159-170 頁。
- Zygmunt Bauman (1987) *Legislators and Interpreters*, London, Polity Press. (=向山恭一ほか（訳）(1995)『立法者と解釈者-モダニティ・ポストモダニティ・知識人』昭和堂).
- (1979) "Book Review: The Phenomenon of Norbert Elias" *Sociology*, 13(1), pp. 117-125.

What significance does sociological approach hold for aikido research? : Towards a critical transcendence of Weberian Theory of Modernity

MURASHITA, Kanichi

Abstract

This study aims to reassess the treatment of "modernization" within aikido research from a sociological perspective. First, it critically examines the concept of "modernization indicators" prevalent in martial arts and modern sports research. Second, it demonstrates the reliance of these indicators on the so-called textbook "Weberian theory of modernity." Third, it delves into the methodological challenges posed by Weberian modernity theory and its application in martial arts research. Finally, the study explores the potential for transcending these challenges by bridging the methodologies of Weber and Elias.

Keywords: Weberian theory of modernity, modernization indicators, The Civilizing Process, Allen Guttmann

学会役員

＜顧問＞

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

山泉進（明治大学・名誉教授）

＜会長・理事＞

李東哲（山東外事職業大学・教授）

＜副会長・理事＞

安達義弘（日韓言語文化交流センター・副代表）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・名誉教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

鄭亨奎（日本大学・特任教授）

李東軍（蘇州大学・教授）

＜常任理事＞

李昌玟（韓国外国語大学校・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

金珽実（商丘師範学院・副教授）

崔肅京（富士大学・教授）

施暉（蘇州大学・教授）

李慶國（追手門学院大学・教授）

李先瑞（寧波理工大学・教授）

李東輝（大連外国語大学・教授）

＜一般理事＞

安勇花（延辺大学・副教授）

飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）

伊月知子（愛媛大学・准教授）

岩野(吉川)佳英子（愛知工業大学・教授）

加藤三保子（豊橋技術科学大学・名誉教授）

倪璋（常葉大学・教授）

崔玉花（延辺大学・副教授）

周堂波（武漢理工大学・副教授）

徐瑛（延辺大学・副教授）

宋曉凱（曲阜師範大学・教授）

張維薇（四川大学・副教授）

中川良雄（京都外国语大学・特任教授）

仲矢信介（東京国際大学・准教授）

娜荷芽（内蒙古大学・教授）

任星（廈門大学・副教授）

白曉光（西安外国语大学・副教授）

堀江薰（新潟県立大学・名誉教授）

宮脇弘幸（宮城学院女子大学・客員研究員）

宮崎聖子（福岡女子大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

＜事務局＞

事務局長

金珽実（商丘師範学院・副教授）

副事務局長

力丸美和（九州大学・助教）

事務局助手

于心（成都東軟学院・副教授）

南明世（北海学園大学・講師）

学会動向

◆第6回 東アジア日本学研究国際シンポジウム募集開始

2024年9月20(金)～22日(日)に中国寧波市の浙大寧波理工学院において開催される東アジア日本学研究学会2024年度の学術大会「第六回東アジア日本学研究国際シンポジウム」の研究発表募集が開始され、中国や日本から数多くのお申し込みがありました。

◆第1回 東アジア日本学研究学会役員会がオンラインで開催

東アジア日本学研究学会 2024年度 第1回 理事会が、2024年4月26日(金)に李東哲会長の司会でオンライン開催され、役員24名が出席しました。新会長の李東哲会長の挨拶に始まり、新役員の顔合わせが行われました。新しい顔ぶれの並ぶ中、学会誌や大会などの担当理事が報告を行い、情報の共有がなされました。

◆第1回 東アジア日本学研究学会常任理事拡大会がオンラインで開催

東アジア日本学研究学会 2024年度 第1回 常任理事会拡大会が、2024年7月5日(金)にオンライン開催され、役員17名が出席しました。主に「第6回東アジア日本学研究国際シンポジウム」の開催準備について情報共有を行いました。

◆第2回東アジア日本学研究学会役員会がオンラインで開催

東アジア日本学研究学会 2024年度 第2回 理事会が8月6日(火)にオンライン開催され、役員22名が出席しました。一ヶ月後に開催が迫る「第6回東アジア日本学研究国際シンポジウム」の詳細について情報共有を行い、より良い大会運営のために活発に意見交換がなされました。

◆学会誌第13号への投稿募集

2025年3月発行予定の『東アジア日本学研究』第13号への投稿を募集中です。会員の皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは10月12日(土)の北京時間24:00です。

東アジア日本学研究学会事務局

会員消息

◆新入会員（33名）

林欣彤（九州大学、院生）、劉婧怡（九州大学、院生）、王鶴琴（内蒙古大学、助理館員）、王淋萱（名古屋大学、院生）、顏佳婷（北京外国语大学、院生）、謝展眉（浙大寧波理工学院、講師）、黃少安（韓国国立全北大学、院生）、劉藝寒（東京都立大学、院生）、彭慧（大連大国語大学、講師）、許娜（武漢理工大学、院生）、蔡玉婷（名古屋大学、院生）、彭広陸（北京大学、教授）、李広志（寧波大学、副教授）、黃逸（浙江越秀外国语大学、教師）、張特（北京工業大学、院生）、姚心怡（大連外国语大学、院生）、楊雪萌（大連外国语大学、院生）、曹美蘭（广东外语外贸大学南国商学院、教授）、田宇洋（四川师范大学、院生）、寿劍宏（上海師範大学、院生）、侯榮榮（国防科学技术大学、院生）、周璨（名古屋大学、院生）、李曼彦（名古屋大学、院生）、廖韻（名古屋大学、院生）、楊蕊（北京師範大学、院生）、木村陽子（大東文化大学、教授）、金芸霖（蘇州大学、院生）、雷曉敏（廣東外国语大学、教授）、王赫璇（天津科技大学、院生）、李君（新羅大学、院生）、韓娜（浙大寧波理工学院、講師）、夏佳来（浙大寧波理工学院、講師）、金春紅（河北東方学院、講師）

◆会員の所属・職位変更

倪璋 常葉大学、准教授→常葉大学、教授

南明世 国際医療福祉大学留学生別科、助教→北海学園大学、講師

◆書籍出版

金珽実編、池孝民著：朝鮮近代文人と『学之光』、花書院、2024年7月

※上記の情報は2024年4月1日以降、2024年9月30日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会事務局

東アジア日本学研究学会会則

＜名称＞

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

＜目的＞

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をとおして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをとおして、学問の進歩及び当該地域の平和的発展に寄与することを目的とする。

＜事業＞

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

＜会員＞

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

＜入会・退会＞

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

＜会費＞

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員 5,000 円
学 生 3,000 円
賛助会員 50,000 (1 口) 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。
(例：2020年度年会費分の春季号は翌2021年3月、秋季号は翌2021年9月に発行予定)
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは以下の者および編集委員会で承認した者とする。
 - ・春季号
 - 筆頭著者：会員およびシンポジウムで発表した非会員
 - 共著者：上記の者のほか、シンポジウムで発表していない非会員も可
 - ・秋季号
 - 筆頭著者：会員のみ
 - 共著者：会員のほか、非会員も可
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。投稿者が非会員の場合は、投稿料として会員の年会費相当額を、投稿本数分事務局に納入することとする。（いずれの場合も、筆頭著者だけでなく共著者も同様とする。）
- 5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による投稿承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとすること。また、一人が一回に投稿できる本数は以下の通りとする。
 - ・筆頭著者 2本以上…不可
 - ・筆頭著者 1本のみ…可
 - ・筆頭著者 1本、第二著者以下 1本…可
 - ・筆頭著者 1本、第二著者以下 2本以上…不可
 - ・筆頭著者 0本、第二著者以下 2本まで…可
 - ・筆頭著者 0本、第二著者以下 3本以上…不可
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰

属する。

- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は別添の所定の様式で提出すること。
- 12) 「完成原稿と論文要旨」「投稿票」「投稿承諾書」は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則として MS-Word とする。ファイル名はそれぞれ次のようにすること。

	ファイル名	例
完成原稿と論文要旨	1. 論文・要旨（氏名）	1. 論文・要旨（山田太郎）
投稿票	2. 投稿票（氏名）	2. 投稿票（山田太郎）
投稿承諾書	3. 投稿承諾書（氏名）	3. 投稿承諾書（山田太郎）

採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者2名による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブチェックを受けること。
- 15) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

2018年9月30日 制定

2019年9月20日 改正

2021年4月20日 改正

2023年1月20日 改正

投 稿 票				
投稿日：20 年 月 日				
氏名				
所属・職位	(例) ○○大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生			
メールアドレス				
電話番号				
論文タイトル				
種類(該当を残す)	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評		
分野(該当を残す。 複数回答可)	1. 語学・言語教育 5. 哲学・思想	2. 文学 6. 経済	3. 文化 7. 政治	4. 歴史 8. その他
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特になければ記載不要です。				

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚（注・図表・参考文献を含む）、秋季号論文は10～15枚（注・図表・参考文献を含む）とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しに付ける番号は1.、2.、3.…とし、その下の款項には1.1.、1.2.、1.3…を用いる。さらにその下の項には1.1.1.、1.1.2.、1.1.3…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いててもよい（番号は付けない）。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする（欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く）。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号（m kg など）を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名（発行年）『書名--副題』出版社。（MS 明朝 9P）

(日中韓語の雑誌論文) 著者名（発行年）「論文名--副題」『雑誌名』巻数(号数)、○-○頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名（発行年）「論文名--副題」（編者名『書名--副題』出版社）、○-○頁。

(日中韓訳書) 編著者名（発行年）『書名--副題』（訳者名、原著は○年発行）出版社。

(欧文の書籍) 編著者名（発行年）書名：副題、発行地：出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名（発行年）“論文名：副題,” 雑誌名、巻数(号数), pp. ○-○.

(欧文の書籍中の論文) 著者名（発行年）“論文名：副題,” 編者名 ed., 書名：副題、発行地：出版社, pp.

○-○.

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

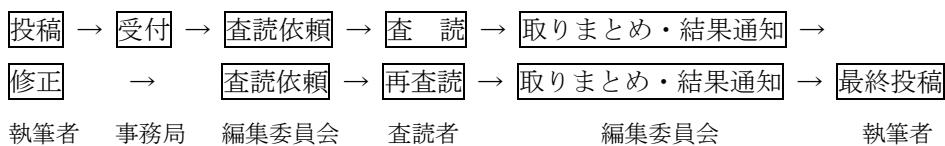
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先：東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

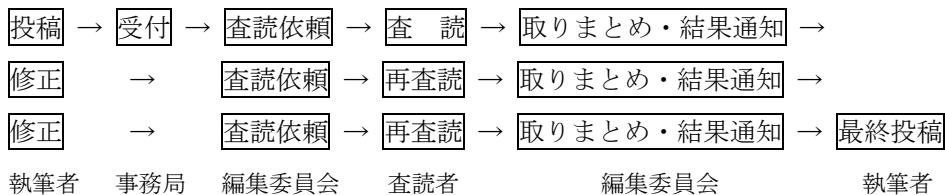
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が2週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

- ・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。
- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
 - 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
 - 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

<総合判定ガイドライン>

(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)

採用 : ◎◎ (6点)

条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)

再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)

不採用 : ×× (0点)
- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には12本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用7本、不採用3本、不受理2本という結果になりました。今回も書式や日本語に不備のある投稿が目立ちました。内容だけでなく書式や日本語もしっかりと見直して投稿して下さい。

副編集委員長 加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）

地球温暖化の影響で、各地で気温の極端な上昇や集中豪雨など異常気象が報じられています。日本では「ゲリラ豪雨」「爆弾低気圧」など軍事由来の言葉が使われますが、かなり物騒です。論文執筆の際にも、言葉の選択は慎重にしたいと思う今日この頃です。

編集委員 加藤恵梨（愛知教育大学准教授）

今回も多角的な視点から、解明されていない日本語の問題について分析している研究が多く、改めて日本語学習者の視点で日本語を捉えることの必要性を感じました。査読を通して大変勉強になりました。

編集委員 金光林（新潟産業大学教授）

今回も査読を通して、いい勉強になりました。『東アジア日本学研究』に投稿される論文が多くなり、東アジア日本学研究の活性化が期待できます。一方で不採用、不受理の論文も多くなっており、編集過程を通し、投稿論文の質を上げていくことは大事だと思われます。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

今回も多彩な論文を読ませていただき、たいへん刺激的でした。力作揃いの日本研究からは、学ぶものがいっぱいです。今後も、独創的で深みのある研究論文が寄せられることを楽しみにしています。投稿をお待ちしています。

編集委員 李東軍（蘇州大学教授）

本号ではサブカルチャーの童話絵本や中日また日韓の比較文学など幅広いジャンルにわたっての投稿があり、こちらも新鮮な刺激を受け、よい勉強になりました。皆さんの次回の秋季号への投稿を期待しております。

事務局（学会誌受付担当） 力丸美和（九州大学助教）

日本に関する様々な分野の論文をご投稿いただき、大変勉強になっています。投稿の際に、誤って学会の代表アドレスに投稿される方がいらっしゃいますが、学会誌専用のアドレスは「eaja20172@163.com」です。お間違いないようお願いします。

事務局（学会誌編集補佐担当） 南明世（北海学園大学講師）

4月から事務局員として正式に編集に携わることとなりました南明世です。これまでの経験を活かしつつ、質の高い学会誌をお届けできるよう努めてまいりますので、今後とも皆様のご指導とご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

〔本号の査読者〕(50音順)

安勇花（延辯大学副教授）、加藤恵梨（愛知教育大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）、金光林（新潟産業大学教授）、金斑実（商丘師範学院副教授）、権裕羅（秋田大学助教）、中川良雄（京都外国语大学特任教授）、白曉光（西安外国语大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、南明世（北海学園大学講師）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（山東外事職業大学教授）

東アジア日本学研究 第12号
Japanese Studies in East Asia No.12

2024年9月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com (一般)

eaja20172@163.com (学会誌専用)

住所: 〒143-0012 東京都大田区大森東 1-36-8-218

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
